山形県埋蔵文化財調査報告書　第133集

向山・関沢B遺跡

発掘調査報告書

1988

日本道路公団仙台建設局
山形県教育委員会

むかいやま　せきざわ

向山・関沢B遺跡

発掘調査報告書

昭和63年３月

日本道路公団仙台建設局
山形県教育委員会

序

本報告書は，山形県教育委員会が昭和62年度に日本道路公団仙台建設局より委託を受けて実施した東北横断自動車道酒田線建設の工事に伴う向山遺跡・関沢B遺跡の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

二つの遺跡は，山形市街地より東にある奥羽山系の山間に抱かれた，自然条件に恵まれた所であります。この地域には，山間の平ら所を利用して縄文時代から平安時代にかけての多くの遺跡が点在しております。向山遺跡の調査では，縄文時代と平安時代の集落の一部が明らかとなり，とくに平安時代の竪穴住居跡の検出は山間地での畑作農耕を考える上で貴重な発見であります。関沢B遺跡は，縄文時代から江戸時代までの断続的に人々の生活が営まれ，峠道にかかわる遺跡でもあります。

近年，東北横断自動車道建設をはじめとして埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増える傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と，先人の遺産である埋蔵文化財との間には困難な問題も山積みしておりますが，地域の環境づくり，生活文化の向上とする同一の立場から調整を行ない，今後とも埋蔵文化財保護のため努力を続けてまいる所存です。

本報告書が学術的な資料としてはもとより，多くの方々に文化財についての知識と理解を深めるために，広く活用されることを望む次第です。

終りに酷暑，酷寒の中で調査に従事された宝沢・関沢地区の方々，調査にあたって多大な協力をいただきました関係機関の各位に，厚くお礼申しあげます。

昭和63年３月

山形県教育委員会

教育長　小　野　　孝

例　言

1　本報告書は，山形県教育委員会が日本道路公団仙台建設局の委託を受け昭和62年度に実施した，東北横断自動車道酒田線建設に伴う関連工事に係る，向山遺跡及び関沢B遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　受託期間は昭和62年4月1日から昭和63年3月31日までである。現地調査は，向山遺跡が昭和62年5月13日から同年7月3日までの延べ37日間，関沢B遺跡は昭和62年7月1日から同年8月4日まで延べ23日間実施した。

3　遺跡の所在地は下記の通りである。

向山遺跡　山形県山形市大字下宝沢向山　　(遺跡　No. 2025)

関沢遺跡　山形県山形市大字関沢字大谷沢386—23外　　(新規　昭和55年)

4　発掘調査体制は下記のとおりである。

調査主体　山形県教育委員会

調査担当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者　主任調査員　佐々木洋治（山形県教育庁文化課　埋蔵文化財主査）
〃　佐藤　庄一（同　上　埋蔵文化財係長）
〃・現場主任　佐藤　正俊（同　上　主任技師）
調査員　布施　明子　斎藤　裕幸

事務局　事務局長　後藤　茂彌（山形県教育庁文化課　課長）
事務局長補佐　土門　紹穂（同　上　課長補佐）
事務局員　菅原　徳嘉（同　上　芸術文化主査）
佐藤　大治（同　上　文化財主査）
長谷部恵子・氏家　修一（同　上　主事）
高橋　春雄

5　発掘調査にあたっては，日本道路公団仙台建設局山形工事事務所，山形県土木部高速交通対策室，東南山教育事務所，山形市教育委員会，山形市宝沢地区及び関沢地区，他関係機関より多くの御指導，御協力をいただいた。ここに銘記して感謝申し上げる。

6　本報告書作成は佐藤正俊と布施明子・斎藤裕幸が担当し，佐藤正俊と布施明子がそれぞれ分担執筆した。挿図類の作成にあたっては，澤村正子がこれを補助した。編集は阿部明彦が担当し，佐々木洋治が総括した。

7　調査の諸記録・実測図・写真及び出土遺物は，山形県教育委員会が一括保管している。

凡　　例

1　本報告書で使用した遺構と遺物の分類記号は次のとおりである。

ＳＴ－住居跡　　ＳＫ－土　坑　　ＥＬ－炉　跡　　ＥＰ－柱　穴

Ｙ――床　面　　Ｆ――覆　土　　Ｇ――グリッド

ＲＰ－土　器・土製品　　ＲＱ－石　器・石製品　　ＲＭ－金属製品

2　住居跡・炉跡・土坑等は遺跡ごとに全体に一連番号を付け，柱穴は各挿図ごとに一連の数字を記した。

3　報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1)　遺跡平面図中の方位記号は磁北を示している。またグリッドの南北軸（Ｙ軸）は，向山遺跡がＮ－33°－Ｅ，関沢Ｂ遺跡がＮ－57°－Ｗである。

(2)　挿図縮尺は，遺跡全体図1/2,000，遺構配置図1/200，遺構の住居跡及び土坑は1/60・1/40，炉跡1/20である。遺物については，完形土器1/6，礫石器1/4，それ以外は原則として1/2・1/3縮尺で採録し，各挿図ごとにスケールを付した。また遺構平面図中の網点は礫を表している。

(3)　土器実測図・拓影図中で，黒塗りの断面図は須恵器を示す。

(4)　遺物図版は，原則として土器の破片資料が1/2，完形土器が1/4・1/5，石器は打製石器と磨製石器が1/1.5，礫石器が1/2とした。

(5)　土層注記中の「色調」の記載については，農林省「新版標準土色帖」（1967年度版）に拠った。

目　　次

Ⅰ章　遺跡の立地と環境

1　地理的環境……1

2　歴史的環境……1

Ⅱ章　調査の経過

1　調査に至る経過……4

2　調査の経過……4

(1)　向山遺跡……4

(2)　関沢Ｂ遺跡……5

Ⅲ章　向山遺跡

1　遺跡の概観……6

(1)　調査の方法……6

(2)　遺跡の層序……6

(3)　遺構・遺物の分布……11

2　検出遺構……12

(1)　平安時代の住居跡……12

(2)　縄文時代の住居跡……14

(3)　縄文時代の土坑……18

3　出土遺物……22

(1)　平安時代の土器……22

(2)　縄文時代の土器……22

(3)　石器……34

Ⅳ章　関沢Ｂ遺跡

1　遺跡の概観……43

2　検出遺構……46

3　出土遺物……51

Ⅴ章　調査のまとめ

1　出土土器について……53

2　遺構について……55

（参考文献）……56

挿図目次

第1図　遺跡位置図……3
第2図　向山遺跡全体図……7
第3図　向山遺跡遺構配置図……9
第4図　A地区東側・土層断面図……9
第5図　1・2号住居跡平面・断面図……13
第6図　3・4号住居跡平面・断面図 ……15
第7図　19・20号炉跡平面・断面図 ……16
第8図　5号住居跡・6・7号土坑
平面・断面図……17
第9図　8～10号土坑平面・断面図……19
第10図　11～15号土坑平面・断面図……21
第11図　1号住居跡出土土器実測図 ……23
第12図　2・3号住居跡
出土土器拓影図……25
第13図　4・5号住居跡
出土土器拓影図(1)……27
第14図　5号住居跡
出土土器拓影図(2)……29
第15図　5号住居跡出土土器拓影図(3)…31
第16図　5号住居跡(4)・6号土坑
出土土器拓影図……33
第17図　6・7号土坑出土土器拓影図 ……35
第18図　7～9号土坑出土土器拓影図……36
第19図　9～15号土坑出土土器拓影図 …37
第20図　土製品・完形土器
実測・拓影図……38
第21図　打製石器実測図……41
第22図　磨製・礫石器実測図……42
第23図　関沢B遺跡全体図……44
第24図　関沢B遺跡遺構配置図……45
第25図　1・2号土坑平面・断面図……47
第26図　3・4・7号土坑平面・断面図 ……49
第27図　5号住居跡・6・8・9号土坑
平面・断面図……50
第28図　出土遺物　拓影・実測図……52

付表目次

表－1　遺跡一覧表……2
表－2　向山・関沢B遺跡調査工程表 …5
表－3　打製石器計測表……40
表－4　礫石器・磨製石器計測表……40

図版目次

向山遺跡

図版1　遺跡遠景　遺跡近景

図版2　作業風景（トレンチ粗掘・拡張作業）

図版3　A地区遺構確認状況　遺構検出状況

図版4　1号住居跡　土器出土状況

図版5　2号住居跡

図版6　3・4号住居跡

図版7　5号住居跡・6号土坑

図版8　19・20号炉跡　土層セクション　5号住居跡　遺物出土状況　6号土坑

図版9　7～9・11～15号土坑　土層セクション　B地区土器出土状況

図版10　10号土坑　埋設土器出土状況

図版11　3号住居跡出土土器

図版12　4号住居跡出土土器

図版13　5号住居跡出土土器

図版14　5号住居跡出土土器

図版15　5号住居跡出土土器

図版16　6・7号土坑出土土器

図版17　8・9号土坑出土土器

図版18　9号土坑出土土器　10～15号土坑出土土器

図版19　1号住居跡出土土器　土製品

図版20　完形土器

図版21　打製石器　石製品

図版22　礫石器

関沢B遺跡

図版23　遺跡全景

図版24　調査風景　遺構完掘状況

図版25　1・2号土坑

図版26　4号土坑　5号住居跡・8号土坑

図版27　9号土坑　出土遺物

図版28　出土遺物

Ⅰ章　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

向山・関沢B両遺跡は共に，山形市街地の東南部を流れる最上川水系，馬見ケ崎川流域の上流に位置している。馬見ケ崎川は，上流は蔵王連邦の龍山・熊野岳等を源として北西に流れ，坊原付近で滑川と合流し，下流になると徐々に広がりをみせる馬見ケ崎川扇状地を形成して，山形盆地の一角をなしている。

(向山遺跡)

向山遺跡は，山形市大字下宝沢字向山に所在する。馬見ケ崎川上流右岸の低位の河岸段丘上の洪積地にある。遺跡付近の河原には，大きな礫が散在し，過去の川の動きを推定することが出来る。また流れの山裾では川に向かって所々に小谷が発達し，小扇状地や段丘を形成している。

遺跡は，山形市街地からは，およそ8㎞東南の方向に入った所にある。馬見ケ崎川の河原から約130m，北側の山際からは約60mを測る位置で，海抜は336～340mのライン上である。遺跡の集落中心部は，発掘調査をした場所よりもやや河原寄りであると思われる。ここの地目は畑地で，周辺も畑地や果樹園として利用されている。現在の集落は，段丘地面上に乗るように，対岸の左岸に細長い形に発達している。

(関沢B遺跡)

関沢B遺跡の所在地は，山形市大字関沢字大谷沢（おおたにざわ）である。関沢地区は，馬見ケ崎川の支流の一つである滑川（なめかわ）左岸の最上流域の舌状台地上に立地する。元は「関根」と呼ばれており，奥羽山脈越えで山形と太平洋岸側を結ぶ旧笹谷街道の街道筋に発達した集落である。宮城県との県境に近く，山形の市街地からは約9㎞程である。

関沢B遺跡は，関沢の集落の上に位置し，その標高は588～599mを測る。全体的には東から西に向かって緩やかに傾斜し，その東端と西端ではかなりの比高差がある。遺跡を取り囲むような形で国道286号線がカーブを描き，笹谷トンネルに至っている。地目は荒地であるが，周辺は宅地，畑地，山林となっている。

2　歴史的環境

この馬見ケ崎川上流域には，図にも示したとおり河川に沿って数多くの遺跡が点在している。以下，馬見ケ崎川上流から扇状地の扇端部までの間に位置している，縄文時代から平安時代に至る遺跡の分布状況について，簡単に述べてみたい。

これらの中でも最も古い時期に営まれたと考えられるのは，上山家地区の縄文時代早期

～前期の，にひゃく寺遺跡で，その位置する山裾の入り組んだ地形は，かなり早いうちから安定していたようである。また，月夜川上流にある宇津野原遺跡は縄文早期に始まり前・中・後期と時期的に幅の広い遺跡である。流域内に早期３遺跡，前期３遺跡がある。

縄文中期の遺跡は他のどの時期のものよりも圧倒的に数が多く，30ケ所近くが川沿いと扇状地上に分布している。その中で，現山形県庁近辺に所在した熊ノ前遺跡や山形西校敷地内遺跡等が発掘調査されている。熊ノ前遺跡は中期（大木８～10式期）の大集落跡である。

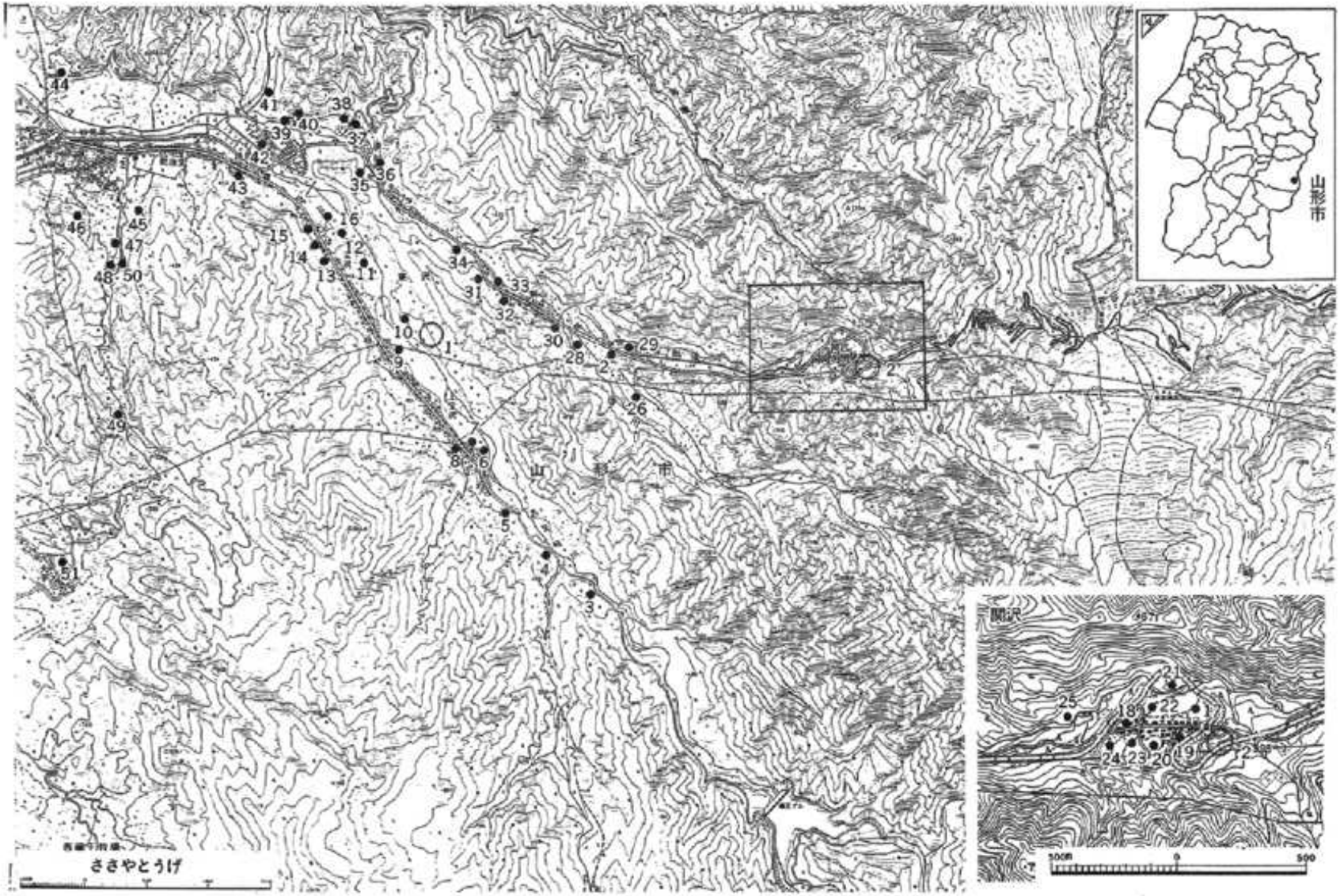
つづく縄文後期から晩期にかけては，松留Ｂ遺跡と下宝沢遺跡が知られるが，これは向山遺跡と時期的に並行しており，３遺跡とも宝沢地区内の馬見ケ崎川に沿った比較的段丘の広い地域に近在して立地している。また，晩期の遺跡は妙見寺にも妙見寺Ｂ遺跡や千葉屋敷遺跡がある。確認された後期の遺跡は８ケ所，晩期は11ケ所を数えている。

弥生・古墳・奈良時代には山地から平地に移り住んだのか，この流域には明確な遺跡は見付かっていない。しかし平安時代に入ると，再び遺跡の数は一気に増え，確認された所だけでも19ケ所にのぼる。

馬見ケ崎川流域の段丘や平地に点在するこれら遺跡群の性格を知るうえで，向山・関沢Ｂ両遺跡は良質の資料を提供している。

表－１　遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	向山遺跡	縄文・後・晩期 平・安	18	関沢Ａ遺跡	縄 文 平 安	35	滑川Ｂ遺跡	平 安
2	関沢Ｂ遺跡	縄 奈良・平 文 安	19	関沢Ｃ遺跡	縄 文	36	滑川Ｃ遺跡	縄 文
3	毛栗平遺跡	縄 文 中 期	20	関沢Ｄ遺跡	縄 文 中 期	37	滑川Ｄ遺跡	縄 文
4	王子向遺跡	縄 文 中 期	21	関沢Ｅ遺跡	縄 文 中 期 平・安	38	尺の上遺跡	縄 文 平・安
5	上野原遺跡	縄 文 中 期	22	関沢Ｆ遺跡	縄 文	39	ひどろＡ遺跡	縄 文 平・安
6	松留Ａ遺跡	縄文 中・晩期	23	大谷沢Ａ遺跡	縄 文 早 期 平・安	40	ひどろＢ遺跡	縄 文
7	松留Ｂ遺跡	縄文 中～晩期	24	大谷沢Ｂ遺跡	縄 文 晩 期	41	境谷沢遺跡	平 安
8	反目遺跡	縄 文 中 期	25	休石遺跡	縄 文 中 期	42	坊原Ａ遺跡	不 明
9	小塩沢遺跡	縄 文	26	宇津野原遺跡	縄文 早～後期	43	坊原Ｂ遺跡	不 明
10	下宝沢遺跡	縄文 後・晩期 平・安	27	岩ノ沢遺跡	縄 文 中 期	44	西の沢遺跡	縄 文
11	元屋敷Ａ遺跡	縄 文 中 期	28	新山Ａ遺跡	縄文 前・中期	45	釈迦堂裏遺跡	縄 平 文 安
12	元屋敷Ｂ遺跡	縄 文	29	新山Ｂ遺跡	縄文 前・晩期 平・安	46	前ノ沢遺跡	縄 平 文 安
13	銅宝沢遺跡	縄文 早・中・晩期 平・安	30	新山Ｃ遺跡	平 安	47	妙見寺Ａ遺跡	縄 文・晩 期
14	姫沢Ａ遺跡	縄文 中・後期	31	新山Ｄ遺跡	縄文 中～晩期	48	妙見寺Ｂ遺跡	縄 文 晩 期
15	姫沢Ｂ遺跡	平 安	32	新山Ｅ遺跡	縄 文	49	妙見寺Ｃ遺跡	縄 文
16	前原遺跡	縄 文 中 期	33	新山Ｆ遺跡	縄 文	50	千葉屋敷遺跡	縄 文 晩 期 古 墳
17	下橋遺跡	縄 文 中 期	34	滑川Ａ遺跡	縄 文	51	八森遺跡	縄 文



第1図　遺跡位置図（S＝1/50,000）

II章　調査の経過

1　調査に至る経過

東北横断自動車道酒田線は「国土開発幹線自動車道建設法」に基づいて，奥羽山脈や出羽丘陵を東西に連抜いて日本海側に達する高速道路である。建設は，昭和48年と53年に寒河江と東山形区間の整備計画が決定し，それぞれ施行命令が出されている。路線の選定にあたっては，環境アセスメントを始め文化財の有無などの公共事業との関連調査等が必要であり，文化財保護との連絡，調整については山形県教育委員会が主体となって，昭和50・51年と55年に遺跡詳細分布調査などを実施した。

その結果に基づいて，日本道路公団仙台建設局・山形県土木部などの関係諸機関との協議を重ねた結果，用地買収後に記録保存で対処する遺跡として，①境田C遺跡（S56年），②境田Ć・D遺跡（S57年），③お花山古墳群（S57・58・61年），④物見台遺跡（S58・59年），⑤達磨寺遺跡（S58・59年），⑥にひゃく寺遺跡（S59年），⑦新山A遺跡（S61年）の7ケ所があり，それぞれ緊急発堀調査を実施した。

今回の向山・関沢B遺跡は，第7次（関沢～釈迦堂）区間内に係るため，昭和60年度より，日本道路公団等関係機関と協議を重ねて，昭和61年10月に分布試堀調査を行ない，昭和62年度中に緊急発堀調査を実施することで合意が得られた。

2　調査の経過

（1）向山遺跡　（表－2）

発堀調査は昭和62年5月13日から7月3日（延37日間）に亘って実施したものである。

5月13日（水）～15日（金）　現場への器材搬入と環境整備，関係機関参加のもと簡単な鍬入式を行なう。グリッド設定と並行して調査区中央より粗掘作業を開始する。

5月18日（月）～21日（金）　A地区東の粗掘作業終了後，遺構確認のためさらにIII層まで掘り下げ，面整理と同時に東側一帯を拡張する。A地区西側の粗掘作業を開始。

5月25日（月）～29日（金）　東側のIII層中において遺構検出面が不明確なため，10cmづつ掘り下げ面整理作業を実施。基準土層セクションの実測と写真撮影。

6月1日（月）～5日（金）　A地区の遺構検出状況が明確になったため，2号住居跡より遺構の精査作業に入る。順次縄文時代住居跡などの精査・検出作業にとりかかる。

6月8日（月）～12日（金）　A地区住居跡と土坑の精査・検出作業と，それぞれの土層セクション実測と写真撮影作業の実施。

6月15日（月）～19日（金）　A地区各遺構の完掘と全景写真の撮影。B地区の東側よ

り粗掘作業を開始する。

6月22日（月）～26日（金）　A地区の平面実測作業。B地区の粗掘り作業と精査作業を終了する。C地区粗掘作業開始。6月26日現地説明会を開く。

6月30日（月）～7月3日（金）　各遺構の記録作業が終了。7月3日で調査を終了。

（2）関沢B遺跡　（表－2）

発掘調査は昭和62年7月1日から8月3日（延33日間）に亘って実施したものである。

7月1日（月）～3日（金）　器材の搬入と調査区内の草刈と伐採作業を行なう。

7月6日（月）～10日（金）　グリッド設定後，キ字状にトレンチを入れて東側より粗掘作業を開始する。調査区の西側で土坑・溝状遺構を確認する。

7月13日（月）～17日（金）　調査区西側で遺構を確認したため，重機械を使用して拡張する。面整理作業による遺構検出を行なう。

7月20日（月）～31日（金）　遺構精査と検出作業，各種の記録作成を実施する。

8月3日（月）～4日（火）　記録の作成と器材の搬出作業。

表－2　向山・関沢B遺跡調査工程表

遺跡名		向山遺跡								関沢B遺跡					
月		5月			6月					7月					8月
日		13日～15日	18日～21日	25日～29日	1日～5日	8日～12日	15日～19日	22日～26日	30日～7/3日	1日～3日	6日～10日	13日～17日	20日～24日	28日～31日	3日～4日
実調査日数		3日	4日	5日	5日	5日	5日	5日	4日	3日	4日	5日	5日	4日	2日
準備	器材搬入・撤収	■								■					
	発掘区設定	■									■				
粗掘り	トレンチ掘り	■	■	■			■	■			■	■	■		
	重機使用											■			
面検査	面整理		■	■			■	■				■	■		
	遺構検出			■	■	■	■						■		
遺構精査	A区 住居跡				■	■	■	■							
	土坑						■	■	■				■	■	
	B・C区						■	■	■						
測図作業	土層断面			■	■	■	■						■		
	平面実測							■	■					■	■
	レベル測定							■	■					■	■
写真	全体写真	■			■		■	■	■		■				■
	細部写真		■	■	■	■	■	■	■			■	■	■	■
備考	現地説明会							26日							3日

Ⅲ章　向山遺跡

1　遺跡の概観

（1）調査の方法

今回の発掘調査は，馬見ケ崎川によって開析された山麓地帯の河川段丘上面，遺跡の北側山裾付近を東北横断自動車道に伴う関連工事用道路の敷地内を対象とし，調査面積約970㎡を実施したものである。調査区は，東西に細長く延びるため便宜上，発掘調査を西からA・B・C地区と仮称した。とくに，遺構や遺物が密集するA地区を重点に発掘調査を進め，A地区の東側から西側にかけて調査をしたもので，順次B・C地区と拡張作業を実施したものである。

発掘調査は，事業区内全体にグリッドを設定し，グリッドの基線を道路施工センター杭の5－15グリッドとして，グリッド基線のY軸方向はN－56°－Eを計り，3×3mを一単位とするグリッドを設定する。調査は，調査区の中央Y軸15列より東西にトレンチ状に長く，東側から西側へと粗掘作業を開始し，A地区の全域について人力によって大きく拡張し，順次調査を進めた。（第2図　図版2）

調査の進行状況（表－1）は，第一段階で中央にトレンチを入れ遺構の確認面や遺物の包蔵状態を確認する粗掘作業を実施し，第二段階は確認した遺構検出区を拡張し，同時に面整理作業を実施，第三段階では確認した遺構の精査・検出作業を，第四段階で遺構・遺物全体の記録作業，さらにB・C地区の精査作業を行った。

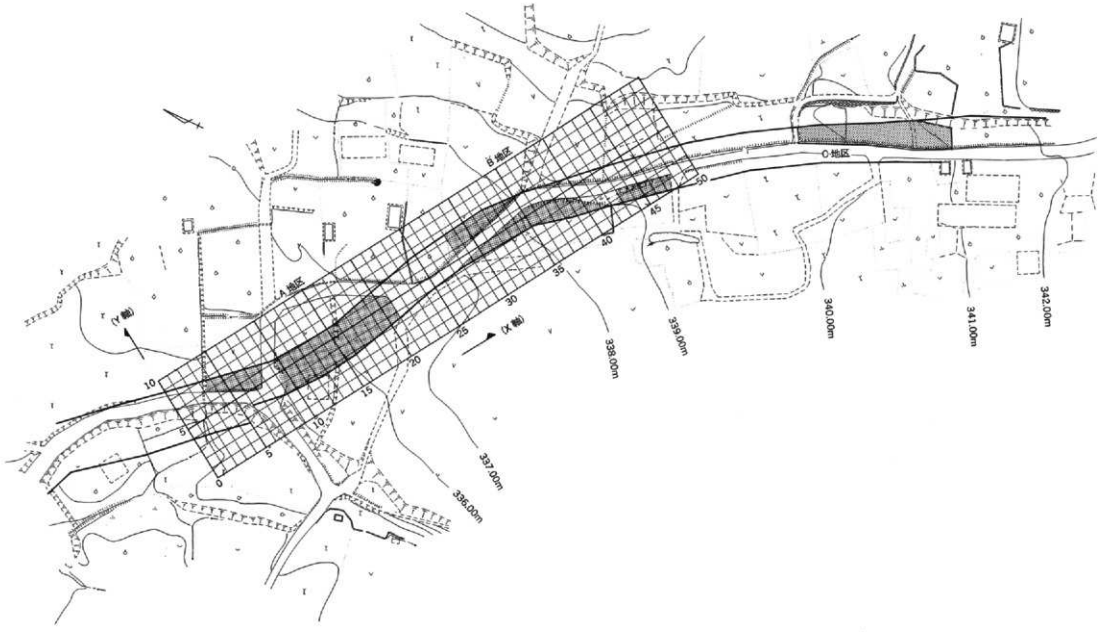
（2）遺跡の層序

本遺跡は，馬見ケ崎川によって開析された山麓部の沖積河川段丘の高位面に立地し，全体として東側が高位で，西側に向けて緩やかに低位になり傾斜している。遺跡の北側から東側にかけては果樹地帯（桜桃畑）で，南側から西側は畑地となっている。調査区は，西側の段丘端から中央部の平坦部，東側の緩傾斜地までである。東側では風化礫が表層よりみられ表土下25～30cmで砂礫層となっている。西側端の付近は畑地耕作により大部分攪乱を受けている。

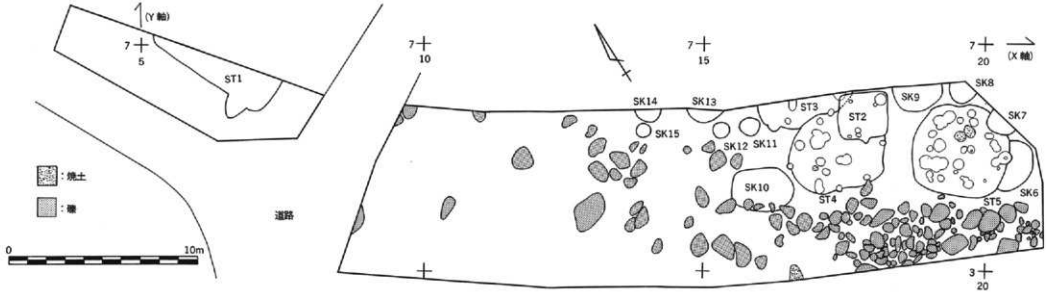
遺跡の基本的な層序は，次の5層に大きく分けられる。（第4図）

Ⅰ層　褐色土　粗砂質　畑地による耕作土。特に西側で攪乱が著しい。厚さ20～40cm。

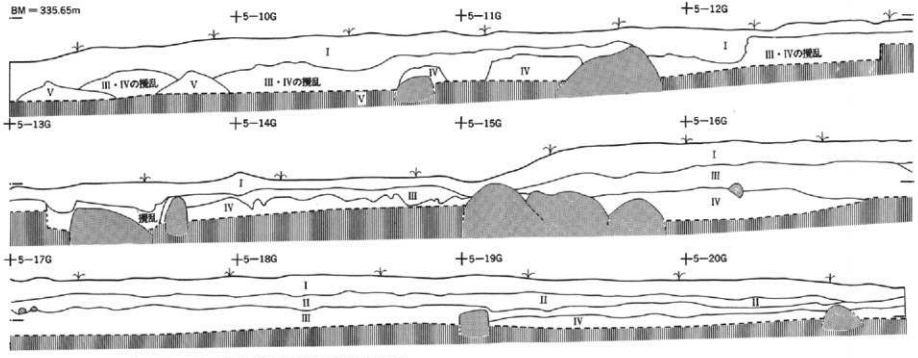
Ⅱ層　黒褐色土　細砂質　炭化粒子を含みやや堅くしまっている。厚さ25～30cmである。平安時代の土器片が包含され，Ⅱ層下部で2号住居跡が確認さ



第２図　向山遺跡全体図（S＝1/2,000）



第３図　向山遺跡遺構配置図（S＝1/200）



I　褐　色　7.5YR3/4　粗砂質　小礫を含み，粒子が粗くさらさらしている
II　黒褐色　7.5YR3/2　細砂質　炭化粒子，土器片を含む，粒子が細かく，粘性あり
III　黒　色　7.5YR1.7/1　微砂質　炭化粒子，花崗岩粒子，土器片を多量に含み色調は暗い，堅くしまりがある
IV　黒褐色　7.5YR2/2　粗砂質　攪乱，黒褐色，黄橙色が混じる，粒子は粗く全体的に黄橙色味を帯びている
V　黄橙色　10YR7/8　粗砂質　小礫を多量に含む

第４図　A地区東側土層断面（S＝1/60）

れた。X軸の17列東側に検出される。

III層　黒色土　微砂質　多量の炭化粒子・風化礫粒が混じる。厚さ12～42cmである。A地区の全体とB地区の中央部で認められる。縄文時代の遺物包含層であり，中部から下部にかけて3～5号住居跡や6～9号土坑の確認面である。

IV層　黒褐色土　粗砂質　若干の粘質土でやや堅くしまっている。厚さ30～35cmである。西側では果樹耕作によりIIIとIVが混じり攪乱している。

V層　黄橙色土　粗砂質　地山であり小礫・砂粒が多量に混じる。遺構の床面あるいは底面を形成している。

（3）遺構と遺物の分布

本遺跡で検出した遺構は，竪穴住居跡5棟（平安時代2棟・縄文時代3棟）・土坑9基（いずれも縄文時代）である。遺構は大きく分けて平安時代と縄文時代に分けられ，A地区に集中しB・C地区では検出されなかった。（第3図）

平安時代の住居跡は，西側の段丘端とA地区の東側に分かれ，2号住居跡は縄文時代の住居跡群と重複している。いずれも隅丸方形を呈し，カマドを有する住居跡である。

縄文時代の遺構は，A地区の中央付近で第三層上面の堆積状態がレンズ状の緩傾斜地となっていたため，中央部から東側にかけて住居跡や土坑が集中しており，2号住居跡を境界として大きく後期と晩期に分けられる。縄文時代後期の分布は，3・4号住居跡は重複しその西側に接して，3号住居跡西側で11号土坑，4号住居跡西側で10号土坑がある。さらに11号土坑の西側には12～15号土坑が連らなるように隣接している。他方晩期は，5号住居跡を中心に東側から北側にかけて隣接あるいは重複する。5号住居跡東側では6・7号土坑が住居跡と重複，北側では8・9号土坑が隣接している。なお，第II～V層中で調査区の中央から東にかけて，人頭大からの巨礫が不規則に検出されているが，恐らく縄文時代以前の河川氾濫とみられる堆積した礫群である。

今回の調査で出土した遺物は，整理箱に27箱で，うち土器24箱・石器3箱を数える。遺物の大部分は第II層から第III層の遺物包含層と住居跡や土坑内の覆土層から出土している。

遺物の出土状況は，調査区の中央部から東側の北寄りにかけて最も多く出土し，縄文時代後期から晩期にかけての遺物が主体を占め，A地区西側とB・C地区では希薄となる。遺構内から出土した遺物は，1・2号住居跡のカマド周辺部から平安時代の土器片が出土し，縄文時代の遺物は5号住居跡の覆土上層から中層にかけ集中出土し，6～9号土坑では中層から下層にかけて多く出土している。

2　検出遺構

（1）平安時代の住居跡

1号住居跡（第5図　図版4）

調査区の西の端，A地区の5～7－5～7グリッド第Ⅲ層上面にて検出された竪穴住居跡である。住居跡の北側部分は今回の調査区域より外れたため未調査であるが，検出部分での遺存状態は良好である。他との重複関係はない。平面形は矩形と考えられる。

規模は不明だが，南辺で7.0m，東辺で2.94mを測り，検出面積は約10.5㎡であった。

主軸方位は磁北を基準にしてN－27°－Wである。床面から壁上面までの高さは15～19cmをもち，急激な立ち上がりをみせる。周溝は認められない。床面はほぼ平坦で，西面付近（RP28の出土地点周辺）が特に堅くなっている。柱穴は検出されなかった。

この住居跡の覆土内にはかなりの範囲にわたって焼土と炭化物が混じり，火災にあった可能性が考えられる。

南面壁の東寄りに，住居跡から突き出た形でカマド（EL16）が検出された。遺存状態は悪く，煙道と焚き口近辺に焼土が検出されたのみである。主軸方位は磁北からN－63°－Eを測る。規模は袖長が95cmで袖幅と高さは不明である。現存している煙道は長さがおよそ1.30m，幅約1.30mを測る。カマド焚き口付には15～45cm程度の礫が残っているが，焼けて赤くなっているため，カマドの支脚（袖石）として使われていたと考えられる。出土遺物は，須恵器の坏（第11図10）が1点カマド焚き口そばから，土師器（第11図1～6）が一括して出土した。

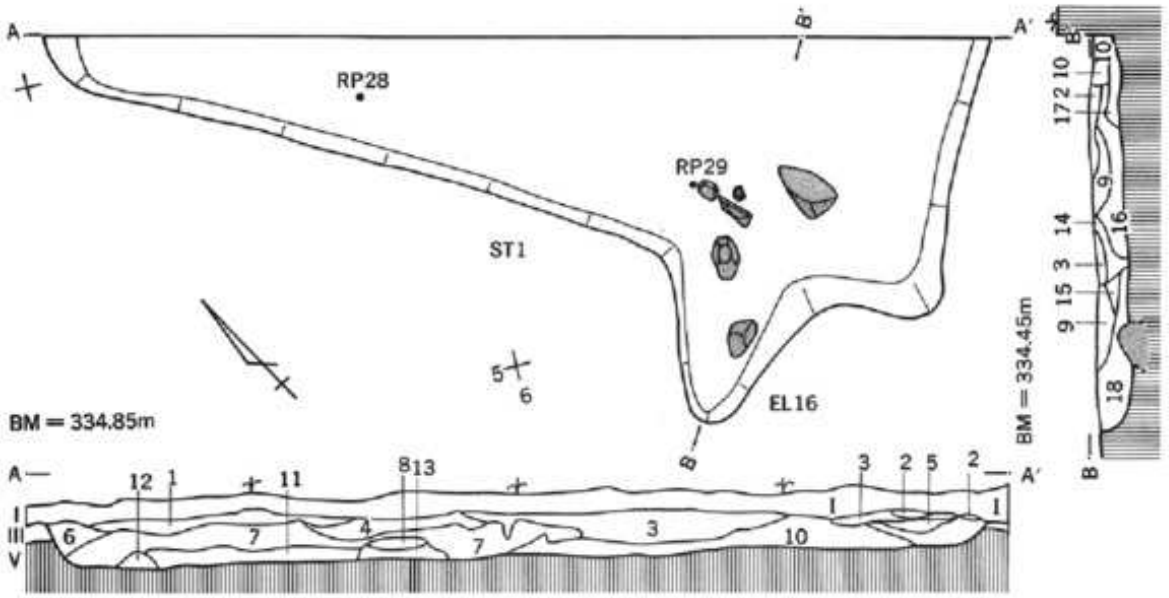
2号住居跡（第5図　図版5）

A地区中央部西寄り，17・18－6・7グリッドの第Ⅲ層中位にて検出された竪穴住居跡である。遺存状態は良好で，全範囲検出された。3・4号住居跡と重複し，新旧については3・4号住居跡よりも新しい。平面形は隅の丸い方形を呈し，規模は南北を長軸とすると長軸3.47m×短軸3.14m，面積約10.85㎡を測る。

方位は磁北を基準としてN－60°－Eである。壁は床面から急激な立ち上がりをみせ，高さは約20cmである。床面は第Ⅴ層まで掘りこんであり，堅い。周溝は検出されなかった。柱穴は，支柱穴が3個（EP1～3）と，その他縄文時代のものと思われる柱穴が2個検出された。床面からの深さは約18～27cmであるが，EP3のみ約70cmを測った。

カマドは遺構南面の中央部に位置する。全体的に遺存状態は良くなく，袖の規模は不明である。煙出し部は長さ約30cm・幅約25cm検出されたが，焼土が少し残るのみであった。主軸は遺構と同様，N－60°－Eを測る。

遺物はプラン検出時に須恵器と土師器が出土したが，床面からの出土はない。

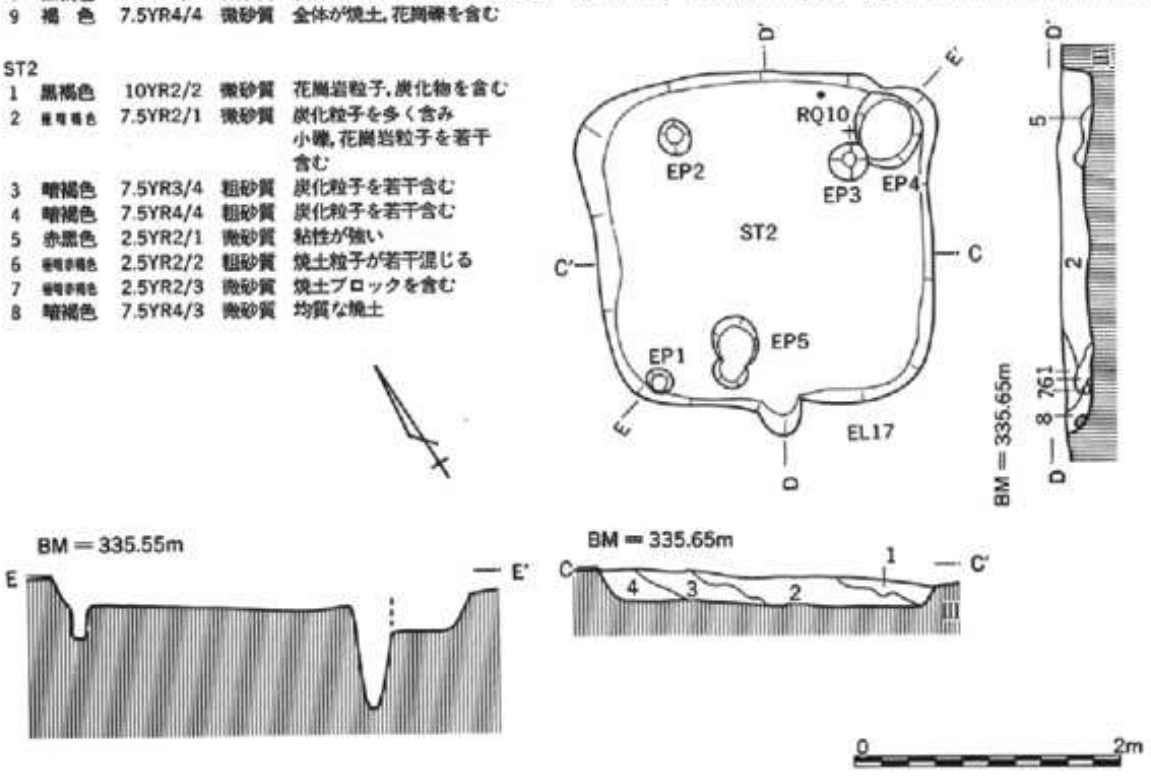


ST1

1	黒褐色	7.5YR2/2	微砂質	花崗岩粒子，炭化物を含む
2	黒褐色	10YR3/2	微砂質	花崗岩粒子，炭化物を含み細砂を若干含有
3	黒褐色	2.5YR3/2	微砂質	花崗岩粒子，小量の粗砂含有
4	暗褐色	7.5YR3/3	微砂質	炭化物，粗砂を含む
5	黒褐色	10YR2/3	細砂質	花崗岩粒子，粗砂を含む
6	黒褐色	10YR2/3	微砂質	花崗岩粒子，炭化物，粗砂を含む
7	暗褐色	7.5YR3/2	微砂質	花崗岩粒子，炭化物，粗砂を含む
8	黒褐色	7.5YR3/2	微砂質	炭化物，若干の焼土，土器片含む
9	褐　色	7.5YR4/4	微砂質	全体が焼土，花崗礫を含む
10	黒褐色	7.5YR2/2	微砂質	花崗岩粒子，粗砂を含み小量の焼土を含む
11	黒褐色	5YR3/1	微砂質	花崗岩粒子，粗砂を含み，堅い
12	黒褐色	10YR3/1	微砂質	若干の粗砂を含み，さらさらしている
13	暗褐色	10YR3/4	細砂質	全体が細砂土，粗砂をやや含む
14	暗褐色	10YR3/4	細砂質	粗砂を含み，若干の焼土を含む
15	暗褐色	10YR3/3	細砂質	大量の粗砂と若干の焼土を含む
16	黒褐色	10YR2/2	微砂質	粗砂，小量の焼土が混じる
17	黒褐色	10YR2/3	微砂質	粗砂，小量の焼土含む
18	黒褐色	10YR2/3	微砂質	花崗岩粒子，粗砂を含み，焼土含有

ST2

1	黒褐色	10YR2/2	微砂質	花崗岩粒子，炭化物を含む
2	暗褐色	7.5YR2/1	微砂質	炭化粒子を多く含み小礫，花崗岩粒子を若干含む
3	暗褐色	7.5YR3/4	粗砂質	炭化粒子を若干含む
4	暗褐色	7.5YR4/4	粗砂質	炭化粒子を若干含む
5	赤黒色	2.5YR2/1	微砂質	粘性が強い
6	暗赤褐色	2.5YR2/2	粗砂質	焼土粒子が若干混じる
7	暗赤褐色	2.5YR2/3	微砂質	焼土ブロックを含む
8	暗褐色	7.5YR4/3	微砂質	均質な焼土



第5図　1・2号住居跡平面・断面図

（2）縄文時代の住居跡

3号住居跡（第6図　図版6）

A地区東の中央部東寄り，15～17－6・9グリッド第Ⅲ層中位で検出された竪穴住居跡である。遺存状態は良好だが，北側1/3以上は調査区よりはずれ，未検出である。東側で2号住居跡，南側で4号住居跡と重複しており，いずれも第Ⅲ層を掘り込んで造られている。新旧関係は（旧）ＳＴ4→ＳＴ3→ＳＴ2（新）の順である。

部分検出のため平面形は確認出来ない。規模は検出部分で長軸5.08m×短軸1.42mを測る。壁は立ち上がりが急で，約21～26cmの高さを持つ。南面西寄りに凸部が2段になって検出されているが，その部分は堅くなっている。断定は出来ないが出入り口の可能性がある。床面はほぼ平坦である。柱穴は支柱穴が3個（ＥＰ1～3）で，大きさは45～73cmで，床面からの深さは約15～20cmであるが，その構成は不明である。

4号住居跡（第6図　図版6）

A地区東，16～18－5・6グリッド第Ⅲ層中位にて検出された竪穴住居跡で，2・3号住居跡と重複しており，この内で最も古い。検出部分での遺存状態はほぼ良好である。北側が重複による破壊を受けているため平面形は不明であるが，おそらく不整の楕円形を呈すると思われる。規模は，長径の方向が磁北からみてN－20°－Wとすると，長径約5.40m×短径4.05mを測る。

壁は緩やかに立ち上がり，床面からプラン確認面までの高さは9～17cmある。周溝は認められない。床面はほぼ平坦で，柱穴は支柱穴が12個検出された。その内ＥＰ8～ＥＰ15は壁面に沿った壁柱穴である。またＥＰ7は出土遺物から平安時代の所産と見られる。支柱穴は主に円形で，規模は30～50cmあり，床面からの深さは15～25cm程である。

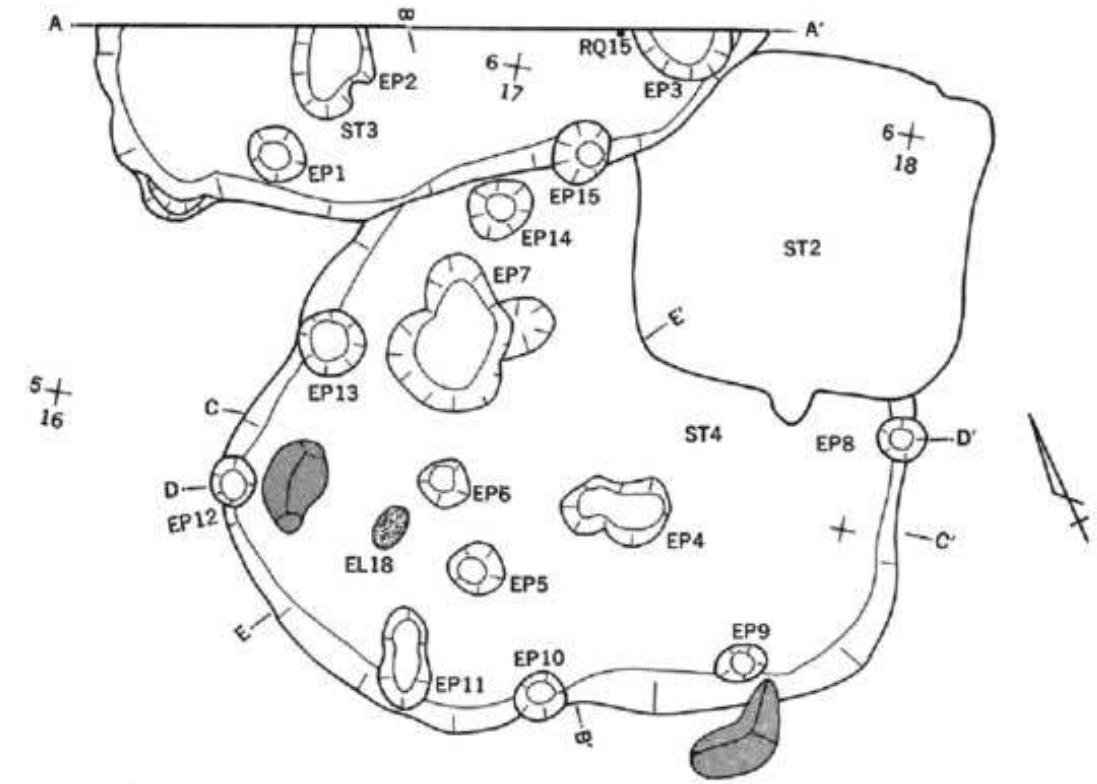
炉跡（ＥＬ18）は，住居跡南西部分に位置する地床炉である。検出は焼土のみで，遺存状態はあまり良くない。平面形は東西に長い楕円形を呈し，長径33cm×短径22cm，焼土の厚さは約3cmである。

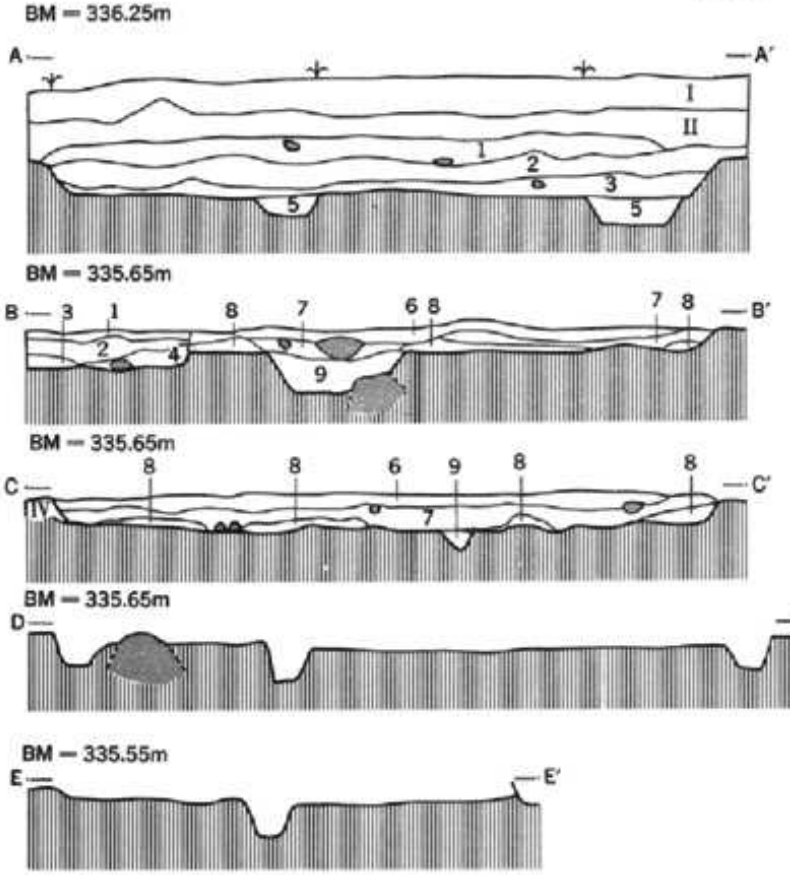
遺物はさほど多くはないが，ＥＰ7・11・13からは，縄文時代後期の土器が数十点出土している。このうちＥＰ7には平安時代の土師器が混じっていた。また炭化したとちの実も出土した。

5号住居跡（第8図　図版7・8）

A地区の西端，18～20－5・6グリッド内第Ⅲ層中位で検出された竪穴住居跡である。遺存状態は良好で，東側で6号土坑と，北東側で7号土坑と重複している。その新旧関係は6号土坑→5号住居跡→7号土坑の順で新しい。また南側は自然礫群と隣接している。

平面形は不整の隅丸方形を呈し，規模は長径5.05m×短径4.85mを測る。磁北を基準と





ST3

1	黒褐色	5YR3/1	微砂質	花崗岩粒子,炭化物を含む
2	黒褐色	5YR2/1	微砂質	花崗岩粒子,炭化物を含む
3	黒　色	5YR1.7/1	微砂質	花崗岩粒子炭化物を含む
4	暗褐色	5YR2/3	粗砂質	花崗岩粒子を含む
5	黒褐色	5YR2/2	微砂質	花崗岩粒子を含む

ST4

6	黒褐色	5YR3/1	微砂質	炭化粒子,粗砂を含む
7	黒褐色	5YR2/2	微砂質	花崗岩粒子含有
8	褐色	5YR2/3	微砂質	花崗岩粒子,粗砂を含む
9	暗褐色	5YR3/2	微砂質	炭化物を含む

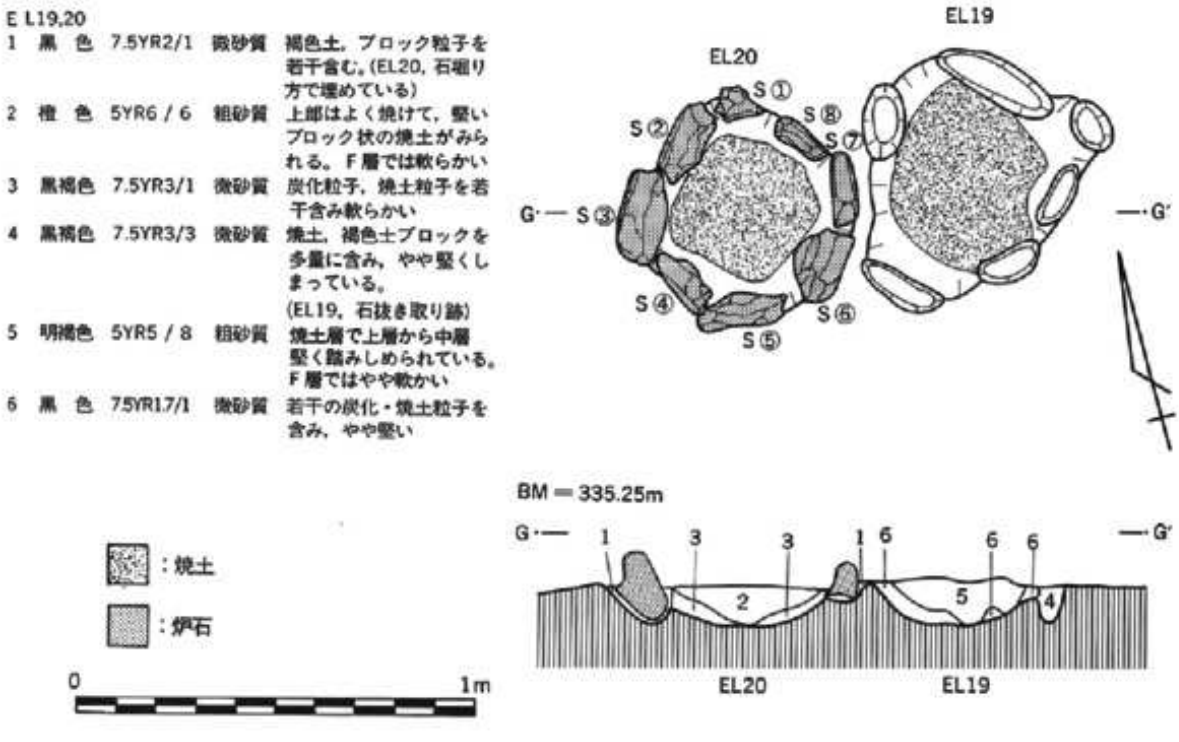
0　2m

第6図　3・4号住居跡平面・断面図

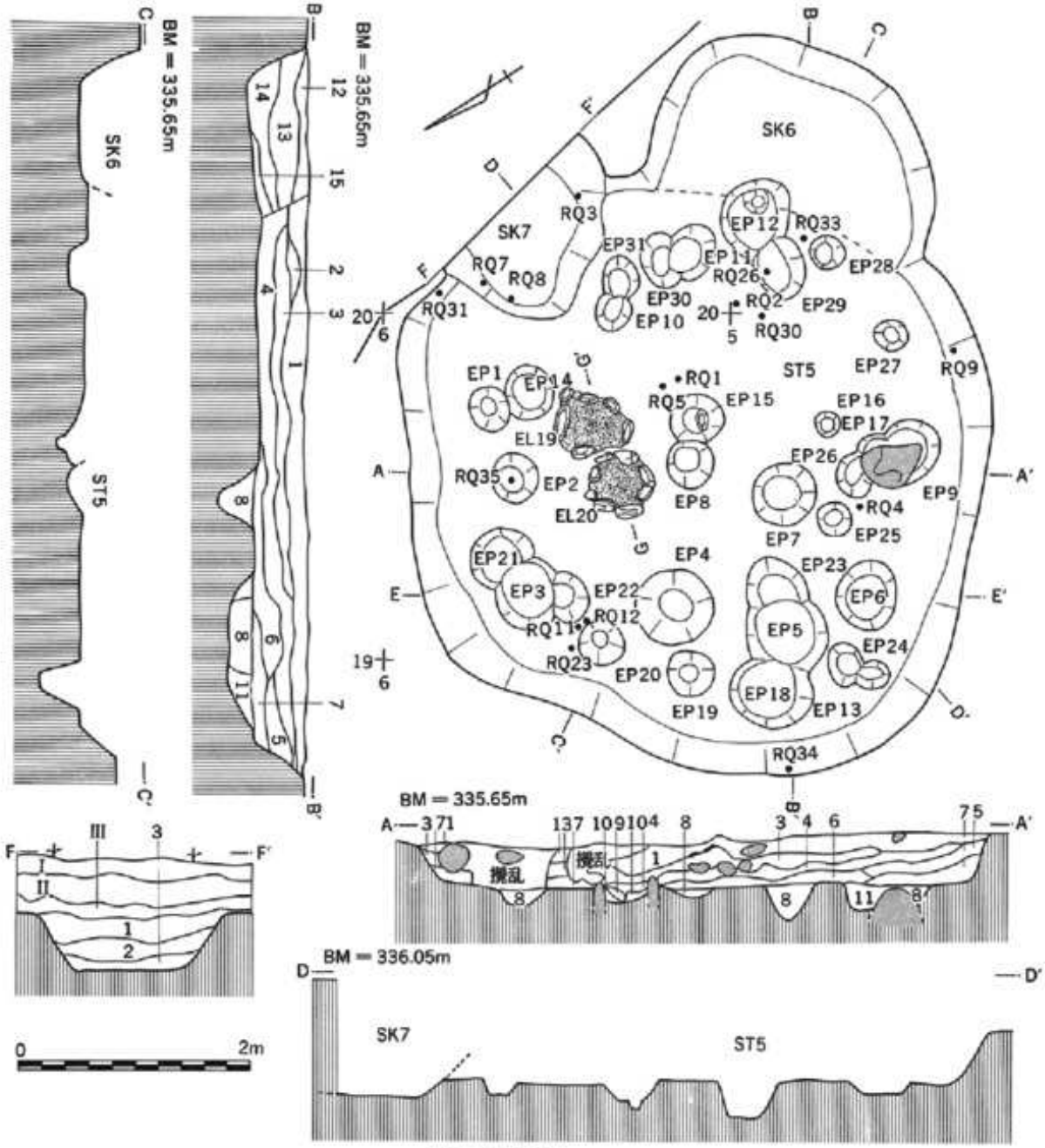
した長径の方位はN－33°－Wである。壁は急斜度をもって立ち上がり，床面から壁面までは約30～46cmの高さをもつ。床面は平坦で，炉周辺とその南側から西壁中央部分が特に堅く踏み締められることから，西壁中央部には出入口があったと考えられる。

柱穴は合計31個検出されたが，その覆土の状況と配列からＥＰ１～13までとＥＰ14～31に分類される。配列は東側では明確ではないが，西側の配列からＥＰ１～９・13を使用した住居跡と，ＥＰ14～22・25・26を使用した住居跡があり，住居の拡張または建て替えが行われたと考えられる。ＥＰ１からの住居よりＥＰ14からの住居の方が新しい。

炉跡は，住居跡の中央北寄りに石囲い炉が２基並んで検出された。平面形はどちらも矩形である。ＥＬ19（第７図　図版８）は，長径をN－43°－Ｅとすると長径69cm×短径57cmである。礫の抜き取りピットが６個検出されているが，いずれも不整の楕円形を呈し，大きさ13～33cm，床面からの深さ９～15cm，埋めもどされている。焼土の深さは床面から10～12cm程である。ＥＬ20は，長径方向がN－80°－Ｅで長径60cm×短径52cm，床面からの焼土の深さは約10cmある。石囲い炉の炉石が８個遺存しており，石質は安山岩と花崗岩である。擦り痕のある礫は石皿の転用と思われる。礫の大きさは12～22cm程で，Ｓ①～⑧の順序で規則的に配置されている。このＥＬ20は住居建て替えの際ＥＬ19を壊して新しく構築したものと見られる。その際抜き取った礫をＥＬ20に使用した可能性が高い。



第７図　19・20号炉跡平面・断面図



SK7

1	黒褐色	7.5YR2/2	粗砂質	豆粒大の炭化物 土器片を含む
2	黒褐色	7.5YR3/1	粗砂質	炭化物，土器片を含む，粘性が強い
3	黒褐色	7.5YR3/1	シルト質	粘性があり，軟かい，この内4割程，7.5YR3/2が混じる。

ST5

1	赤黒色	2.5YR2/1	微砂質	花崗岩粒子，炭化粒子を含む
2	黒褐色	7.5YR3/3	微砂質	炭化物を含み，多量の焼土がある
3	赤黒色	2.5YR2/1	微砂質	花崗岩粒子，炭化粒子を含む
4	赤黒色	2.5YR2/1	微砂質	花崗岩粒子を含む
5	黒褐色	5YR3/1	微砂質	花崗岩粒子，炭化粒子を含む
6	黒褐色	5YR3/2	微砂質	花崗岩粒子，炭化粒子を含む
7	黒褐色	5YR3/2	微砂質	小礫，炭化粒子を含む
8	黒褐色	5YR2/2	微砂質	花崗岩粒子を含む
9	橙　色	5YR6/6	粗砂質	堅いブロック状焼土
10	黒褐色	7.5YR3/1	微砂質	炭化粒子，焼土粒子を若干含む
11	黒褐色	5YR2/2	微砂質	小礫，炭化粒子を含む

SK6

12	黒褐色	5YR2/2	微砂質	炭化粒子を含み，粗砂混入
13	黒褐色	5YR2/1	微砂質	花崗岩粒子，炭化粒子を含む
14	黒褐色	5YR2/1	微砂質	炭化粒子を含み，粘性をもつ
15	黒　色	5YR1.7/1	微砂質	炭化粒子を含み，粘性が強い

第8図　5号住居跡・6・7号土坑平面・断面図

（3）縄文時代の土坑

向山遺跡で検出された土坑は，総数で10基であり，それらはすべてA地区東側の中央から東寄りに位置している。

6号土坑（第8図　図版7）

A地区の東端，20—5・6グリッド内に位置し第III層中位にて検出された。西側で5号住居跡と重複している。遺存状態はほぼ良好である。西側で切られてはいるが平面形はおそらく不整の円形を呈し，東北側でやや張り出している。規模は，南北での長径が約2.50m，深さ約50cmを測る。長軸方向はN—23°—Wである。

壁は急斜度をもって掘り込まれており，坑底は平らである。断面形は台形を呈する。

遺物は底面よりも覆土上層からの出土が多く，石錐が3点出土している。

土層セクションの状態から，5号住居跡の方が6号土坑より新しい。

7号土坑（第8図　図版9）

A地区東端，20—6グリッドの第III層中位にある。この土坑の南西には5号住居跡が重複しており，北側半分は調査区の外に位置する。検出部分の遺存状態はほぼ良い。

平面形は西側が出っ張った不整の円形と思われる。規模は検出部分で最長径1.25m，深さはプラン確認面から約50cmである。長径方向N—12°—Wである。

壁は急斜度をもって掘り込まれており，坑底は平らで堅い。断面形は高さのある台形である。遺物は石器が石鏃・磨石・凹石が出土したが，土器は比較的少なかった。

新旧関係は（旧）5号住居跡→7号土坑（新）の順である。

8号土坑（第9図　図版9）

A地区東部で北の境界線ぎわの，19—7グリッド第III層中位にて検出された土坑である。北側に5号住居跡・東に7号土坑・西は9号土坑と，それぞれ隣接する。遺存状態は良く，重複関係はない。

1/2以上が調査区域外のため，平面プランは不明だがほぼ円形を呈すると思われる。規模は長径1.60mで，深さは47～56cmある。

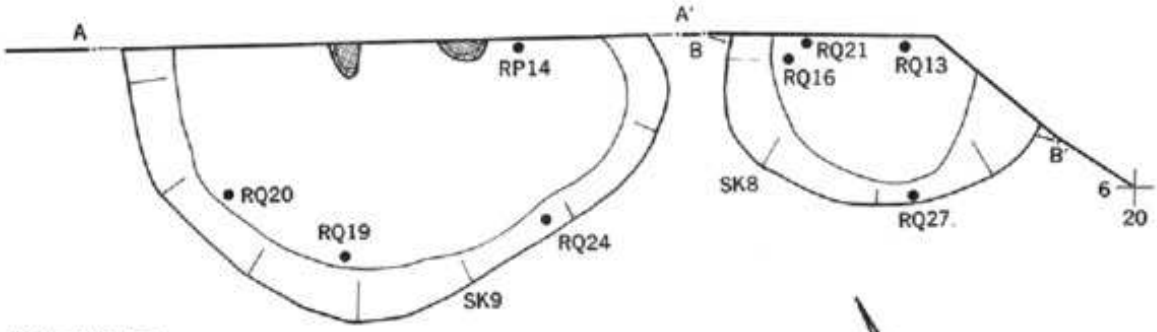
壁は急角度をもって掘り込まれており，坑底はほぼ平坦と言える。

覆土は4層あり，第4層坑底部分はやや粘性のある土質である。

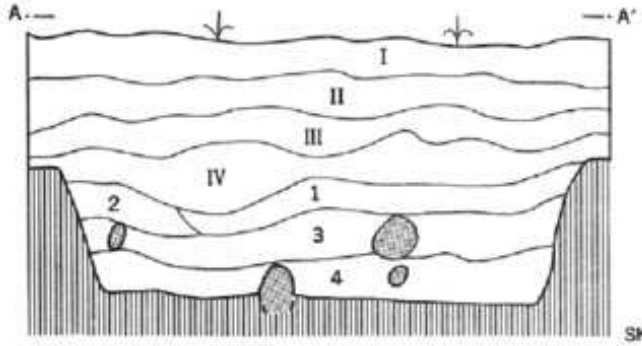
9号土坑（第9図　図版9）

A地区東部で北の境界線ぎわの，18・19—6・7グリッド第III層中位にて確認された。重複関係はなく，南は5号住居跡・東は8号土坑と隣接する。遺存状態は良い。

平面形は，北半が未検出だが不整の円形または楕円形を呈すると思われる。規模は長径2.64mで，深さは55～63cm，主軸方向は磁北からみてN—36°—Wである。壁は急激な立ち



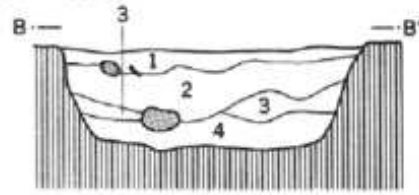
BM = 336.15m



SK9

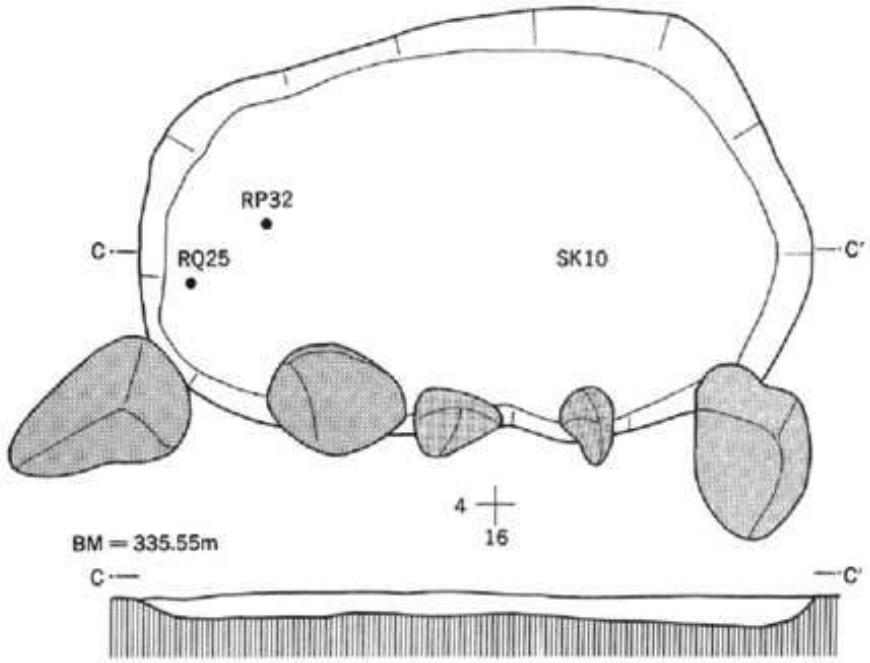
1	黒褐色	7.5YR3/2	細砂質	土器片小礫を含む
2	黒褐色	7.5YR2/2	微砂質	粒子はしまりがない
3	黒褐色	7.5YR2/2	細砂質	小豆大の土器片，炭化物を含む
4	黒　色	7.5YR2/1	シルト質	粘性が強く，ベタベタしている

BM = 335.55m



SK8

1	黒褐色	7.5YR3/1	微砂質	サラサラしている
2	黒褐色	7.5YR2/2	粗砂質	小礫，土器片炭化物を多量に含む
3	黒　色	7.5YR2/1		粒子が粗く，ザラザラしている
4	黒　色	7.5YR1.7/1	粗砂質	攪乱，粘性が強く堅い。 この内3割程に 7.5YR3/2 が混じる



SK10

1	褐　色	10YR4/4	微砂質	細かい炭化物を含む，サラサラする

第9図　8～10号土坑平面・断面図

上がりをみせ，床面はほぼ平坦で，断面形は台形を示す。

覆土は4層にわけられ，その最下層は8号土坑と同様の粘性のある土である。出土遺物は，土器が各土坑の中で最も多く，覆土の第3層から一括土器（RP14）がみつかった。石器は石鏃・凹石があり，また円盤状土製品と炭化した栗の実も出土している。

10号土坑（第9図　図版10）

A地区東部の，16･17－5グリッド第III層中位に検出した。4号住居跡の西に隣接する。重複関係はなく，遺存状態も良好である。平面形は東西に長い楕円形で，その規模は長径方向をN－33°－Wとし3.38m×2.08mを測り，7～13cmの深さをもつ。

壁は浅く緩やかな傾斜をもち，西壁には巨礫が検出されている。坑底は平坦で，覆土は均質な単一層である。

本土坑からは埋設土器（第20図　図版10・20）が一個体正位の状態で西壁付近より出土した。また磨石も出土したが，ほかに遺物はあまりない。

11号土坑（第10図　図版9）

A地区15－6グリッド第III層中位にある。遺存状態はほぼ良好で，重複はない。平面形は円形であり，その長径方向は磁北からN－33°－W，長径0.98m×短径0.88m，約60cmの深さをもつ。壁はほぼ垂直に切り込まれていて，矩形に近い断面をもつ。

12号土坑（第10図　図版9）

A地区15－6グリッド第III層中位にあり，遺存状態はほぼ良い。重複関係は見られない。平面形は円形，規模は長径0.93m×短径0.86m，深さ約50cmを測る。その長径方向は磁北からN－30°－Eである。壁はほぼ垂直で，坑底は礫にあっている。遺物は少ない。

13号土坑（第10図　図版9）

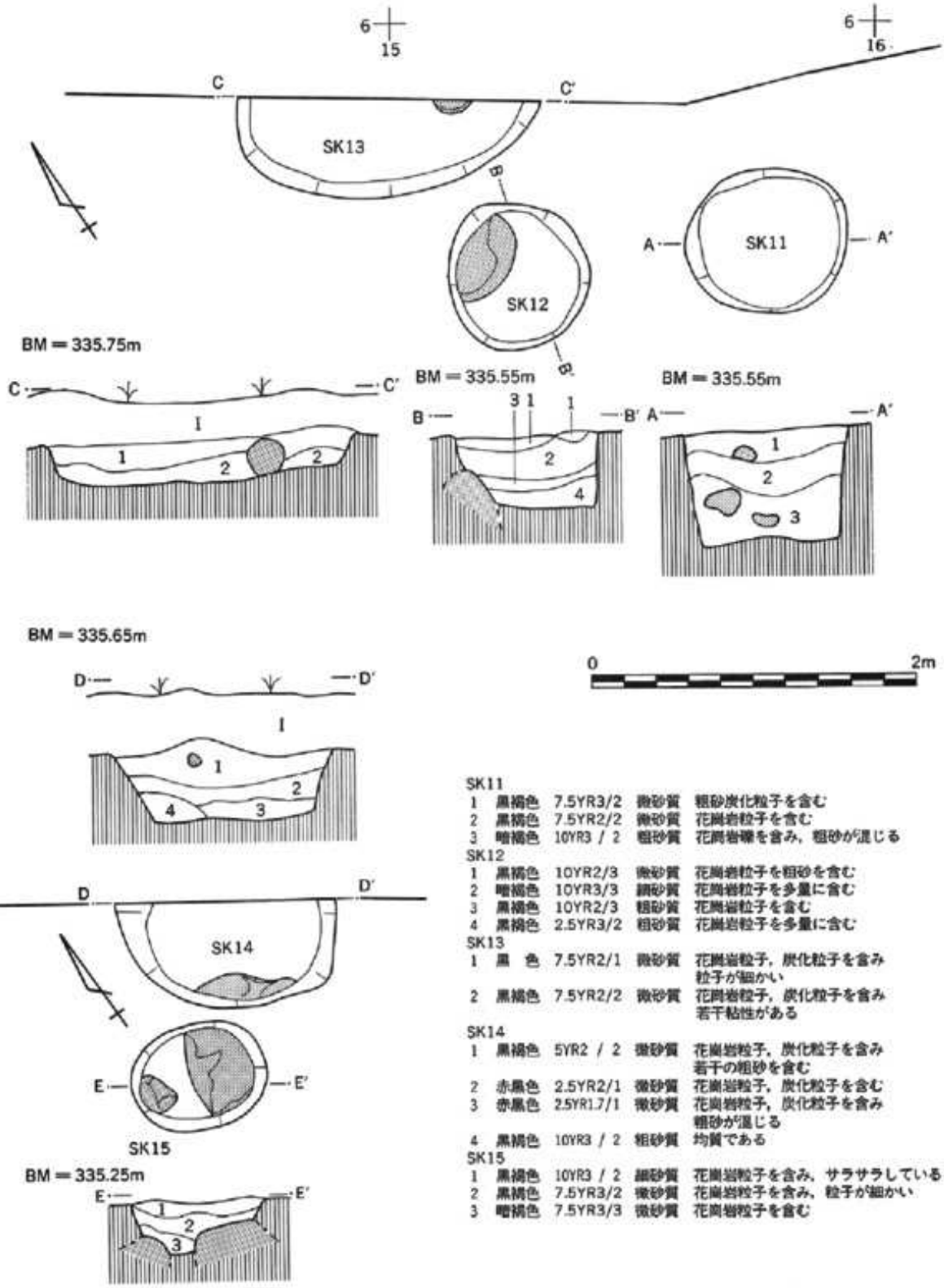
A地区14・15－6グリッド第III層中位にある。遺存状態は良く，重複関係もないが北側は未検出である。平面形は円形または楕円形と考えられる。長径1.90mで深さはおよそ25cmを測る。長径方向はN－30°－Wである。壁は掘り込みが急で坑底は平らである。

14号土坑（第10図　図版9）

A地区13・14－6グリッド第III層中位に位置する。遺存状態は良く，重複はないが北側半分は調査区外である。平面形は円形または楕円形と思われる。長径は1.36m，深さが約40cmを測り，長径方向は磁北からN－33°－Wである。断面形は逆さ台形をなす。

15号土坑（第10図　図版9）

A地区13－6グリッド第III層中位に検出している。重複関係はなく，遺存状態はやや良い。平面形は楕円形で，その規模は長径0.84m×短径0.72m，深さ約30cmを測る。長径の方向はN－35°－Wである。壁はほぼ垂直で，坑底で大きな自然礫に突き当たっている。



SK11

1	黒褐色	7.5YR3/2	微砂質	粗砂炭化粒子を含む
2	黒褐色	7.5YR2/2	微砂質	花崗岩粒子を含む
3	暗褐色	10YR3 / 2	粗砂質	花崗岩礫を含み，粗砂が混じる

SK12

1	黒褐色	10YR2/3	微砂質	花崗岩粒子を粗砂を含む
2	暗褐色	10YR3/3	細砂質	花崗岩粒子を多量に含む
3	黒褐色	10YR2/3	粗砂質	花崗岩粒子を含む
4	黒褐色	2.5YR3/2	粗砂質	花崗岩粒子を多量に含む

SK13

1	黒　色	7.5YR2/1	微砂質	花崗岩粒子，炭化粒子を含み粒子が細かい
2	黒褐色	7.5YR2/2	微砂質	花崗岩粒子，炭化粒子を含み若干粘性がある

SK14

1	黒褐色	5YR2 / 2	微砂質	花崗岩粒子，炭化粒子を含み若干の粗砂を含む
2	赤黒色	2.5YR2/1	微砂質	花崗岩粒子，炭化粒子を含む
3	赤黒色	2.5YR1.7/1	微砂質	花崗岩粒子，炭化粒子を含み粗砂が混じる
4	黒褐色	10YR3 / 2	粗砂質	均質である

SK15

1	黒褐色	10YR3 / 2	細砂質	花崗岩粒子を含み，サラサラしている
2	黒褐色	7.5YR3/2	微砂質	花崗岩粒子を含み，粒子が細かい
3	暗褐色	7.5YR3/3	微砂質	花崗岩粒子を含む

第10図　11～15号土坑平面・断面図

3　出土遺物

出土した遺物は，整理箱に27箱を数えうち土器24箱・石器３箱である。土器のうち平安時代が１箱でいずれも１・２号住居跡内覆土層より出土し，縄文時代の土器はＡ地区の住居跡周辺部から多く出土し，Ｂ・Ｃ地区からは13点のみ出土している。今回は住居跡・土坑内から出土したものを中心に示した。

（１）平安時代の土器

今回の調査で得られた土器の器種は，坏・甕・壺の三種がある。これらは製作法や技法の違いから土師器と須恵器の別がある。

ａ　土師器（第11図１～６　図版19・20）

Ａ類（１・２・５・６）甕形土器である。１は口縁部が「く」字状に大きく外反し，頸部には一条の沈線を有している。口縁部の外面は横の刷毛目・ナデ調整があり，体部外面には縦・横の刷毛目調整がある。内面はいずれも横方向の刷毛目が施されている。２は１に比べて口縁の外反が緩やかで，口縁部には横のナデ，体部外面は縦の刷毛目の調整が認められ，内面は横の刷毛目・ナデ調整である。５・６は甕の底辺部で，内・外面とも横方向の刷毛目が施され，底には木葉痕が認められる。

Ｂ類（３・４）壺形の土器である。Ａ類土器に比べて頸部が緩やかな「く」字状を示し，体部は膨らみをもつ土器である。外面は，頸部が横のナデ調整，体部では縦の刷毛目調整がなされている。内面はいずれも横の刷毛目・ナデ調整技法である。

ｂ　須恵器（第11図７～13　図版19・20）

Ａ類（７～12）坏形の土器である。いずれも器高が低く，口唇部が外反し底径がやや小さく，若干上底となっている。７・８・11はヘラ切り底でロクロ痕が認められる。９・10・12は回転糸切り底である。７は底辺部が丸味をもっている。

Ｂ類（13）甕形土器の破片である。外面は条線状のタタキ痕で，内面は格子目状のアテ痕である。

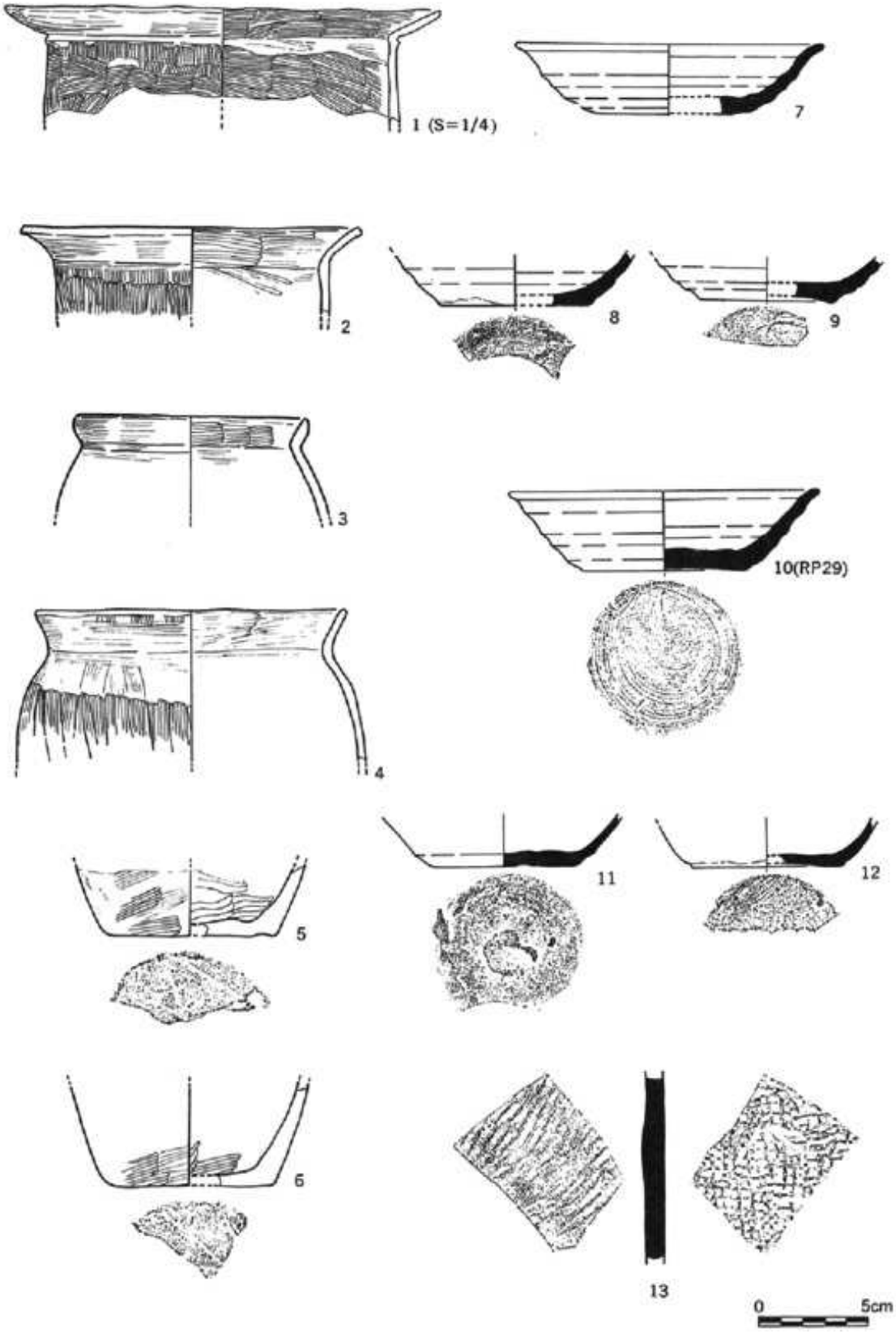
（２）縄文時代の土器

ａ）　土器片の分類（第12～19図　図版10～18）

土器は，第Ⅰ群土器から第Ⅷ群土器に大別しそれぞれの表出された技法および文様別に類別化した。縄文の原体については，施文された方向で書き表わすことにした。

第Ⅰ群土器（第15図　194・316・328）縄文時代前期の土器で，地文はＬＲの縄文の横位方向に施しており，若干の繊維を含んでいる。

第Ⅱ群土器（第13図　96）縄文時代中期の土器で，恐らくＳ字状の文様構成を示し，区画内には縄文を充填して区画外は磨消しによる調整がみられる。



第11図　1号住居跡出土土器実測図

第III群土器（第12～19図）　貼瘤を有する入組文系の土器群である。

第1類　縄文を充填する入組文を有するもので第III群土器の主体をなすものである。

a　（1・2・6・11・12・29・31・33・39～41・43・59・61・70～75・101～103・107・109・124・126・128・133・144・156～158・160・218～220・224・227・246・250・252・266・267・286・285・295～300・322・333・341・342・347・349・351・352）貼瘤を伴う斜文によるもの。口縁は平縁が多く，波状口縁も中には認められる。器形は，内側に肥厚する口縁が上方に開きながら内弯し，頸部でしまり胴が張る深鉢形である。文様帯の区画に斜縄文を充填する入組文で，左下りや右下りがある。貼瘤はほとんどが小突起で，文様の区画帯や入組文の要所に貼付される。

b　（145・149・150・322）刺突を伴う斜縄文を充填する入組文を有するもの。波状口縁のものと平縁の両方があり，いずれも口縁が若干開きながら内弯し，頸部で緩やかにしまる深鉢形を呈する。区画帯に充填された斜文の上に刺突状に列点を配している。入組文は多段のものが多い。

c　（249・256）棘状の陰刻を伴い斜縄文による入組文を描いている。口縁突起を有しやや外反し，頸部で緩やかにしまる深鉢形を呈する。棘状陰刻は口頸部文様帯の上部区画帯の周辺に多くみられる。

d　（116・122・123・221）三叉状の陰刻を伴う斜縄文による入組文をもつ。

口縁突起を有し，内弯または外反し頸部で緩やかにしまる深鉢形を呈する。三叉状の陰刻は，口縁突起の下部を八字状に区画した無文部や入組文の集合部周辺に独立して施されている。

第2類（133・155・291・306・308）文様区画帯に刷毛目を充填する。

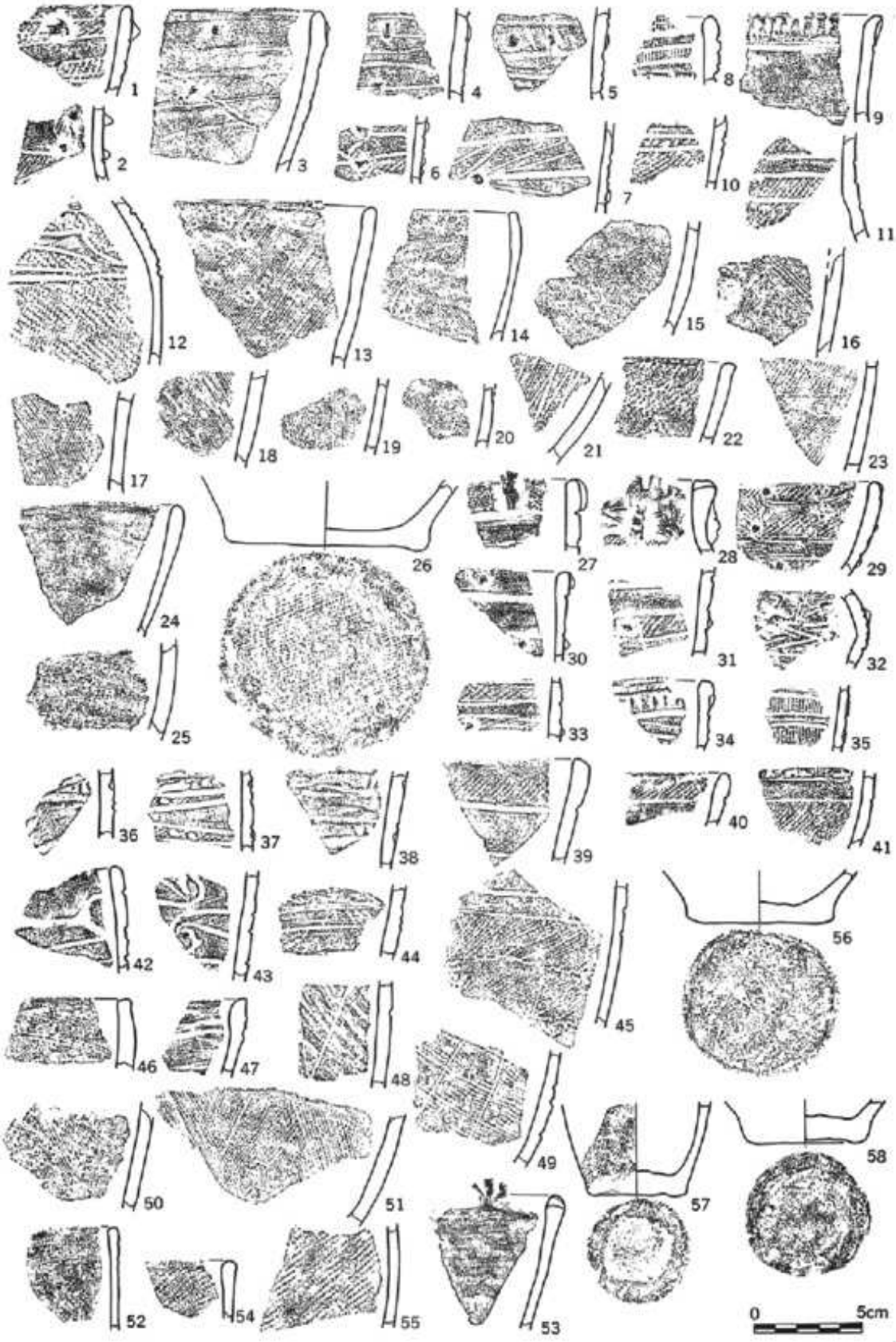
口縁部が上方に開きながら口唇部近くでやや内弯し，頸部でしまる深鉢形の器形を呈する。いずれも縦位方向の刷毛目を施している。

第3類　弧線連結文を主体として描出する土器である。弧線連結文は入組文のあるものから発生したものとみられ，入組文系土器に次ぐ出土をみせている。

a　（97）斜縄文を充填し瘤を多く貼付する弧線連結文を有している。口縁は波状または平縁を示し，頸部でしまる胴張りの深鉢形を呈する。文様は区画帯の上下には弧線文を連続して横走させ，その間をレンズ状に施している。

b　（10・27・34・63・69・214・319）貼瘤が多く，刺突文を伴う斜状文による弧線連結文を施している。口縁部文様帯を中心に，区画帯に刺突文を施されるのが特徴であり，斜縄文を充填している。

第4類　（9・34・62～66・69・110・111・145～150・214・228～230・270・271・331）



第12図　2・3住居跡出土土器拓影図

ST2：1～26　　ST3：27～58

入組文や弧線連結文の文様区画帯に刺突文を施している。刺突文はその方法によって多様であり，単純に直突したもの，斜方向から刺突して工具をおこして瘤をつくる刺突状の瘤や，篦状工具によって両側から刺突された八字状の刺突文などがみられる。

第5類　（8・35・67・154・247・248）櫛目文を入組文や帯状文の中に施しているものである。波状口縁や平縁の，外反し頸部で緩やかにしまる胴張りの深鉢形土器である。口縁突起が所々につき，その下部には三叉状の陰刻が施される。文様は口縁部文様帯の入組文や区画された中に，櫛状工具による櫛目文が施されている。

第6類　沈線による入組文や弧線連結文などを描出し，無文部はよく調整されている。

a　（3～5・7・99・151・159・289・290・292・294・330）沈線による入組文を描いているもの。平縁あるいは小波状口縁が上方に開きながら内弯し，頸部でしまり胴がやや膨らむ深鉢形である。口縁部文様帯や体部文様帯上半部に入組文が描出されている。口縁・頸部の入組文や区画帯の要所に瘤を貼付している。

b　（32・98・101・104・133）沈線による弧線連結文を有するもの。小波状の口縁が開きながら内弯し，頸部がしまり胴が膨らむ深鉢形を示す。口縁部に文様帯が集約され，調整沈線による弧線連結文を描出し，上下に肩平化されている。

c　（49・83・161・275）格子目状に沈線を施し，瘤を貼付するが少ない。地文は無文のものや斜縄文を施しているものなどがある。

第7類　（158・231・272・303）連鎖状文を有するもの。眼鏡状文や横長刺突文と帯状文との組み合わせによる文様構成である。とくに眼鏡状の帯状文の上に斜縄文などを施し充塡しているものもある。

第8類（242・314・340）貼瘤に伴う無文土器である。器面をよく磨いた，小波状や平縁の深鉢形の土器には，二単位の貼瘤状の突起を口唇部に有するもの，底部の小さい球形状を呈する注口土器などにも一単位あるいは二単位の貼瘤を施している。

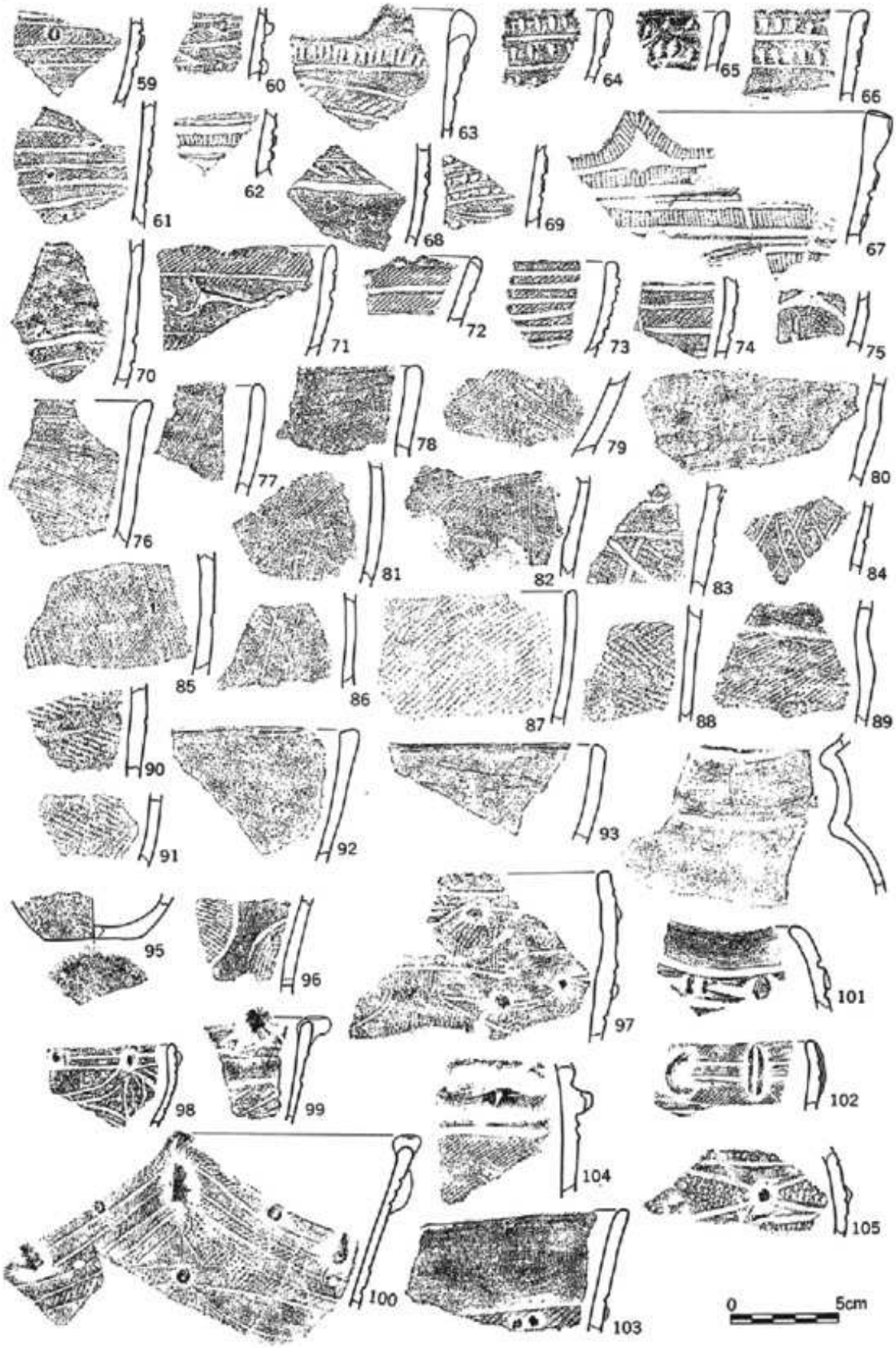
第Ⅳ群土器（第12～19図）　三叉文系の土器群である。

文様は第Ⅲ群土器の入組文や弧線連結文から発達して変化した三叉状の入組文やS字状沈線文などであり，文様構成は口頸部文様帯に圧縮されたかたちで描出されている。

第1類　三叉状入組文を主体とする。

a　（113・127・225・226）魚眼状文を有する。器形には，小波状口縁の深鉢や鉢，浅鉢・注口土器などの各種があり，口頸部文様帯に描出された沈線などによって区画されている。三叉状部は斜縄文により充塡され，体部では斜縄文を地文としている。

b　（42・114）玉抱き三叉文を有する。小波状口縁の鉢形土器である。口唇部付近に文様が集約され，口頸部文様帯に玉抱き三叉文を描いている。その間をC字状文で描出し区



第13図　4・5号住居跡出土土器拓影図

ST4：59～95　ST5：96～105

画帯に若干縄文が部分的に残されている。

c　(71・115・117・118・123・125・222・250・251・253・297) 三叉状入組文を有している。三叉状入組文は先端同士が接続しているものもある。

第2類　(120・121・252) 三叉状陰刻を有するもの。口縁から体部にかけて細かい縄文を施し部分的に磨消縄文の手法が認められ，曲線的な入組文が展開される。その周辺に三叉状陰刻を施している。

第3類　沈線による曲線的なS字状文を有している。

a　(321)　C字状の磨消縄文を有する。口頸部文様帯に沈線化C字状文を圧縮して描出し，重弧状になる。

b　(278) S字状の沈線文を有する。横長のS字状文が施されている。

c　(44・153・255)「く」字状の沈線を矢羽根に施している。

第V群土器（第12～19図)　刷毛目文や櫛描文を有する粗製土器

第1類　(13～20・48・50・51・84・86・277・312・334) 先端が平坦な木目をもつ工具によって，細い刷毛目状の文様を格子目状に施している。地文は無文が多い。

第2類　(76～82・85・167～174・177・178・232) 工具先端の歯の数が粗く太い櫛描文を施す。曲線的なS字状文や重弧線文などの文様を描出している。地文は無文が多い。

第VI群土器（第12～19図)　器面全体に斜縄文を有する土器群で粗製土器である。

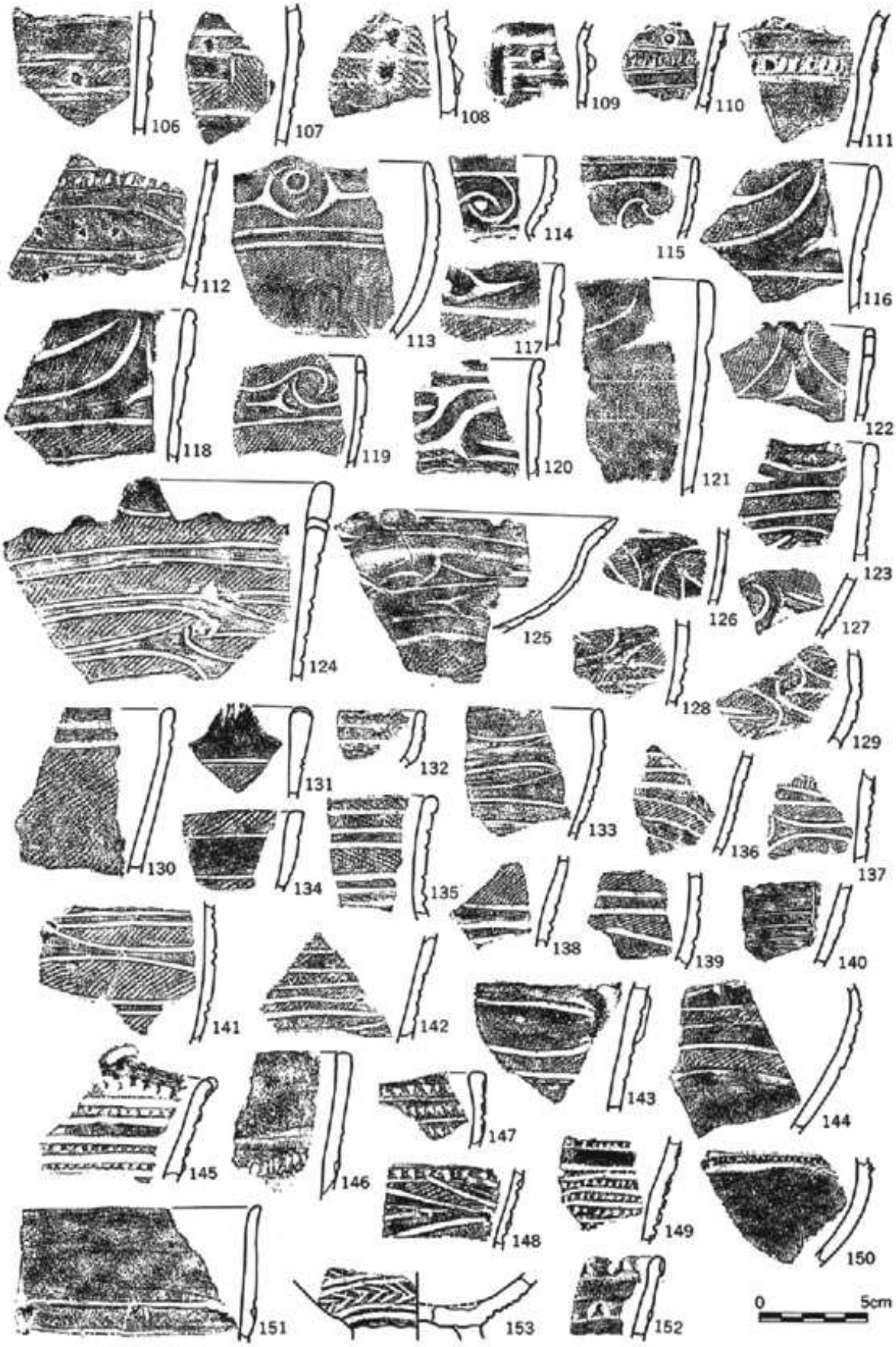
本土器群は，縄文原体の施文法や種類によって4類に分けられる。

第1類　斜縄文を横位方向に回転して施している。

a　(79・88・90・91・179・180・188・192・310) RLの縄文原体を多段に施している。口縁は平縁を呈し，口縁付近で内傾し体部がやや膨らみを有する深鉢形土器である。79・180は口唇部が内弯し，188でやや外反している。310では口唇部に磨きの調整があり磨消しとなっている。

b　(87・89・129・175・176・182・183・189・191・282～284・336)　LRの縄文原体を多段に，口唇部直下から器面全体に施している。口縁は平縁あるいは緩やかな小波状を呈し，口縁部付近が内傾するものや外傾するものもあるが，体部中半部でやや胴が張る深鉢形土器である。284では撚りもどしのある縄文原体を施文している。311は口唇部直下に磨消し状の調整が認められる。口唇部が外反するものは175で，176・282・284では内弯している。

第2類　(54・55) 斜縄文を縦位方向に回転して器面全体に施している。いずれも縄文原体がRLになるものを施している。深鉢形の粗製土器であり，54は口唇部がやや外反している。



第14図　5号住居跡出土土器拓影図（2）

第3類　(261・263・337・344・346・353) 斜縄文を斜方向より施文している。いずれもＲＬの縄文原体を使用している。261は無節の撚りもどしのある原体を用いている。口縁は平縁で，体部の中半部で胴張りとなる深鉢形を示している。斜縄文は口縁部から胴部下半まで斜状方向に施文している。

第4類　(185～187・193・281・345) 結節のある綾絡文が横走して施文されている。縄文の原体はＬＲを地文とする結節縄文であり，器面全体に多段に施されている。口唇部が外反するものが186，小波状口縁で口唇直下がよく調整され磨消しとなっている187などがある。

第Ⅶ群土器　器面全体に篦ナデ調整を施す，無文土器の一群である。

器形や器面の調整技法により3類に分けることができる。

第1類　(94・198・258・280) 器面全体に斜方向から調整して丁寧なミガキ調整を施したものである。注口土器や小形壺形土器あるいは浅鉢形土器などによくみられる手法である。

第2類　(24・53・92・195・240・257・340) 器面全体に縦方向からのミガキやケズリ調整を施したものである。小形鉢形土器や深鉢形土器に多く認められる。器面の内面は横方向からの粗い調整だけである。24は口縁部が内弯し，53は貼瘤状の小突起がみられる。

第3類　(93・196・197・241・279・343) 器面全体に横方向からのミガキやナデ調整が施されている。やや大形の深鉢形土器に主として用いられている。口縁部が外反する241・279などがある。

第Ⅷ群土器　底辺部の分類を一括とした。

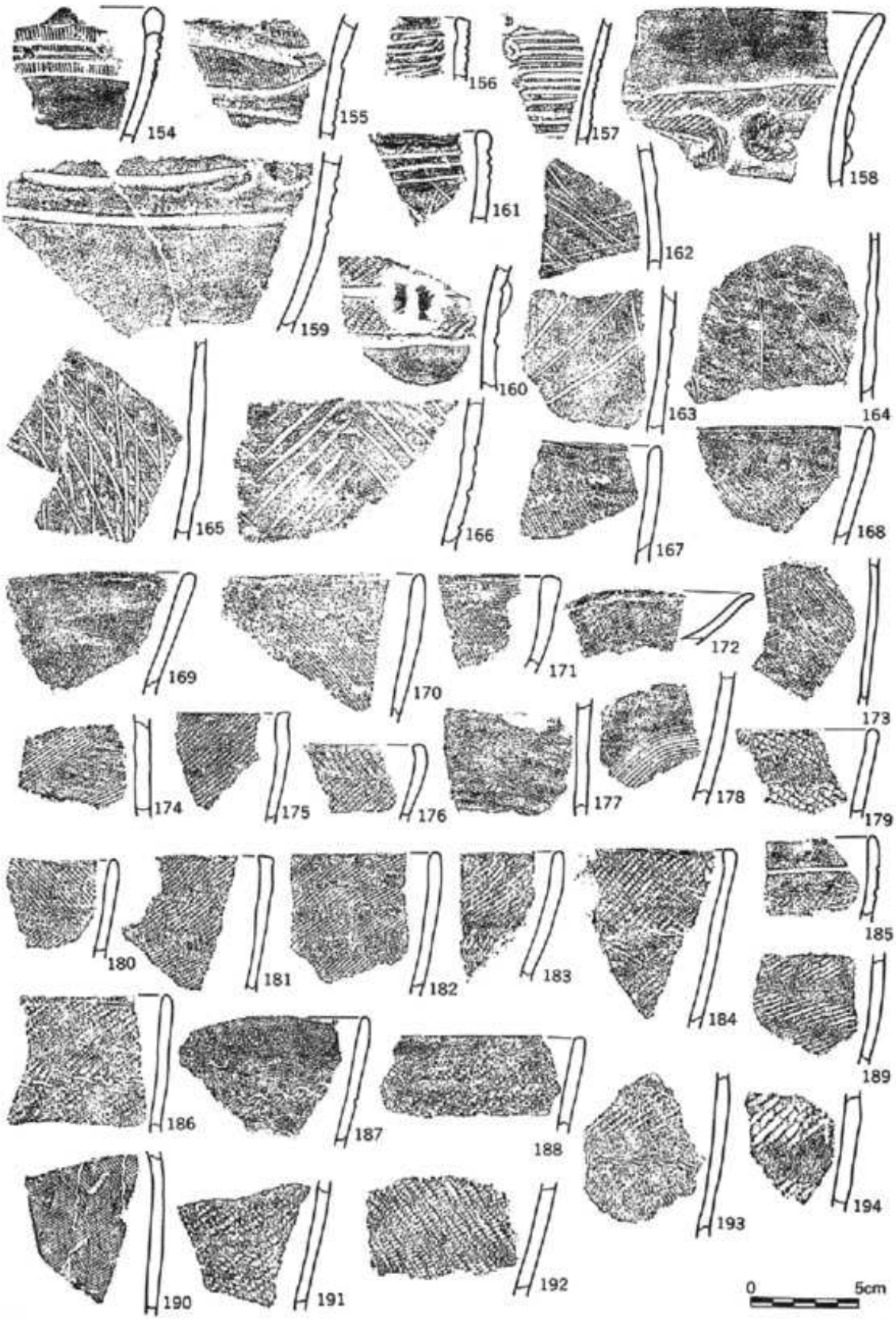
体部の下半から底部の資料について，主として形態上の特徴から大きく5類に分類することにする。

第1類　(26・56・201・203・207・245・318・338・339) 平底で底辺部がやや張り直立し，その上段が緩やかに膨らみ体部上半へと続き，粗製の深鉢形土器の一部をなすとみられる。底面では，縄文原体を施すもの339，網代痕がみられる26・199・203・318，無文で調整がある56・201・207・245・338がある。

第2類　(204・220・244) 第1類に共通するが，底辺部から直接膨らみをもち立上る平底の類である。深鉢形土器の一部をなすとみられる。底面が縄文原体を施す224や無文で調整されている204・220などである。

第3類　(208) 底面がやや丸味をもつ丸底で，底面の中央部分があげ底となっている。底面は無文で良く調整されている。粗製の大形深鉢形土器をなすものである。

第4類　(57・58・202・206・317) 底辺部付近が丸味を有する平底で，底面の中央が若干の上げ底を呈している。底面には371の網代痕が施文，無文で丁寧に調整されている57・



第15図　5号住居跡出土土器拓影図（3）

58・206などがある。

第5類　(205・209) 鉢形土器あるいは浅鉢形の台部をなすものである。いずれも台部は内外面とも丁寧に良く調整されている。205には底辺部に一条の沈線が施されている。

b)　完形土器

今回の調査で復元された完形土器は9個体で，その大半が土器片が多く図上復元する破片も少なかった。記述については，土器片の分類に従って共通する類別によって表現することとし，縄文原体は施文された方向で書き表すことにする。

完形土器　(第20図01～09図版20)

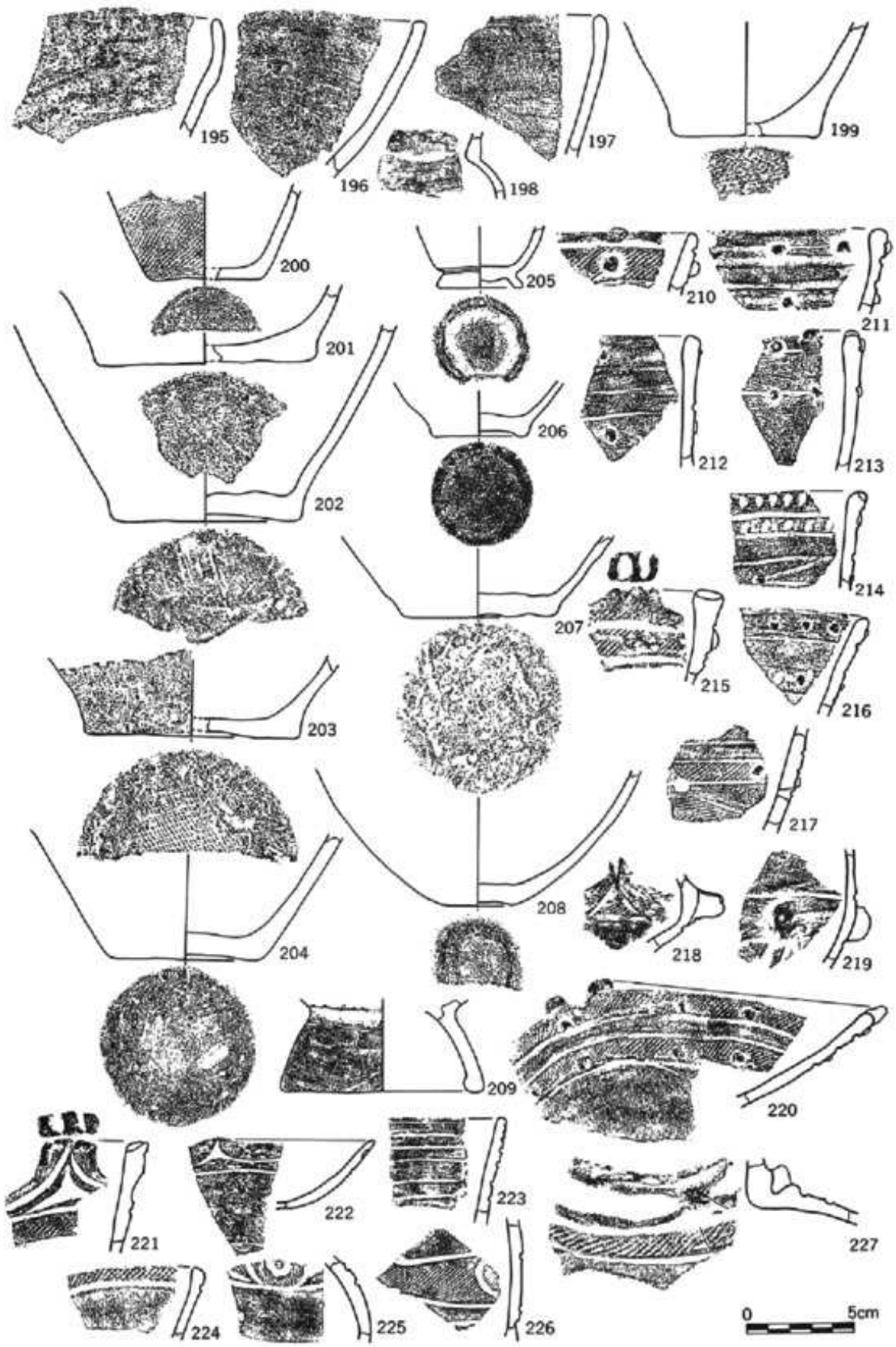
(01)　第III群4類に共通する。器形は，口唇部が細かい波状を呈し，口縁が上方に開きながらやや内傾し，頸部でしまり胴が張る深鉢形土器で，胴上半部が現存している。口径21.8cm・現高14.8cmで胴部の最大径は18.6cmを測る。文様帯は口頸部に主体をなし，胴中半部から下半部は丁寧にミガキ調整がなされ無文帯となっている。文様構成は，口唇直下より頸部の上部まで入組文が多段にわたって描出され，入組文の区画帯に刺突による貼瘤状文が，入組部の要所には瘤が貼付されている。頸部では，多段にわたる入組文から直接続く三叉状の入組文が沈線によって施されている。なお，口唇下部に補修孔1つがある。焼成は全体によく，暗褐色ないし褐色の色調である。

(02)　第III群1類aに共通している。器形は，口縁がやや波形を示し，口縁が上方に開きながら外傾し，頸部でしまり胴が膨らむ小形の深鉢形を呈する。胴上半部のみ現存する。口径14cm・現高8.4cmで胴部の最大径14.5cmである。文様帯は頸部付近を中心に描かれ，口縁部や胴部は良く調整された無文帯をなす。文様は曲線的なC字状となる入組文が描出，沈線間の区画帯には斜縄文を充填し施している。貼瘤は多くみられず頸部にボタン状に貼付けられ，その外は入組部の要所にみられる。全体に黒褐色をなす色調であり，内面は横方向によりヘラ調整がなされている。

(03)　第I群1C類に共通する文様を有する。器形は，口縁が小波状を示し最大径が口径に在り，口縁の上方が内弯する深鉢形土器である。口径30.8cm・現高20cmを測る。文様構成は口頸部に集約されており，口縁波頂部の直下に三叉状の陰刻文が施されている。器面全体は丁寧にミガキ調整が施され無文となっている。

(04)　第III群4類・第VII群1類に共通している。注口土器を呈する。口唇部や頸部，胴中半部に刺突状の瘤が貼付されている。全体的に良く丁寧にミガキ調整が施され無文となっている。口径6cm・現高12.6cmを計る。

(05)　第VI群1類に共通している。頸部下半が現存する。恐らく注口土器を呈すると



第16図　5号住居跡(4)・6号土坑出土土器拓影図
ST5：195～209　SK6：210～227

みられ，全体的に球形を示し，良く丁寧に調整されている。底部はやや丸底状になり，底面中央部が上げ底で小さく第Ⅷ群４類にもみられる。

(07)　第Ⅷ群に共通している。器形は，口縁が小波状を呈し，口縁が大きく外反し頸部でややしまる深鉢形土器になる。口径26.7cm，器高28.2cm・底径7.8cmで頸部の肩部に最大径を有し26.3cmを測る。口縁部は無文帯を形成し，頸部から胴部さらに底辺部まで撚糸文を全体に施している。色調は暗褐色を呈し，胎土中には石英粒や砂粒を多く含む。

(08)　第Ⅵ群４類土器に共通している。器形は，口唇部が波形になり胴下半部に膨らみをもつ深鉢形の土器を呈する。口径30.9cm・器高37.8cm・底径10cmを測る。器面の外面全体に，多段の結節の綾絡文が施され，縄文原体はＬＲを用いている。色調は黒褐色を呈し，胎土は砂粒子を含み，焼成の良い土器である。

(09)　第Ⅶ群３類土器に共通している。器形は口縁が平縁で，口頸部付近が内弯し胴中半部に膨らみを有している。器面の内外とも横方向のヘラ・ミガキ調整手法がみられる。黒褐色の色調を示し，焼成も良く堅い土器である。口径35cm・現高26cmを測る。

c)　土製品

今回の調査で出土された土製品は，耳飾３・土偶（脚部）１・円盤状土製品２点でいずれも５号住居跡より出土している。

土製品　（第20図１～６　図版19）

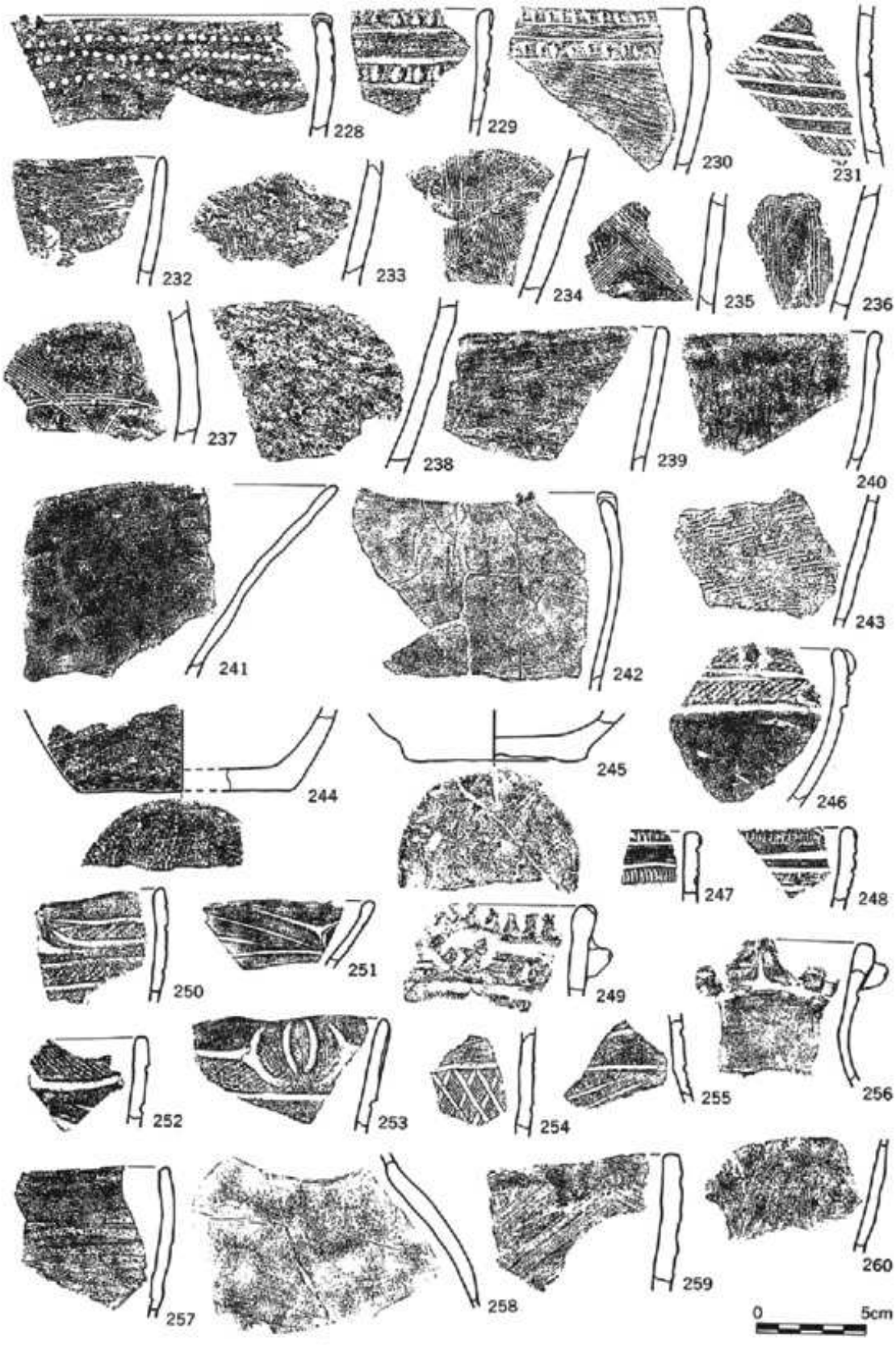
耳飾　（１～３）３点とも耳栓である。１・２は中身があり直径2.5cm～３cmあり，１では側縁で２本の溝状線が走っている。３は中空で直径5.6cmあり，側縁は丁寧に調整されている。

土偶　（４）右の脚部で，全体的に膨らみのある特徴を示し，脹よかな足首には切り込みを有し，脚全体が明瞭になっている。現高4.5cm・厚味2.6cmを測る。

円盤状土製品　（５・６）いずれも入組文に貼瘤を有する土器片を利用し，側縁は二次的に良く調整・研磨されている。５は第Ⅲ群４類の文様構成がみられ，形状は隅丸方形を示し，直径4.5～５cmである。６は第Ⅲ群５類の文様が描出され，形状は不整の円形を呈し，直径６cmを測る。

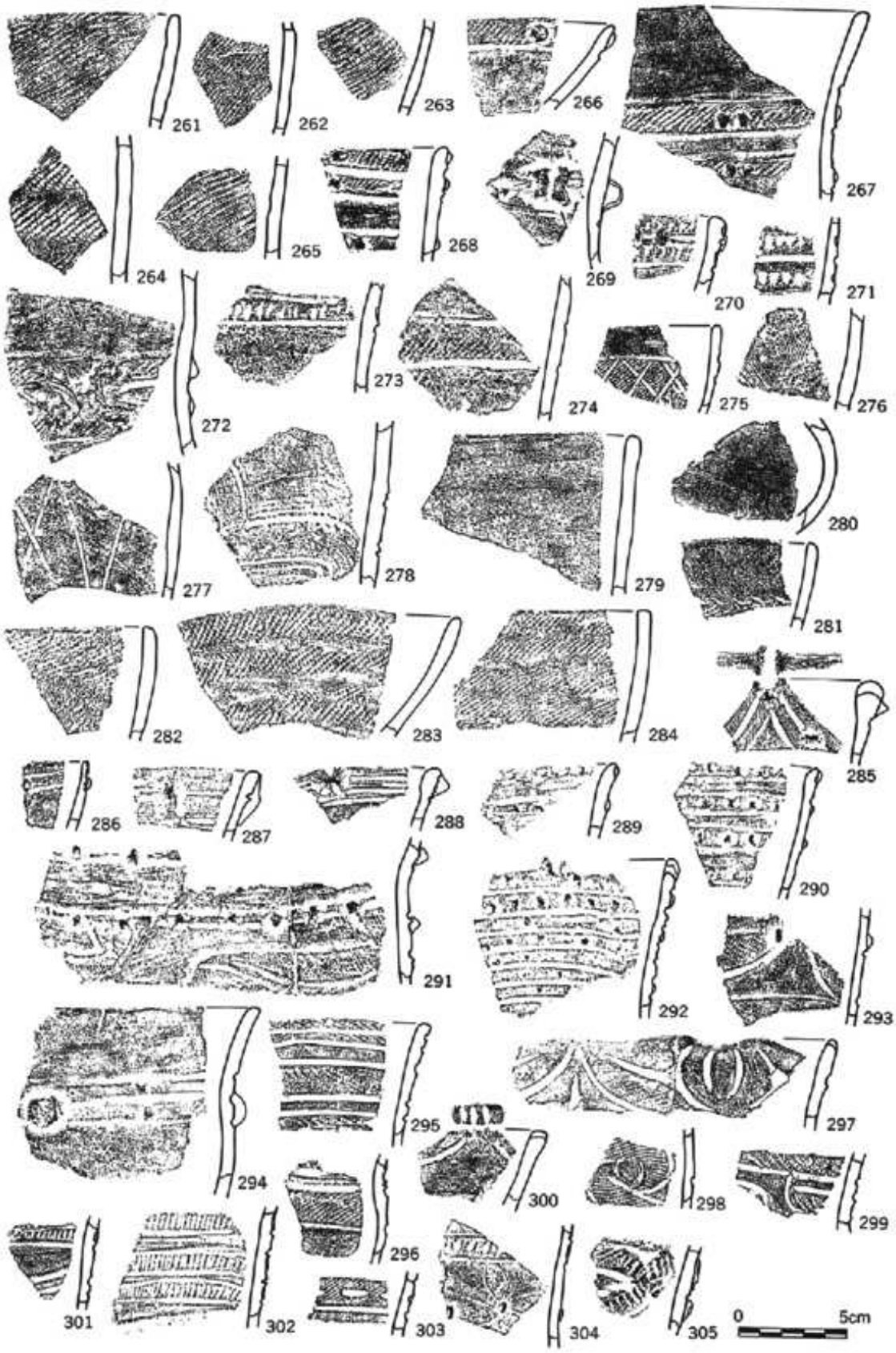
（３）石器

石器は剥片を含めて整理箱に約２箱出土した。種類は打製石器が石鏃・石錐・石篦・石匙，磨製石器は石棒・磨製石斧，礫石器では円盤状石製品・磨石・凹石等である。これらは約半分が遺構内からで，各遺構の出土遺物量に比例して出土している。あと半分は遺物包含層からの出土である。



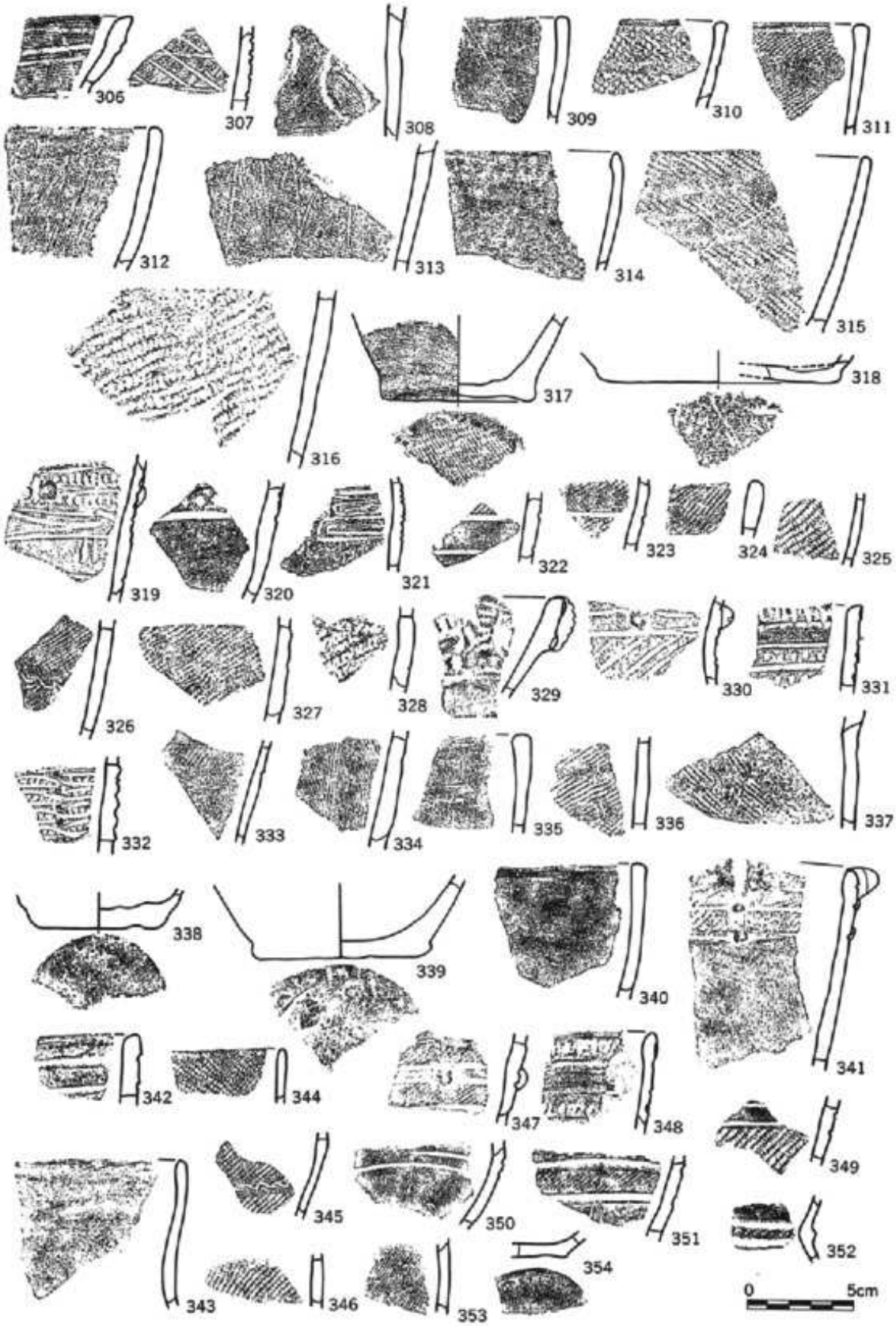
第17図　6・7号土坑出土土器拓影図

SK6：228～245　SK7：246～260



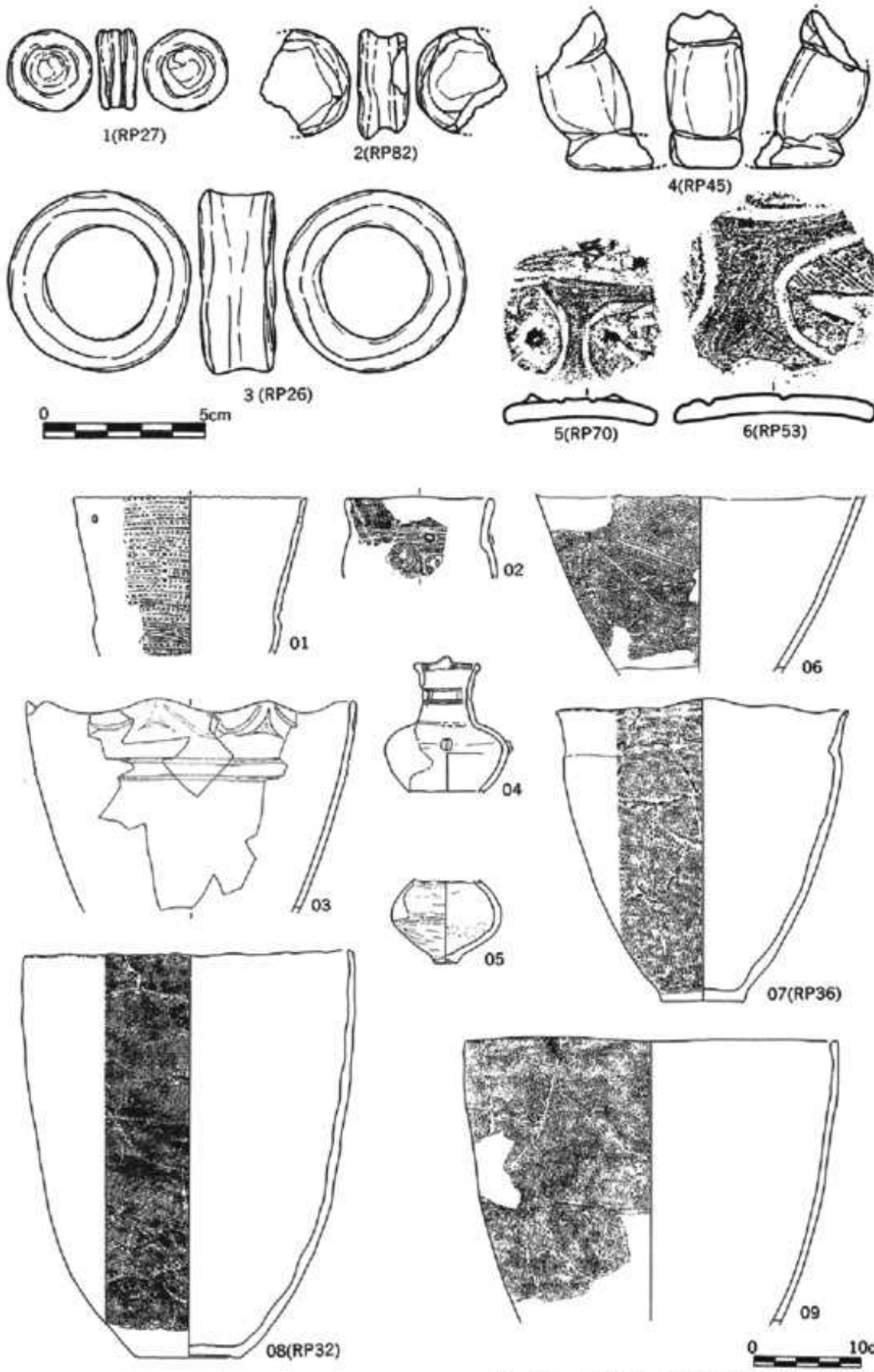
第18図　7～9号土坑出土土器拓影図

SK7：261～265　SK8：266～284　SK9：285～305



SK9 ：306～318　SK12：340～341　SK15：347～354
SK10：319～328　SK13：342～343
SK11：329～339　SK14：344～346

第19図　9～15号土坑出土土器拓影図



第20図　土製品・完形土器実測・拓影図

石鏃（第21図1～6　図版21　表3）

石鏃は6点で，1が無茎の二等辺三角形状である他はすべて有茎である。2～5は菱形の外形を呈する。6は他とくらべてやや大型で角張っており，基部の突出が長い。

石錐（第21図7～10　図版21　表3）

出土は4点で，7～9は棒状で，10は三角形を呈する。断面形はいずれもレンズ状の菱形をしている。

石匙（第21図15～21　図版21　表3）

7点出土。刃部がつまみに対する軸に平行した縦形石匙（15・16・20・21）と，斜交した横形石匙（17～19）に大別できる。15・17・20は基部を除いては片面のみの加工であるが，19は両面から交互剝離を入れて，裏面をも丁寧に調整している。18は欠損しているが，使用痕がはっきりと認められる。21は基部が異常に鋭く尖った加工がなされており，石匙であるとともに石錐として機能を持つと考えられる。

磨石（第22図1～5　図版21　表4）

円形や楕円形の自然礫を用い，礫の両面およびその側縁に磨滅した磨面をもつ。10点出土した。

凹石（第22図6～13　図版21　表4）

楕円形の自然礫，片面あるいは両面に1～4個の凹部をもつ。10点出土したが，7～10・13は磨面をも有している。

磨製石斧（第22図14　図版21　表4）

出土は1点のみである。刃部欠損，基部には使用痕が残されている。

円盤状石製品（第22図15・16　図版21　表4）

2点出土した。偏平な礫の側面を利用し円形に打ち砕いて作っている。双方とも砕いた側面に自然面を残す。用途は不明。

石棒（第22図17　図版21　表4）

石棒は4点あるが，すべて破片で形態の全容がわかるものはない。17は入念に研磨された磨痕が斜方向にはっきりと認められる。5号住居跡の覆土から2点とその上層の包含層から1点出土した。

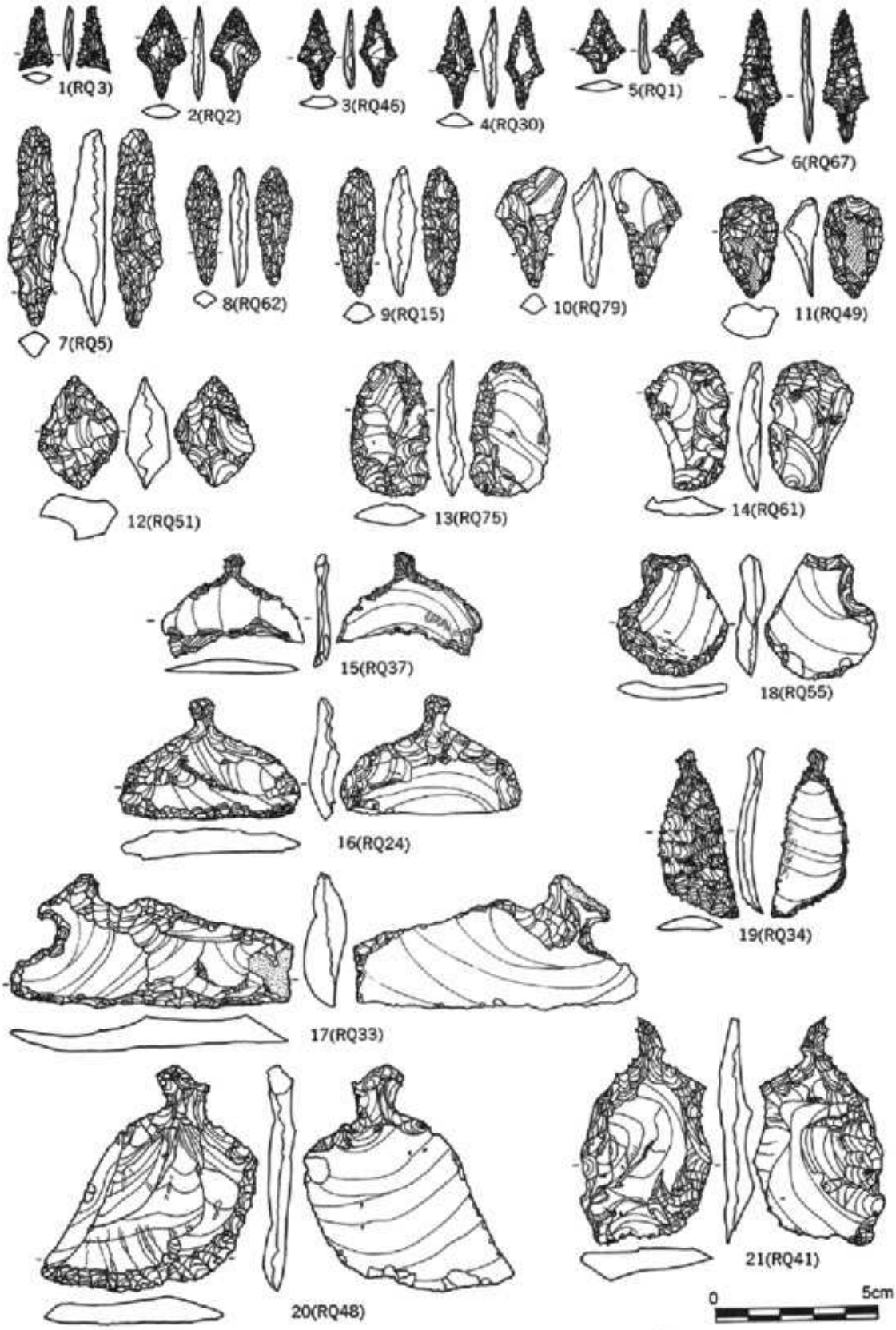
表－3　打製石器計測表（第21図）

No	出土地点	遺存状態	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	摘要	RQNo
1	SK7	欠損	2.0	1.0	0.3	0.51	頁岩	石鏃 無茎	3
2	ST5	良好	2.9	1.5	0.4	1.15	頁岩	石鏃 有茎	2
3	19-5III	欠損	2.5	1.1	0.3	0.69	頁岩	石鏃 有茎	46
4	ST5	良好	3.1	1.1	0.4	1.04	頁岩	石鏃 有茎	30
5	ST5	欠損	2.0	1.5	0.4	0.72	頁岩	石鏃 有茎	1
6	A地区-XO	良好	4.2	4.5	0.4	1.50	頁岩	石鏃 有茎	67
7	ST5	良好	6.1	1.35	1.2	9.08	頁岩	石錐	5
8	ST1	良好	3.7	1.1	0.55	2.29	玉髄	石錐	62
9	ST3	良好	3.9	1.1	0.95	4.28	頁岩	石錐	15
10	13-6III	良好	3.3	1.9	1.0	5.09	頁岩	石錐	79
11	17-4III	良好	3.2	1.8	1.0	4.91	頁岩	石篦	49
12	16-6III	良好	3.5	2.4	1.2	8.43	頁岩	石篦	51
13	SK6	良好	4.3	2.5	0.8	7.76	頁岩	石篦	75
14	ST1	欠損	4.1	2.4	0.6	6.89	頁岩	石匙	61
15	ST5	欠損	2.5	4.3	0.4	3.80	頁岩	石匙	37
16	SK9	良好	3.8	5.5	0.95	14.78	頁岩	石匙	24
17	ST5	良好	4.2	8.8	0.9	36.77	頁岩	石匙	33
18	10-6III	欠損	3.8	3.2	0.6	9.25	頁岩	石匙 使用痕	55
19	ST5	良好	5.1	2.1	0.5	5.68	頁岩	石匙	34
20	13-6 I	良好	7.7	4.9	1.0	38.31	頁岩	石匙	48
21	B地区-XO	良好	7.0	4.0	0.9	29.57	玉髄	石匙	41

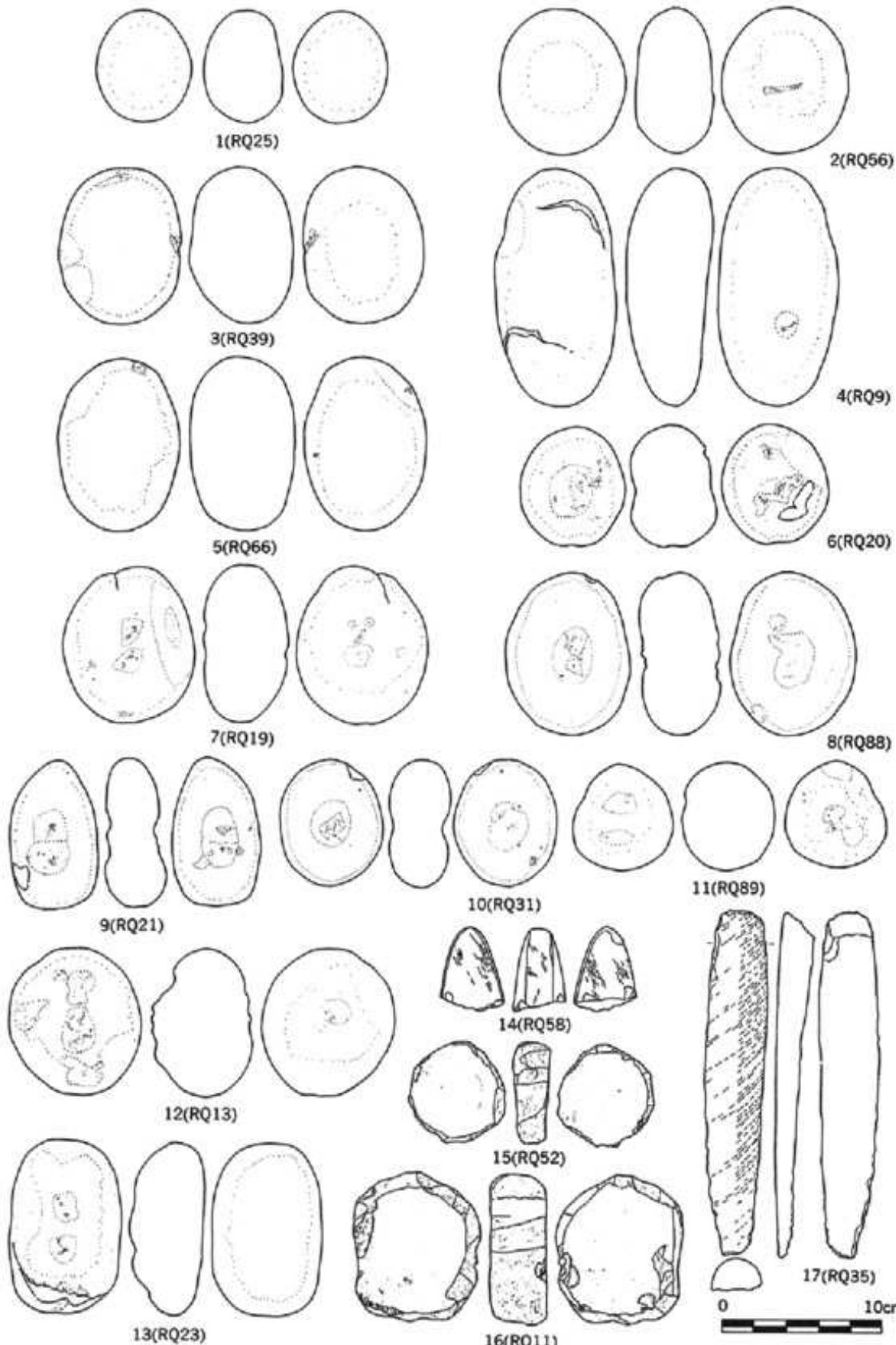
表－4　礫石器・磨製石器計測表（第22図）

No	出土地点	遺存状態	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	摘要	RQNo
1	SK10	良好	7.1	6.0	4.2	208.7	花崗岩	磨石	25
2	14-6III	良好	9.2	7.8	4.9	528.2	安山岩	磨石	56
3	ST5	良好	9.6	7.5	6.4	670.6	花崗岩	磨石	39
4	ST5	良好	14.8	7.4	5.2	313.1	花崗岩	磨石	9
5	B地区-XO	良好	10.8	7.6	6.3	216.0	花崗岩	磨石	66
6	SK9	良好	7.3	6.4	5.0	321.9	安山岩	凹石（1-1）	20
7	SK9	良好	9.9	8.1	5.2	594.3	安山岩	凹石（2-2）	19
8	17-5III	良好	10.02	7.8	5.0	592.7	花崗岩	凹石（2-2）	88
9	SK8	良好	9.2	5.5	3.6	218.0	安山岩	凹石（2-2）	21
10	ST5	良好	7.9	6.4	3.8	252.1	安山岩	凹石（1-2）	31
11	12-6III	良好	6.7	6.2	5.7	252.0	花崗岩	凹石（2-2）	89
12	SK8	良好	9.2	8.3	6.2	573.1	安山岩	凹石（4-2）	13
13	ST5	良好	11.0	6.8	4.6	506.2	花崗岩	凹石（2-0）	23
14	20-6III	欠損	5.1	3.9	3.0	79.7	安山岩	磨製石斧	58
15	17-4III	良好	6.1	5.6	2.3	138.4	安山岩	円盤状石製品	52
16	ST5	良好	9.4	7.9	3.6	464.9	安山岩	円盤状石製品	11
17	ST5	欠損	21.6	3.6	1.9	145.69	粘盤岩	石棒	35

注　(1)　長さ・幅・厚さは石器の全長ならびに最大幅である。厚さも最大厚をとった。
(2)　摘要，凹石のカッコ内は，前の方の数値が表面の凹みの数，後の数値が裏面の凹みの数を表す。
(3)　出土地点欄のローマ数字は，遺跡を覆う土層番号を表わしている。X-Oは表面採収である。



第21図　打製石器実測図



第22図　磨製・礫石器実測図

IV章　関沢B遺跡

1　遺跡の概観

遺跡の南側には現在国道286号線（笹谷街道）がはしっている。当遺跡が発見されたのはこの国道建設の際で，遺跡範囲のかなりの部分はすでに工事による掘削と攪乱を受けていた。このため遺跡範囲とみられる中でも旧地形を残すのは，笹谷トンネルへ通じる最後のヘアピンカーブ部内側のみと考えられる。昭和61年度の分布調査の試掘の結果から，現国道と旧笹谷街道の間の東端部から中央部を調査区として設定した。その後のトレンチ掘りの結果，その内でも西寄りの傾斜面を精査地区とした。

（遺跡の層序）

ここは国道用地として買収される以前は，畑地として利用されていたため，地山層まではおおむね耕作土層となっている。表土ではこの地域は段差のある地形となっているが，地山層では西向きの傾斜をみせる。遺跡の基本層序は次の4層に分けられる。第Ⅰ層：暗褐色土，第Ⅱ層：黒色土，第Ⅲ層：暗褐色土を含む黒色土，第Ⅳ層：暗黄褐色土である。特にこの第Ⅳ層は地山を形成し，粘土質で粒子が粗く小礫を含んでいる。遺構確認面は第Ⅲ層で，各遺構はこの第Ⅲ層と第Ⅳ層を掘り込んで構築されている。遺物包含層はほとんど認められなかった。

（遺構の分布）

精査は，35～55—20～32グリッド内について行った。その面積は468㎡である。精査区は遺跡の中央部から西寄りに位置する傾斜面で，標高585m～588.6mを測る。

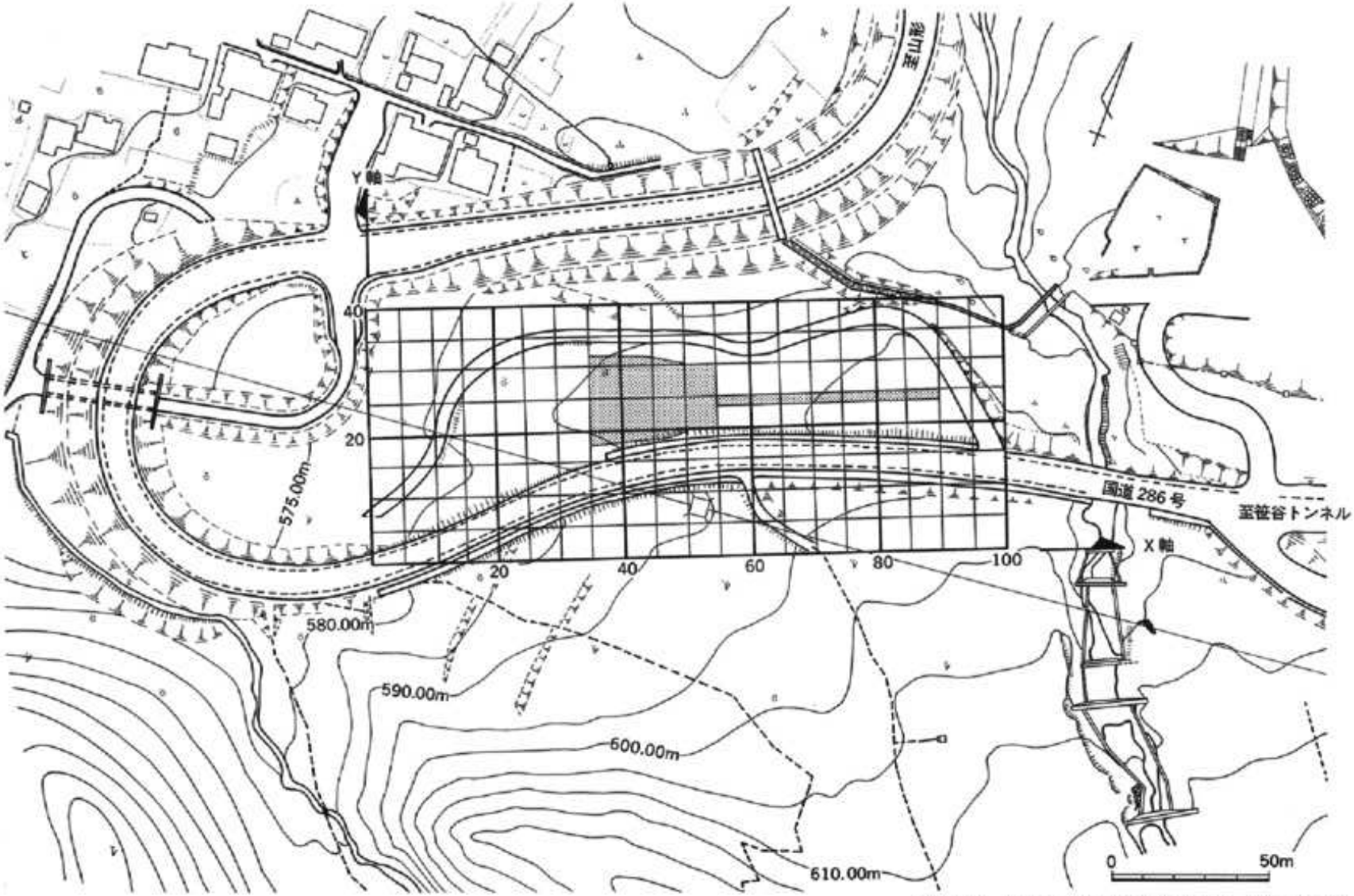
そのうち35～50—20～32グリッド内において遺構が検出された（第24図）。その北東部と南西部分には自然の礫群が広がっており，遺構はその間に狭まれた形で分布している。

関沢Ｂ遺跡で検出されたのは，縄文時代の住居跡が１棟，土坑は５基で，内わけは，奈良時代土坑が１基，時代不明の細長い溝状土坑が３基，その他時代・性格不明土坑が１基となっている。他に風倒木跡３ケ所と，江戸時代の墓坑３基も見付かった。

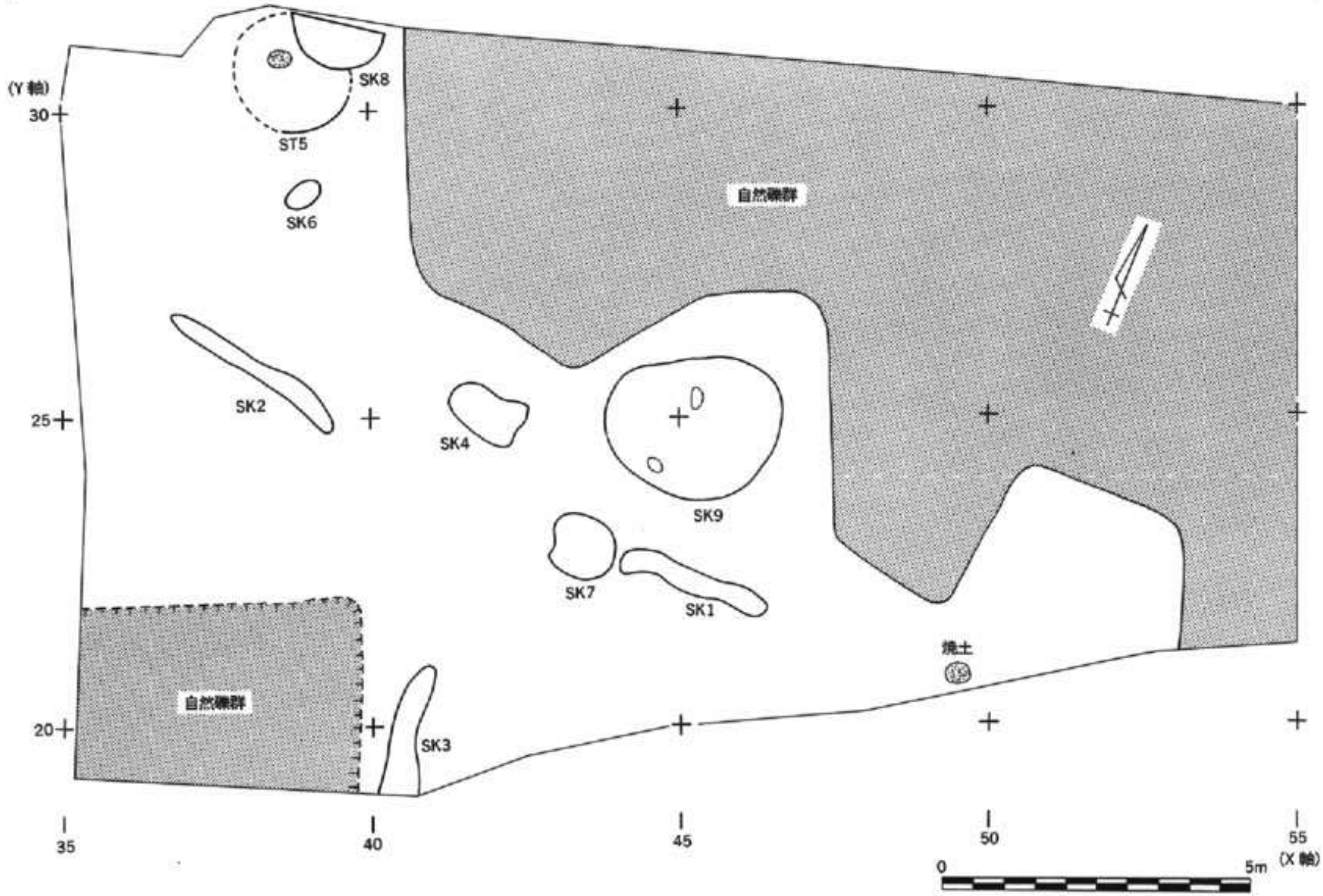
（遺物の分布）

今回の調査で出土した遺物は，整理箱に約２箱であった。土器は縄文時代・弥生時代・古墳時代の土師器・奈良時代の土師器で，石器は縄文時代のものである。また，江戸時代の寛永通宝・陶磁器等も出土した。

面整理段階で出土した遺物には縄文時代から江戸時代にかけての遺物が混在しており，流れ込み等による二次堆積の可能性も考えられる。



第23図　関沢Ｂ遺跡全体図（Ｓ＝1/2,000）



第24図　関沢Ｂ遺跡遺構配置図（Ｓ＝1/200）

2　検出遺構

関沢B遺跡で検出された遺構は，住居跡1棟，土坑5基，風倒木跡3ケ所を数える。

5号住居跡（第27図　図版26）

調査区の北西の端の平坦地，37～39—30～32のグリッドの第Ⅳ層中にて検出された，縄文時代の竪穴住居跡である。遺存状態はあまり良くなく，西側半分では壁面が削平されていた。また，住居跡の北部を切る形で，8号土坑が重複している。そのすぐ東側には，自然の礫群が隣接している。

平面形は不明だが，おそらくは円形を呈するものと思われる。およそ3.5～4.0m径の規模のものであろう。壁面の立ち上がりは比較的急で，高さは南東部で約30cmを測る。床面はなだらかに西方へ下がっている。柱穴は検出されなかった。

炉跡と見られる焼土は，住居跡の北西寄りに位置し，不整の楕円形を示している。東西に長径を取ると，長径78cm×67cmである。

この住居跡からは遺物の出土がほとんどなく，また明確な壁面・柱穴・炉跡も検出されなかったことから，狩猟の際にキャンプ地として使用された遺構と見られる。

1号土坑（第25図　図版25）

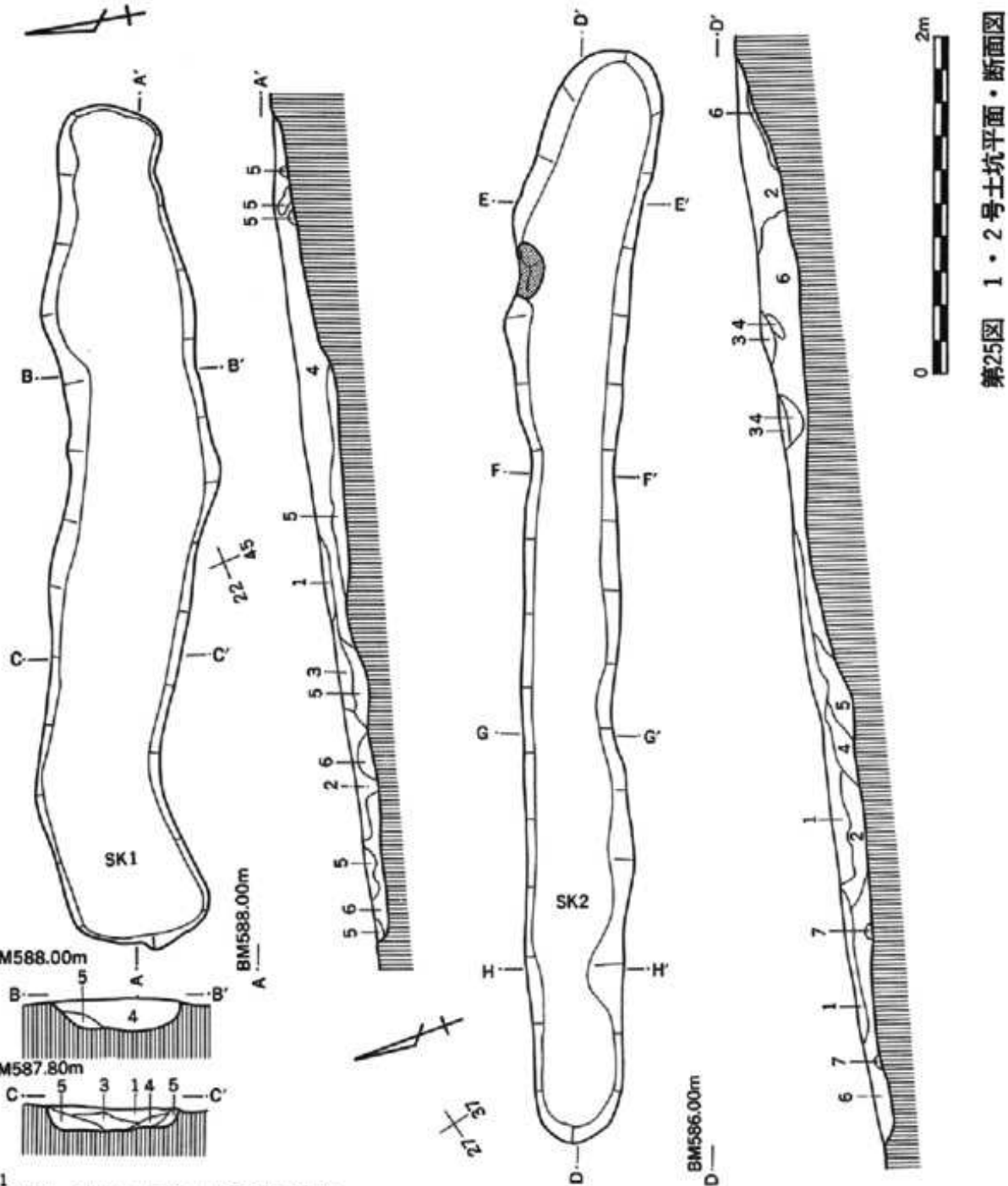
精査区中央部南側の一段高くなった地点，44～46—22・23グリッドの第Ⅳ層で検出された。遺存状態はあまり良くない。重複はない。溝状の細長い不整の長楕円形を呈し，長径は約4.90m×短径75～90cm，長径の方向は磁北を基準にN—80°—Wである。壁面は急斜度で掘り込まれ，高さは約11～19cmを測る。坑底は検出面の地形に沿って緩やかに傾斜している。覆土中の西端は，酸化して赤く堅くなっていた。

2号土坑（第25図　図版25）

精査区西側中央の傾斜地，36～39—25～27グリッド第Ⅳ層中にて検出された。遺存状態はやや良い。重複関係は認められない。平面形はかなり細長い不整長楕円形である。長径は6.35m×短径48～72cmを測り，検出面から坑底までの深さは8～25cmである。長径の方向は磁北を基準としてN—70°—Wとなっている。1号土坑と同様，壁は急斜度で掘り込まれ，床面も検出面の勾配に沿って傾斜しており，覆土内に堅く酸化した土を含む。

3号土坑（第26図）

精査区南端で斜面下方部分の，40—20・21グリッド第Ⅳ層中に位置する土坑である。遺存状態はやや不良である。重複はないが，南端部は調査対象区外のため未調査である。1・2号土坑と同じように，溝状で平面は長楕円形を呈していると推定される。長径が4.28mまで検出されており，短径は33～62cmある。長径はN—86°—Wの方向をもつ。坑底は凹凸があって堅く，南へ行くほど深さは深くなり4～40cmを測る。



第25図　1・2号土坑平面・断面図

SK1

1	黒褐色	10YR2/2	微砂質	サラサラした感触
2	黒褐色	10YR2/3	微砂質	若干の粗砂を含む，サラサラする
3	暗褐色	10YR3/3	粗砂質	砂を多量に含む，ザラザラした感触
4	黒　色	10YR1.7/1	微砂質	黄褐色土を少々含む
5	暗褐色	10YR4/6	微砂質	若干の粗砂を含み，粘性を持つ

SK2

1	黒　色	10YR2/1	粗砂質	サラサラしている
2	黒褐色	10YR2/2	微砂質	黄褐色土が若干混じる
3	暗褐色	10YR3/3	微砂質	焼土，堅くしまっている
4	褐　色	10YR4/6	粗砂質	
5	黒褐色	10YR2/3	微砂質	
6	黄褐色	10YR5/8	微雷質	粗砂を少量含み，粘性がある
7	暗褐色	10YR3/3	微砂質	赤く酸化し，堅くなっている

4号土坑（第26図　図版26）

精査区中央部の傾斜面上，41・42—25・26グリッド第IV層中にて検出された。重複はなく，遺存状態は良好である。平面形は，北東部がやや突き出した形の隅の丸い矩形を呈す。長軸が2.55m×短軸1.35mで，長軸の方向はN—66°—Wを示す。壁面は急斜度をもって掘り込まれており，11～35cmの深さをもつ。坑底は比較的平坦ながら，東部に浅い凹みが2ケ所認められる。覆土内より奈良時代の土師器がややまとまって出土している。

6号土坑（第27図）

精査区北西部緩傾斜地，38・39—28・29グリッドの第IV層中に位置する土坑である。北で5号住居跡と隣接する。重複はなく，遺存状態は悪い。平面形は楕円形を呈し，長径を磁北を基準としてN—28°—Eで取ると，長径1.40m×短径75cmをもつ。深さは3～16cm程度と浅く，壁と底面に35cm以下の礫が多い。覆土は単一層で，遺物はない。

7号風倒木跡（第26図）

精査区中央部やや南寄りの傾斜面，43—23・24グリット第IV層で検出した風倒木跡である。遺存状態は良くない。重複はなく，東側で1号土坑と並んでいる。平面形は不整円形で，リング状に土色の違いが認められた。規模は直径が1.80～2.25m程で，深さは31～54cmを測る。壁は急斜度で，壁面と坑底部には30cm以下の礫が多数認められる。

石槍が一点覆土の2層中から見付かった以外，遺物はほとんどない。

8号風倒木跡（第27図　図版26）

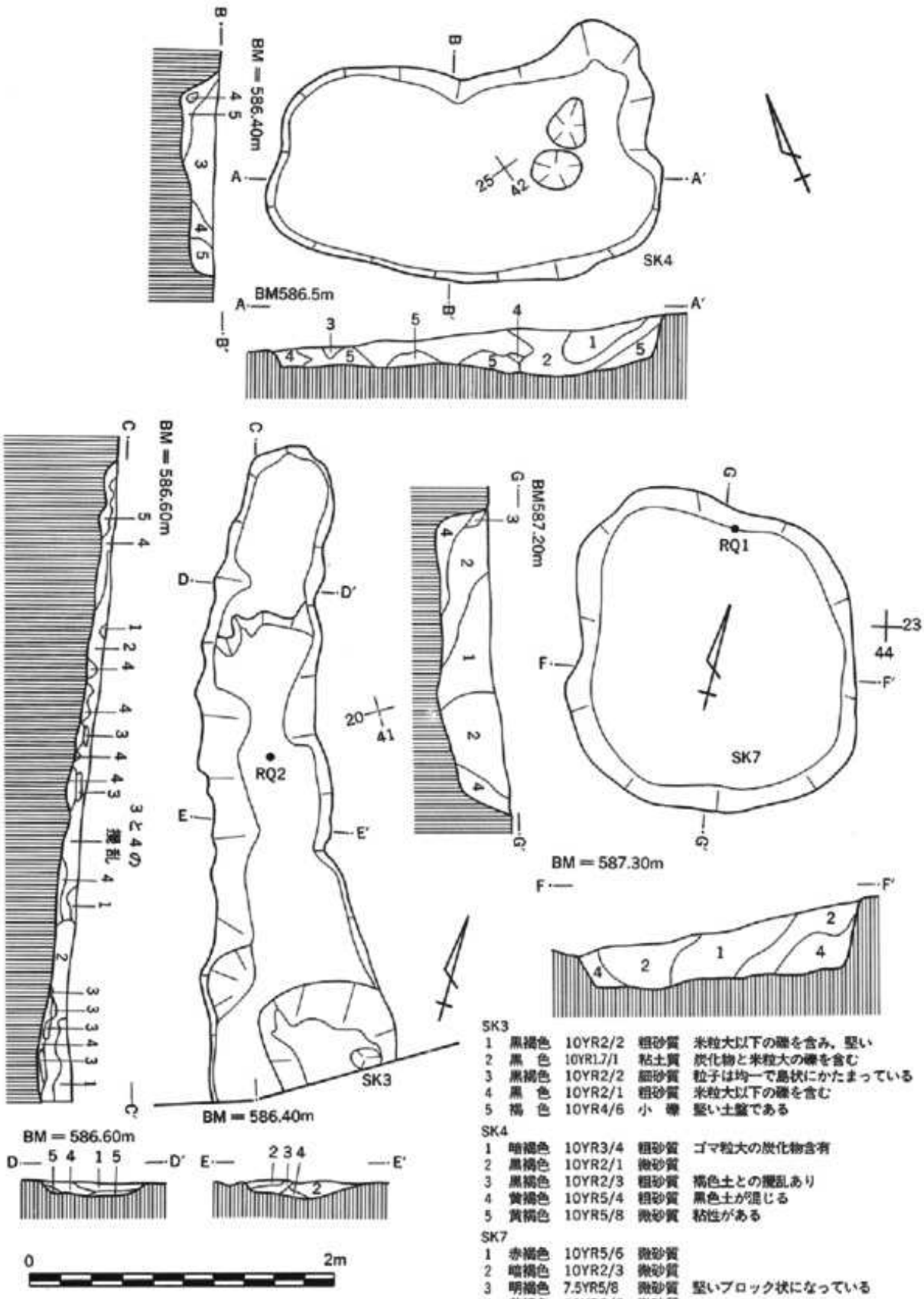
精査区西側北端の自然礫群に近接する38～40—31・32グリッドの第IV層上位で見付かった風倒木跡である。遺存状態は良くない。重複は，西側で5号住居跡に切り込んでいる。平面形は円形と考えるが，その北半は調査区域の外である。規模は直径が約1.62mあり，深さは最低部で93cmであった。壁面は急斜度で坑底まで続き，断面形は逆三角形に近い。

覆土は堅く，遺物はほとんど出土しなかった。

9号風倒木跡（第27図　図版27）

精査区の中央部の上段斜面上，43～46—24～26グリッドの第IV層にて検出された風倒木跡である。上層部で掘削と攪乱を受け遺存状態は良くない。平面形は不整の円形を見せる。直径で4.60～5.40mとかなり規模が大きく，検出面から坑底までの深さは10～48cmあった。壁面は落ち込みがやや緩やかで，坑底部での凸凹が激しい。壁面，底面を問わず様々な大きさの礫で覆われていたが，特に東端北側には15cm以下の中礫がかたまっており，中央部東寄り南側には10cm以下の小礫が集積していた。

遺物は各土坑中最も多く，縄文時代・弥生時代の土器，石鏃の他，江戸時代の寛永通宝が9枚とキセル，かんざし等の金属製品と陶器片も出土している。



SK3

1	黒褐色	10YR2/2	粗砂質	米粒大以下の礫を含み、堅い
2	黒　色	10YR1.7/1	粘土質	炭化物と米粒大の礫を含む
3	黒褐色	10YR2/2	細砂質	粒子は均一で島状にかたまっている
4	黒　色	10YR2/1	粗砂質	米粒大以下の礫を含む
5	褐　色	10YR4/6	小　礫	堅い土盤である

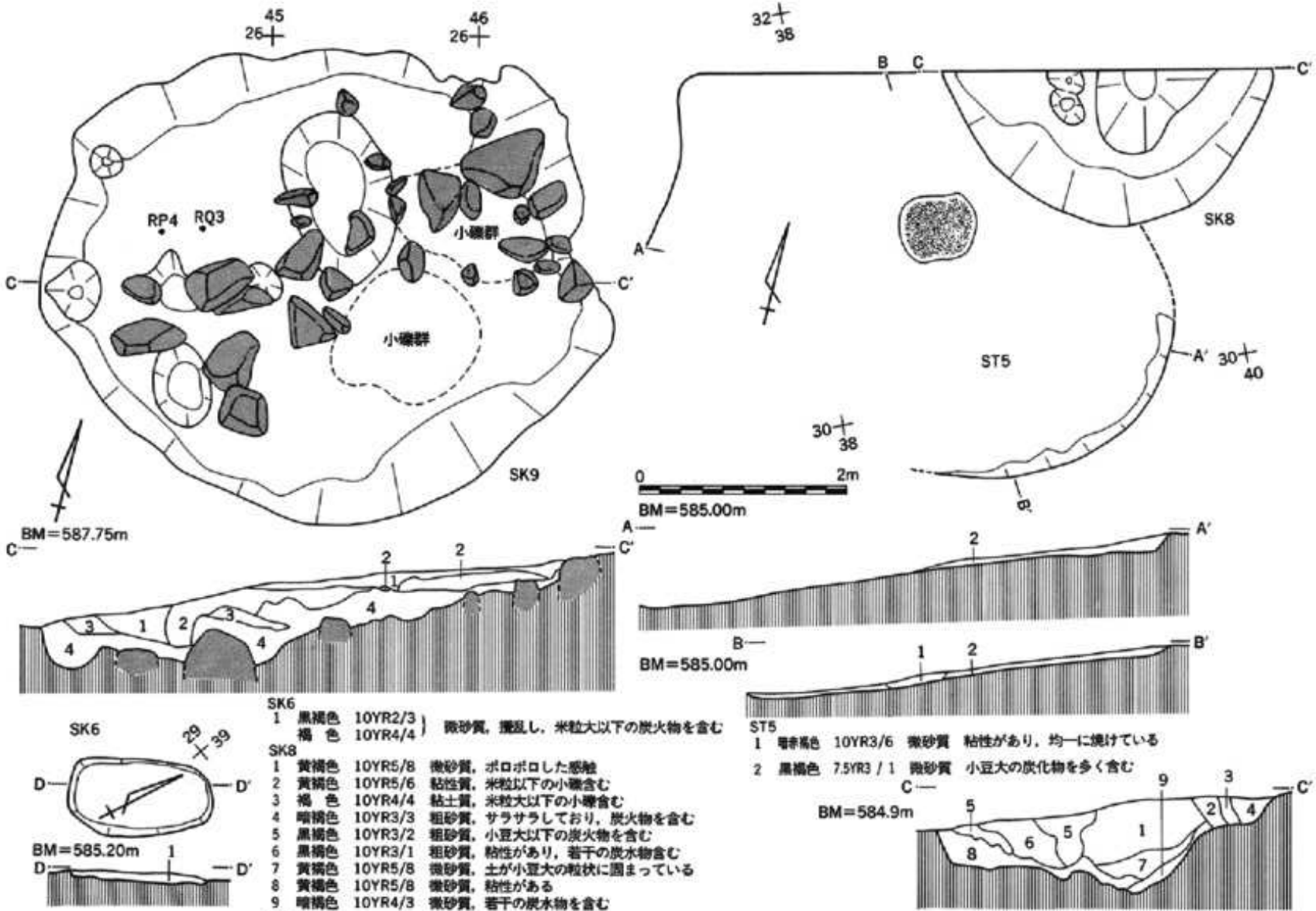
SK4

1	暗褐色	10YR3/4	粗砂質	ゴマ粒大の炭化物含有
2	黒褐色	10YR2/1	微砂質	
3	黒褐色	10YR2/3	粗砂質	褐色土との攪乱あり
4	黄褐色	10YR5/4	粗砂質	黒色土が混じる
5	黄褐色	10YR5/8	微砂質	粘性がある

SK7

1	赤褐色	10YR5/6	微砂質	
2	暗褐色	10YR2/3	微砂質	
3	明褐色	7.5YR5/8	微砂質	堅いブロック状になっている
4	黄褐色	10YR5/6	微砂質	

第26図　3・4・7号土坑平面・断面図



SK6
1 黒褐色 10YR2/3 ｝ 微砂質，撹乱し，米粒大以下の炭火物を含む
褐 色 10YR4/4 ｝

SK8
1 黄褐色 10YR5/8 微砂質，ポロポロした感触
2 黄褐色 10YR5/6 粘性質，米粒以下の小礫含む
3 褐 色 10YR4/4 粘土質，米粒大以下の小礫含む
4 暗褐色 10YR3/3 粗砂質，サラサラしており，炭火物を含む
5 黒褐色 10YR3/2 粗砂質，小豆大以下の炭火物を含む
6 黒褐色 10YR3/1 粗砂質，粘性があり，若干の炭水物含む
7 黄褐色 10YR5/8 微砂質，土が小豆大の粒状に固まっている
8 黄褐色 10YR5/8 微砂質，粘性がある
9 暗褐色 10YR4/3 微砂質，若干の炭水物を含む

SK9
1 黒 色 10YR1.7/1 微砂質，所々に黄褐色土を含む
2 黒褐色 10YR2/3 微砂質，粘性あり，粗砂を含む炭水物混入
3 暗褐色 10YR3/3 粗砂質，粘性で堅い
4 黄褐色 10YR5/8 粘土質，微粒子で粘性が高い，炭水物含む

ST5
1 暗赤褐色 10YR3/6 微砂質 粘性があり，均一に焼けている
2 黒褐色 7.5YR3/1 微砂質 小豆大の炭化物を多く含む

第27図　5号住居跡6・8・9号土坑平面・断面図

3　出土遺物

本遺跡から出土した遺物は整理箱に2箱である。土器・石器のほか寛永通宝などが出土しており，遺構からの出土はみられずその大半は包含層からの出土であり，土器は小片のみで石器も剝片が多い。

a　土　器　(第28図　図版27・28)

本遺跡から出土した土器は，縄文時代早期から古墳時代までおよぶ多様なものがあり，時代および型式が識別できるものは，挿図中に示したものだけである。時代毎にあるいは時期別によって，施文技法や文様構成によって分類する。

第Ⅰ群土器，縄文時代早期中葉から末葉にかけての時期である。

a類(第28図2)　沈線を主体として斜格子状に，太い沈線で口唇直下から施している。口唇部平坦で，内弯する器形を有する。焼成は良好で，繊維を含まない。田戸下層式に併するとみられる。

b類(第28図10)　細い沈線によって斜行状に文様が施され，逆「く」字状の有段をもち竹管による刺突文が充塡される。内面には横走する粗大な貝殻条痕をもつ。鵜ケ島台式に併行する。

c類(第28図1・5)　貝殻条痕を地文とし斜行して施され，5は有段で波状の沈線を有する。槻木下層式に比定される。

d類(第28図6・7)　斜行する撚糸文を主体とする。早期末葉の時期である。

第Ⅱ群土器(第28図8・9)　縄文時代中期末葉の時期で文様は曲線的に施され，口唇部が磨消されている。大木10式に比定される。

第Ⅲ群土器　縄文時代後期前半と後葉の時期である。

a類(第28図3・4)　地文を縄文として曲線的な区画内は磨消手法で，門前式に比定。

b類(第28図11～13)　12は無文で良く調整され，11・13の底部は底面の中央が上げ底となっている。新地式に比定される。

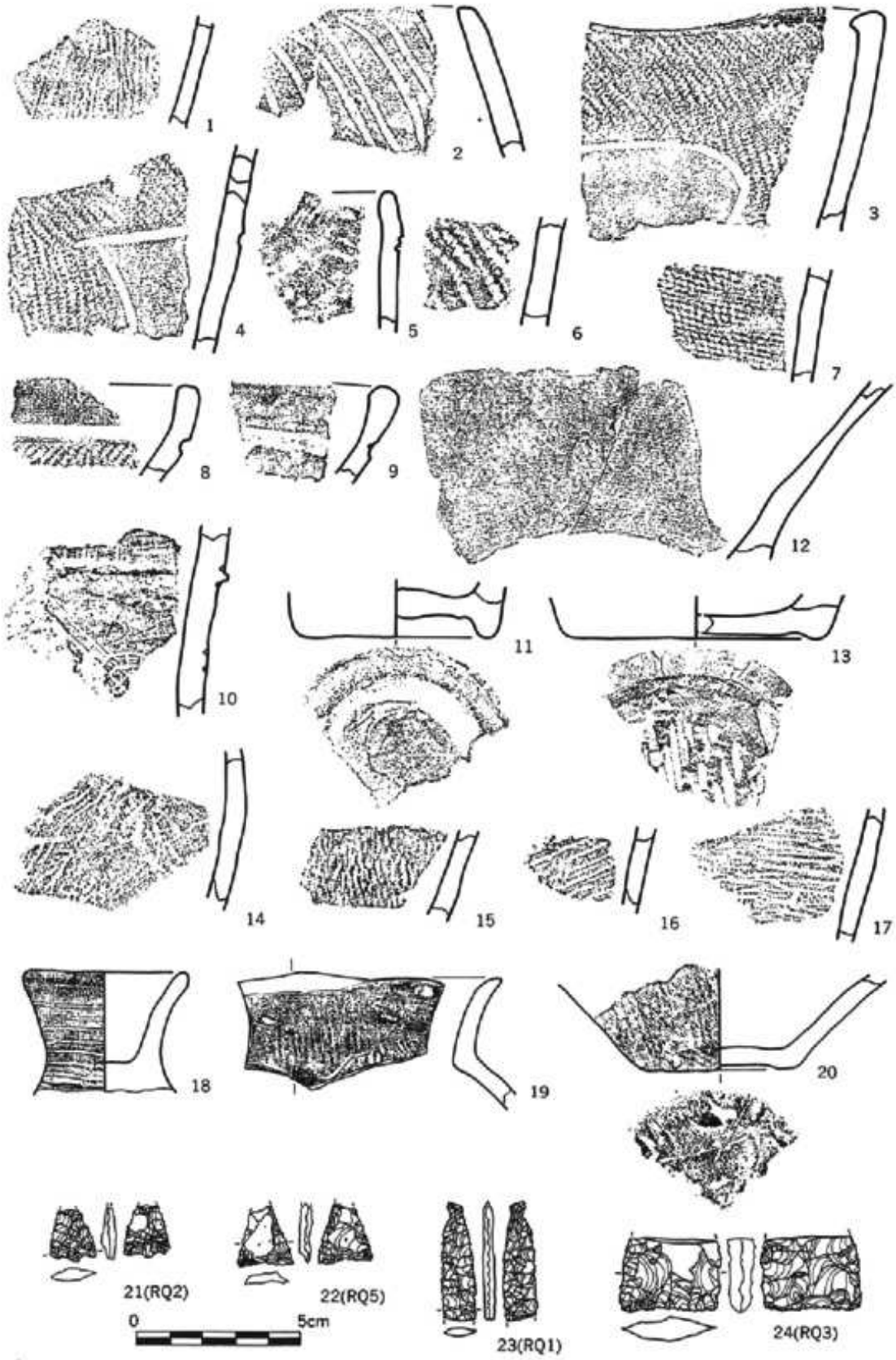
第Ⅳ群土器(第28図14～18)　弥生時代中期の土器である。18は壺形土器の蓋であり，細沈線が横走して施される。14～17は撚糸状の附加縄文である。桜井式に比定される。

第Ⅴ群土器(第28図19・20)　古墳時代の土器である。19は壺形を呈し頸部が「く」字状を示して口縁が開く。20は壺形の底部である。いずれも刷毛目調整技法が認められる。

b　石　器　(第28図21～24)

石鏃(21・22)　21は有茎で，22は無茎である。側縁は両面から交互剝離技法である。

石匙(23・24)　両方とも縦長の形状で，全体的に丁寧な調整が施されている。



第28図　出土遺物拓影・実測図

V章　調査のまとめ

今回発掘調査した向山・関沢B遺跡は，山形市の東部に位置し，馬見ヶ崎川流域の低位河岸段丘上に立地している。向山遺跡は，平安時代と縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての複合した集落跡であり，検出された遺構は竪穴住居跡5（平安時代2・縄文時代3）で土坑10（縄文時代）である。出土した遺物は，主に土器や石器で整理箱27箱を数える。関沢B遺跡では，竪穴住居跡1（縄文時代）・土坑5（縄文時代，奈良時代）・風倒木跡3（時期不明）が検出され，出土遺物では土器や石器など整理箱2箱を数える。

今回は，山形市大字下宝沢字向山ならびに同市関沢字大谷沢地内に，昭和62年度に東北横断自動車道酒田線建設事業に係るため，事前に緊急発掘調査を実施したものであり，これらの記録をまとめたものが本報告書である。

1　出土土器について

向山遺跡から出土した土器は，時代を大きく分けると縄文時代と平安時代に分けられ，その主体を示すものは縄文時代後期の後葉から晩期初頭の時期であり，大部分は3～5号住居跡や6～9号土坑の覆土内から出土している。

（平安時代の土器について）

数量的には整理箱に1箱であり，1・2号住居跡の覆土から床面にかけて出土したものである。土器は土師器と須恵器に分けられ，その用途からみて坏・甕・壺形の3種類に分けられる。製作上の手法あるいは形からみて，須恵器の坏はヘラ切り底と回転糸切り底とがあり，前者は9世紀前半，後者は9世紀中頃から後半である。土師器の甕形土器は「く」字状に開く口縁が特徴であり9世紀中頃から後半と考えられる。平安時代の前半を示す土器群である。

（縄文時代の土器について）

前期の土器について一括した第Ⅰ群土器は，土器の胎土に若干繊維質の混入が認められ，斜状の羽状縄文を施しているのが特徴であり，縄文時代前期大木1式に比定されるとみられる。

第Ⅱ群土器は，曲線的なS字状文様の構成を示し，文様の区画内に縄文を充填し，区画外を磨消しによる調整技法を施しており，縄文時代中期の大木10a式に相当するとみられる。

第Ⅲ群土器群は今回の調査した土器の主体をなすもので，縄文時代後期の後葉期から晩

期初頭にかけての文様・技法などを示すもので，新地式・金剛寺系統の「瘤付土器」と亀ケ岡式土器の文様系統の祖形である三叉文系の土器群である。その文様構成や施文によって6型式に区分される。

第III群土器のIII1d類・III7類を除いた一群であり，「瘤付土器」の系統の土器で，4型式に区分される。

III2類土器　器形は頸部がしまる口縁の開いた深鉢形土器で，入組文の区画内に地文を羽状に充填したり，刷毛目文などを施しており，貼瘤は深鉢の口縁部や注口部にわずかに貼付されている。縄文時代後期新地1式に相当するとみられる。

III1a類・III3a類・III6a類・III6b類・III6c類土器　器形はIII2類と共通し頸部がしまり口縁の開いた深鉢形土器を呈している。文様は，斜縄文を区画内に充填したものや無文による入組帯状文，弧線連結文などで構成され，その文様の要所要所に多数の小さな瘤を貼付しているもの，半卵割形の深鉢形土器に格子目状沈線を施し，同様に多くの貼瘤がみられるもの等があり，恐らく貼瘤の全盛期と考えられる。縄文時代後期新地2式に相当するものとみられる。

III1b類・III4類土器　器形は頸部がしまる深鉢形を呈し，斜縄文を文様区画内に充填するものと無文になるものがある。III1a類外に比べると文様構成がやや扁平化した入組帯状文や弧線連結文を描き，口頸部の区画帯や入組文内部に刺突貼瘤を施している。

貼瘤はIII1a類の土器よりも少なくなりあまり貼付されず，やや大き目の縦長の刻目を施したものや円形浮文状に貼付するものが1～2ケ単位で要所にみられる。縄文時代後期新地3式に相当すると考えられる。

III1c類・III3b類・III5類・III8類土器　頸部がしまり口縁が開く深鉢形や半球形状の深鉢形土器に，斜縄文や刻目による入組帯状文や変形の弧線連結文が描出されているものである。口縁部突起の下部や入組文の結節部に三叉状陰刻が施されたものである。瘤はあまり貼付されず，やや大き目の縦長のものを横に刻んだものなどがある。縄文時代後期新地4式に相当するとみられる。

第IV群土器とIII1d類・III7類土器群であり，「三叉文」系の発達段階によって大きくみると2型式に分類する。

III1d類・III7類・IV1a類・IV1b類・IV2類土器群　文様が入組文からの祖形が未だ残っており完全に離脱してない魚眼状文・玉抱き三叉文・三叉状陰刻などの文様を有している。縄文時代晩期大洞B_1式に相当するものである。

VI1c類・VI3a・b・c類土器群　前者の入組文が完全に離脱して三叉文やC字状文およびS字状文など横方向へ曲線的な文様構成を示し，口縁部に文様帯を形成している。

縄文時代大洞B$_2$式に相当する。

第V群土器　土器の器面全体に刷毛目や櫛描状の細線を施し文様を描いている粗製土器である。これらは文様構成などからみて恐らく縄文時代後期の新地1～4式に比定されるが，精製土器との共伴関係において不明な点が多くその存在が明確ではない。

その他VI群土器からVIII群土器についてもその共伴関係が明瞭ではなく，縄文時代後期後葉から晩期初頭として一括しておく。

土製品・石器・石製品にも貴重な資料が得られている。器種や種類によって時期はその大半が縄文時代後期後葉から晩期初頭の時期であるが，これらは今回の調査では相対的にない特徴を示している。

なお，関沢B遺跡の出土遺物については，その概要についてIII章3出土遺物の項に述べているので今回は割愛するものである。

2　遺構について

向山遺跡は，今回の調査では低位河川段丘上の山麓付近を調査したものでその全体は明らかではないが，集落の構成は恐らく段丘上の側辺部に沿うように拡がると見られる。

今回は調査区も限定されていたが，A地区に全ての遺構が集中し，平安時代の住居跡は散在的に東と西に分かれて在る。縄文時代の住居跡や土坑はA地区の中央から東側にかけて，とくに東部を中心に住居跡群が密集しており，恐らく調査区の北側や南側に延びる可能性がある。これら住居跡や土坑を時期別に分けると下記のようになる。

第I期（縄文時代後期後葉新地式期を主体とする）

この時期は，A地区の中央部から東側寄りの緩斜地に在り，3・4号住居跡や10～15号土坑がこの時期に比定される。住居跡は不整の楕円形を呈し，地床炉であり柱穴も壁際に沿って在る。土坑群は重複がなく散在しており，平面形は円形や楕円形を示している。

第II期（縄文時代晩期初頭大洞B式期を主体とする）

A地区のもっとも東側の平坦地あたりに位置し，5号住居跡や6～9号土坑もこの時期に比定され，住居跡を取りかこむように土坑が重複している。住居跡は不整の隅丸方形を呈し，石囲炉を有し，炉の位置関係および柱の状態からみて建替があったとみられる。

第III期（平安時代9世紀中頃から後半にかけてを主体とする）

A地区の西端と中央部に位置し，方形を呈しカマドを有する住居跡である。

関沢B遺跡は，遺構の検出および出土遺物からみて，縄文時代早期・弥生時代・古墳時代を通して，キャンプサイト的な性格をもつ遺跡と考えられる。

参考文献

山形県教育委員会　1981『分布調査報告書(8)』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第45集
山形県教育委員会　1987『分布調査報告書(10)』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第110集
山形県教育委員会　1987『新山A遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第109集
山形県教育委員会　1985『にひゃく寺遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第92集
山形県教育委員会　1986『境田C'D遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第105集
山形県教育委員会　1979『熊ノ前遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第16集
山形県教育委員会　1979『山形西校敷地内遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第17集
山形県教育委員会　1983『いるかい遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第69集
山形県教育委員会　1983『泥部遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第70集
山形県教育委員会　1981『町下遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第57集
山形県教育委員会　1983『原の内A遺跡第2次発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第71集
山形県教育委員会　1983『中村A遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第73集
山形県教育委員会　1984『吹浦遺跡第1次緊急発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第82集
山形県教育委員会　1985『吹浦遺跡第2次緊急発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第93集
山形県教育委員会　1978『水木田遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第75集
山形県教育委員会　1980『水上遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第27集
山形県教育委員会　1985『荒谷原遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第90集
山形県教育委員会　1987『三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(2)』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第107集
山形県教育委員会　1987『南興野遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財発掘調査報告書　第114集
遊佐町教育委員会　1972『神矢田遺跡発掘調査報告書』
山形県朝日村教育委員会　1984『砂川A遺跡発掘調査報告書』朝日村埋蔵文化財発掘調査報告書　第2集
山　形　県　1983『山形県史』第一巻　原始・古代・中世編
村　山　市　1982『村山市史』別巻1
村山市教育委員会　1978『村山市の土器』　村山市文化財叢書　第1編
青森県立郷土館　1980『大平山元II遺跡発掘調査報告書』　青森県立郷土館調査報告書　第8集
青森県立郷土館　1981『大平山元III遺跡発掘調査報告書』　青森県立郷土館調査報告書　第11集
北上市教育委員会　1986『九年橋遺跡第9次調査報告書』　北上市文化財調査報告書　第42集
宮城県教育委員会　1979『東北自動車道遺跡調査報告書I 上深沢遺跡』　宮城県文化財調査報告書　第52集
山形大学教育学部歴史学研究会考古学部会　1983『山形県山形盆地馬見ヶ崎川上流域遺跡分布調査報告概要』
佐藤庄一　1978『山形県における縄文時代末期の土器様相』　山形考古第3巻第3号
鈴木克彦　1979『考古風土記』第5・6号
加藤晋平編　1982『縄文文化の研究3』縄文土器I　雄山閣出版株式会社
加藤晋平編　1982『縄文文化の研究4』縄文土器II　雄山閣出版株式会社
野口義麿編　1981『縄文土器大成　第3巻　後期』　講談社
鈴木公雄・林謙作編　1981『縄文土器大成　第4巻　晩期』　講談社
藤村東男　1984『縄文土器の知識II』(中・後・晩期)　考古学シリーズ15　東京美術
玉口時雄　1984『土師器・須恵器の知識』　考古学シリーズ17　東京美術
加藤晋平・鶴丸俊明　1980『図録　石器の基礎知識I』先土器(上)　柏書房
加藤晋平・鶴丸俊明　1981『図録　石器の基礎知識II』先土器(下)　柏書房
鈴木道之助　1981『図録　石器の基礎知識III』縄文　柏書房

図　　版

遺跡遠景（S↑）

遺跡近景（W↑）

図版 2

作業風景（トレンチ粗掘作業）

作業風景（拡張作業）

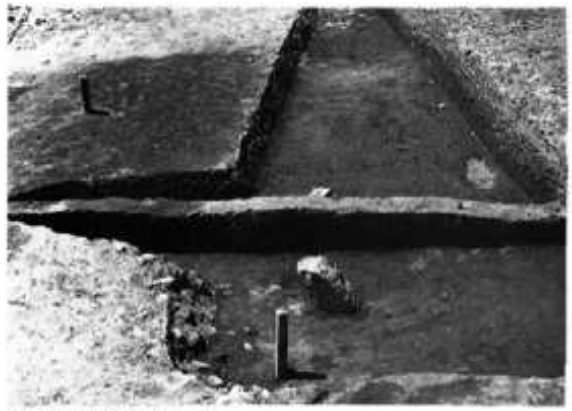
A地区遺構確認状況（E↑）

A地区遺構検出状況（E↑）

図版4

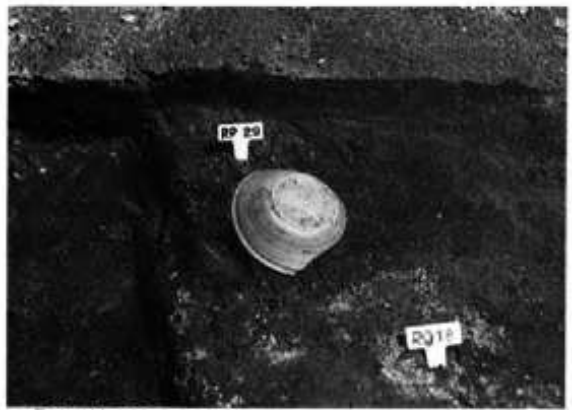
1号住居跡（E↑）

1号住居跡（S↑）

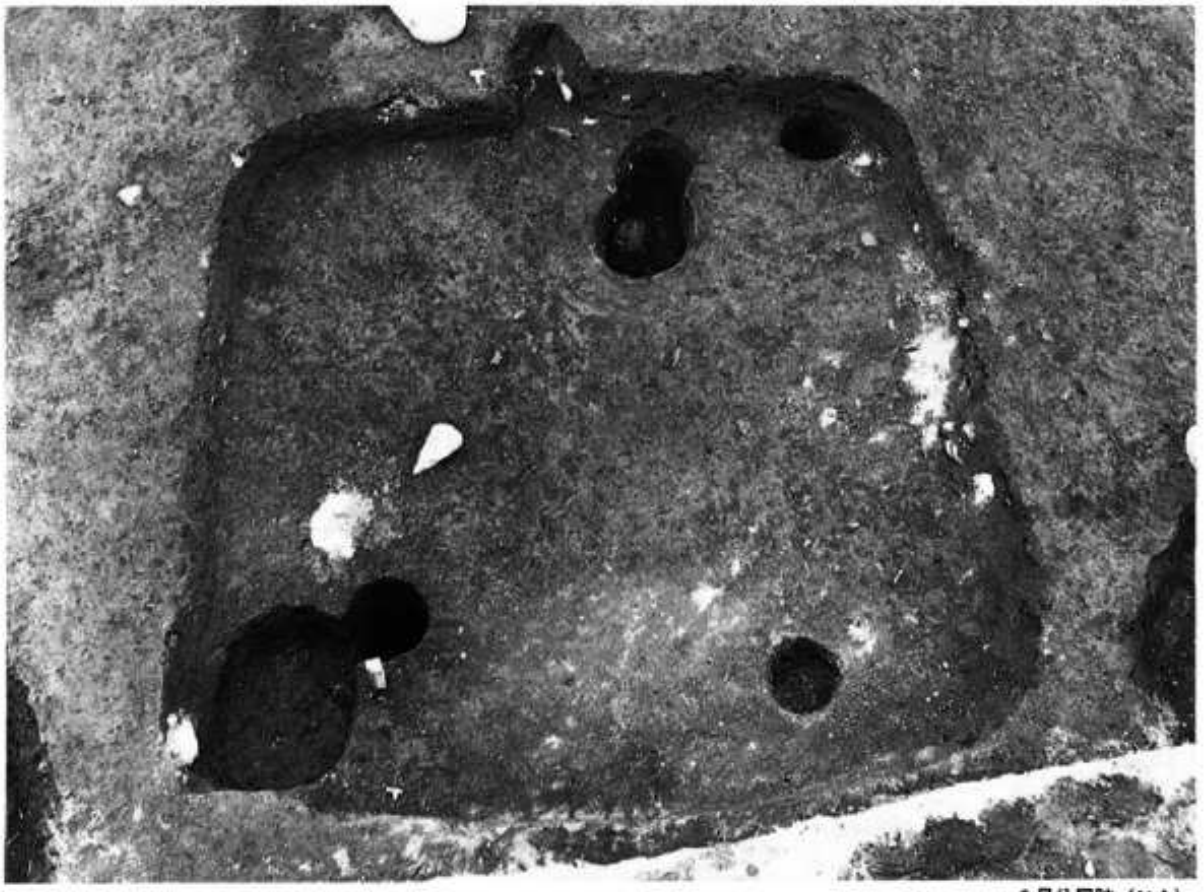


1号住居跡近景（E↑）

1号住居跡土器出土状況（RP 28）（S↑）



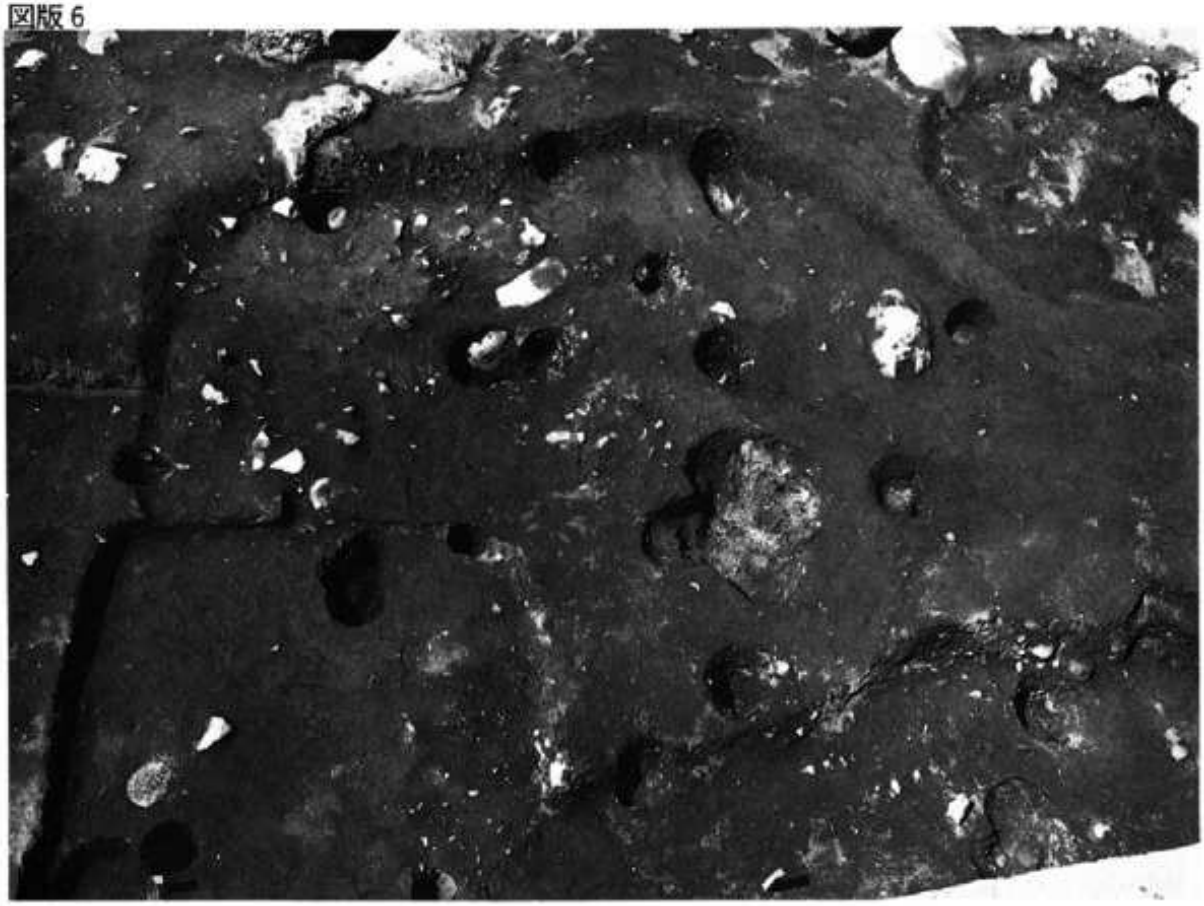
1号住居跡土器出土状況（RP 29）（S↑）



2号住居跡（N↑）

2号住居跡近景（S↑）

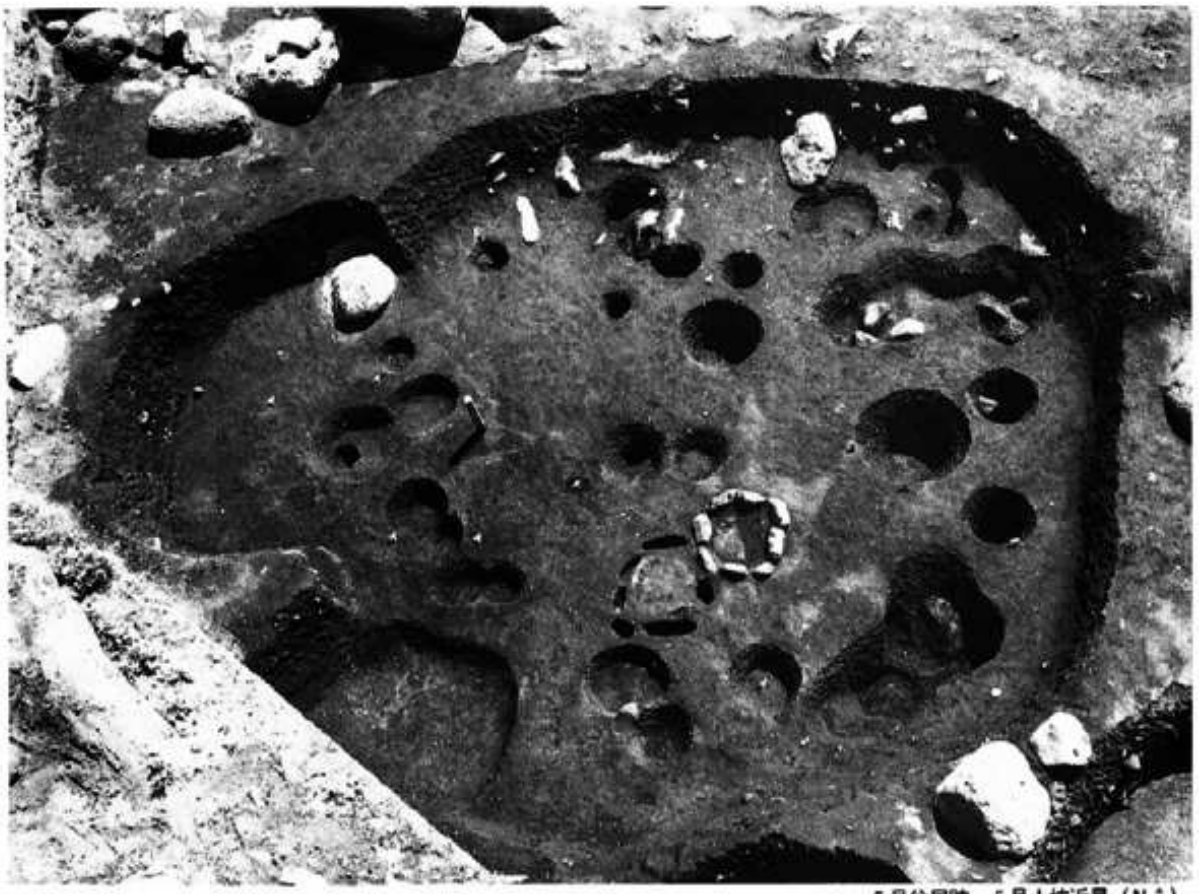
図版 6



3・4号居跡（N↑）

3・4号住居跡近景（S↑）

5号住居跡・6号土坑（E↑）



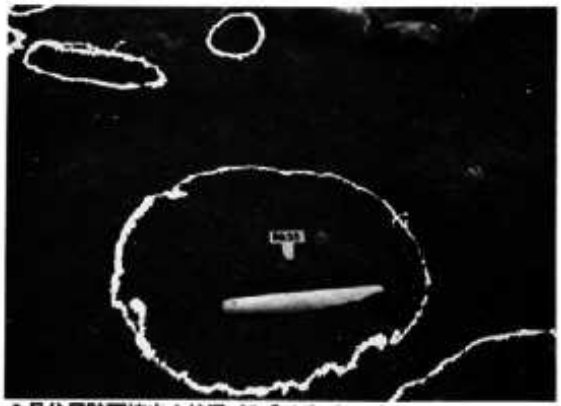
5号住居跡・6号土坑近景（N↑）

図版 8

19・20 号炉跡（W↑）

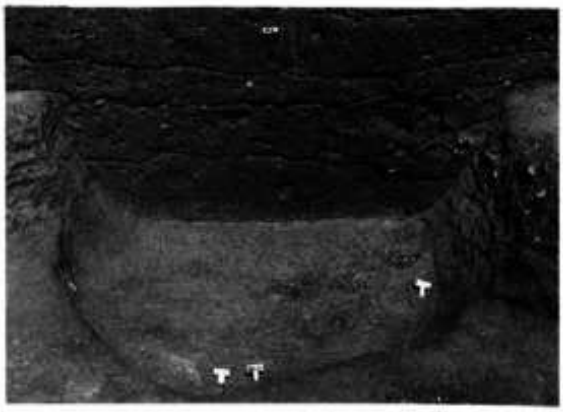
5 号住居跡近景（W↑）

19・20 号炉跡土層セクション（W↑）



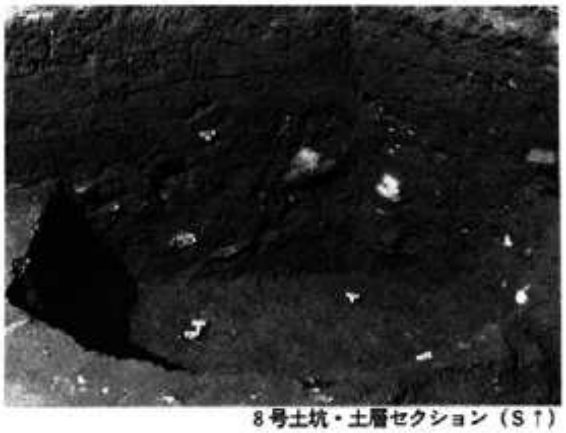
5 号住居跡石棒出土状況（R Q 35）（N↑）

6 号土坑（W↑）



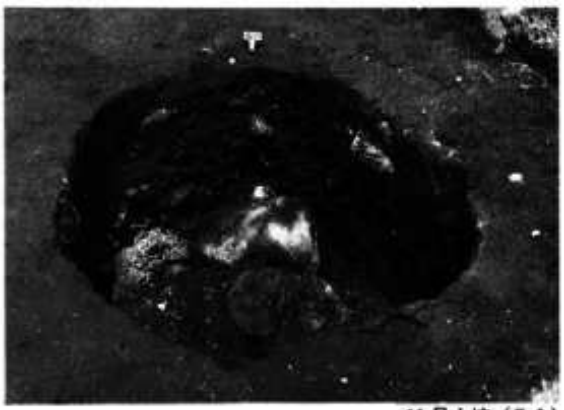
7号土坑（S↑）

8・9号土坑（E↑）

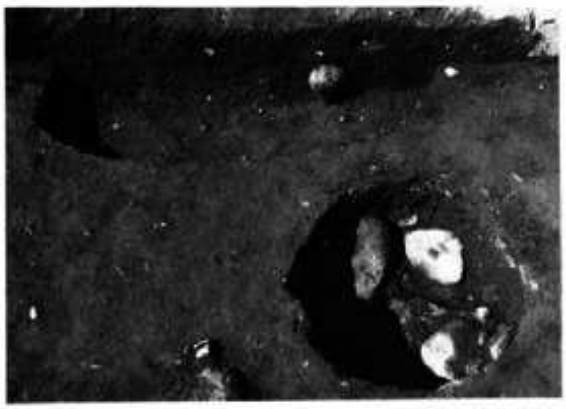


8号土坑・土層セクション（S↑）

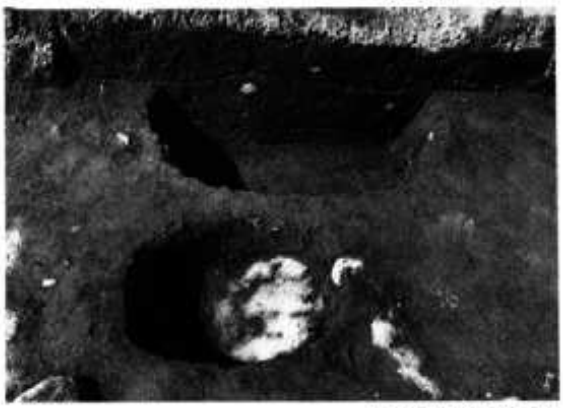
9号土坑・土層セクション（S↑）



11号土坑（E↑）



12・13号土坑（S↑）



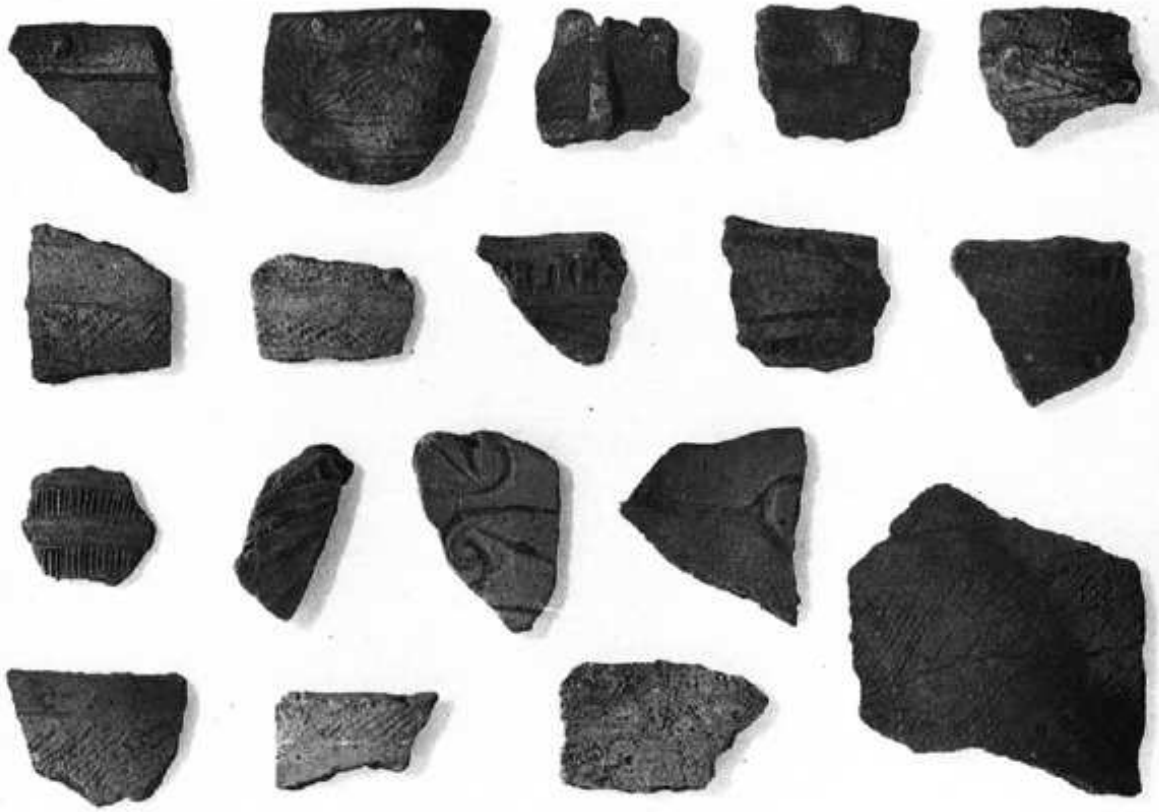
14・15号土坑（S↑）

B地区土器出土状況（RP 36）（W↑）

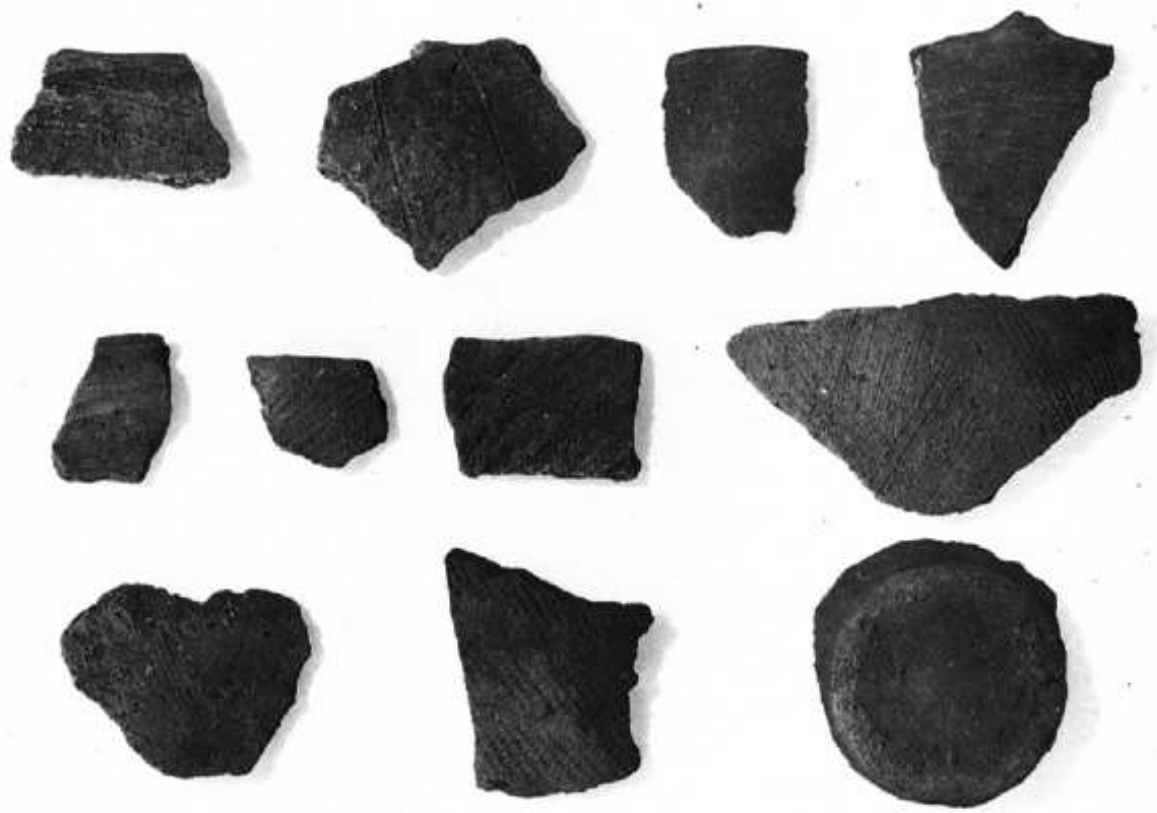
図版 10

10 号土坑（W ↑）

10 号土坑埋設土器出土状況（R P 32）（N ↑）

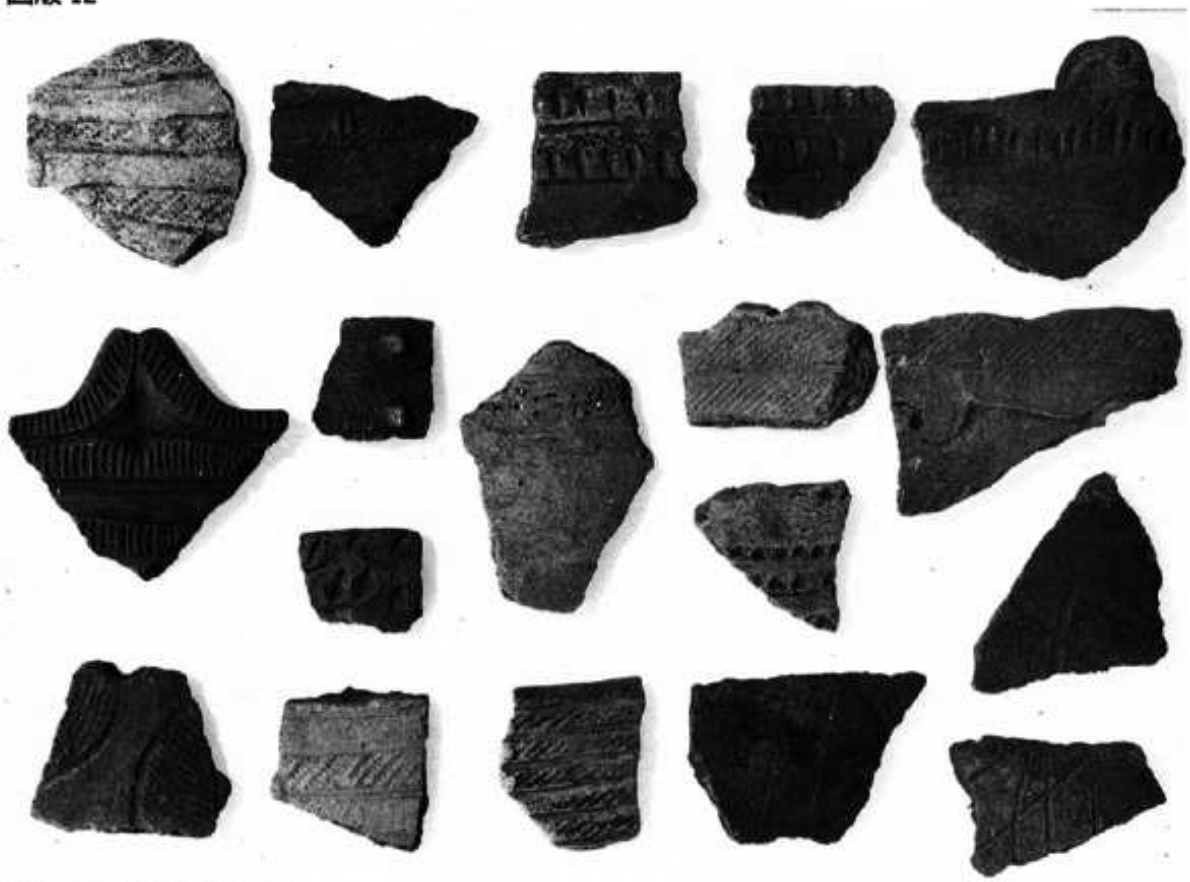


3号住居跡出土土器(1)（S＝½）

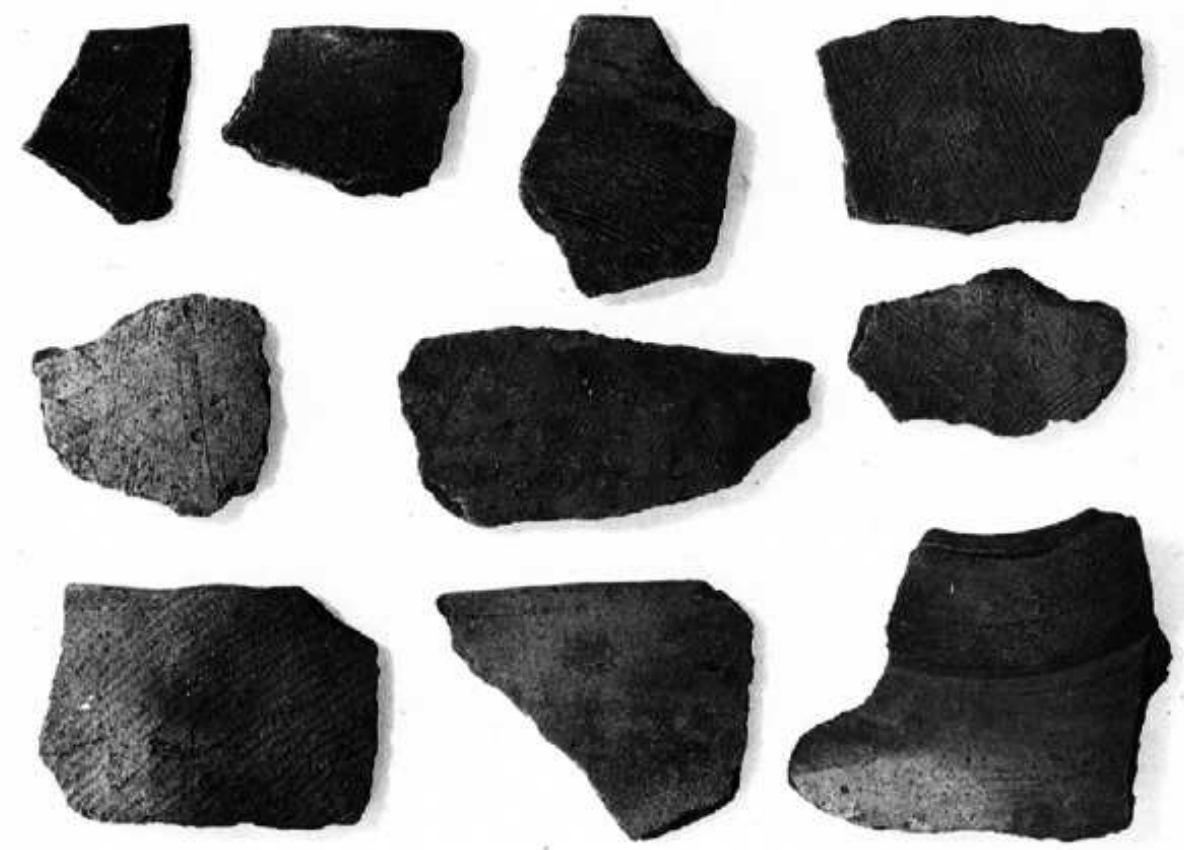


3号住居跡出土土器(2)（S＝½）

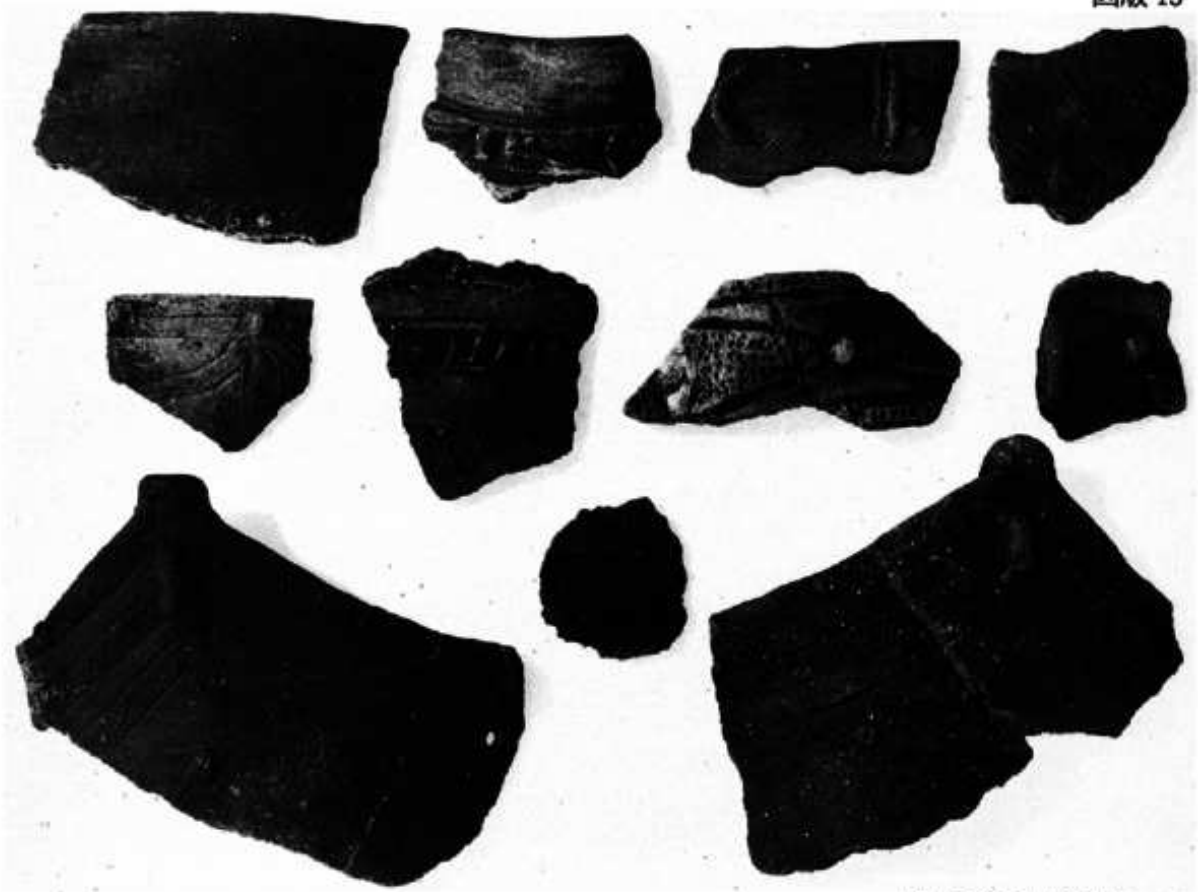
図版 12



4号住居跡出土土器(1)（S＝½）

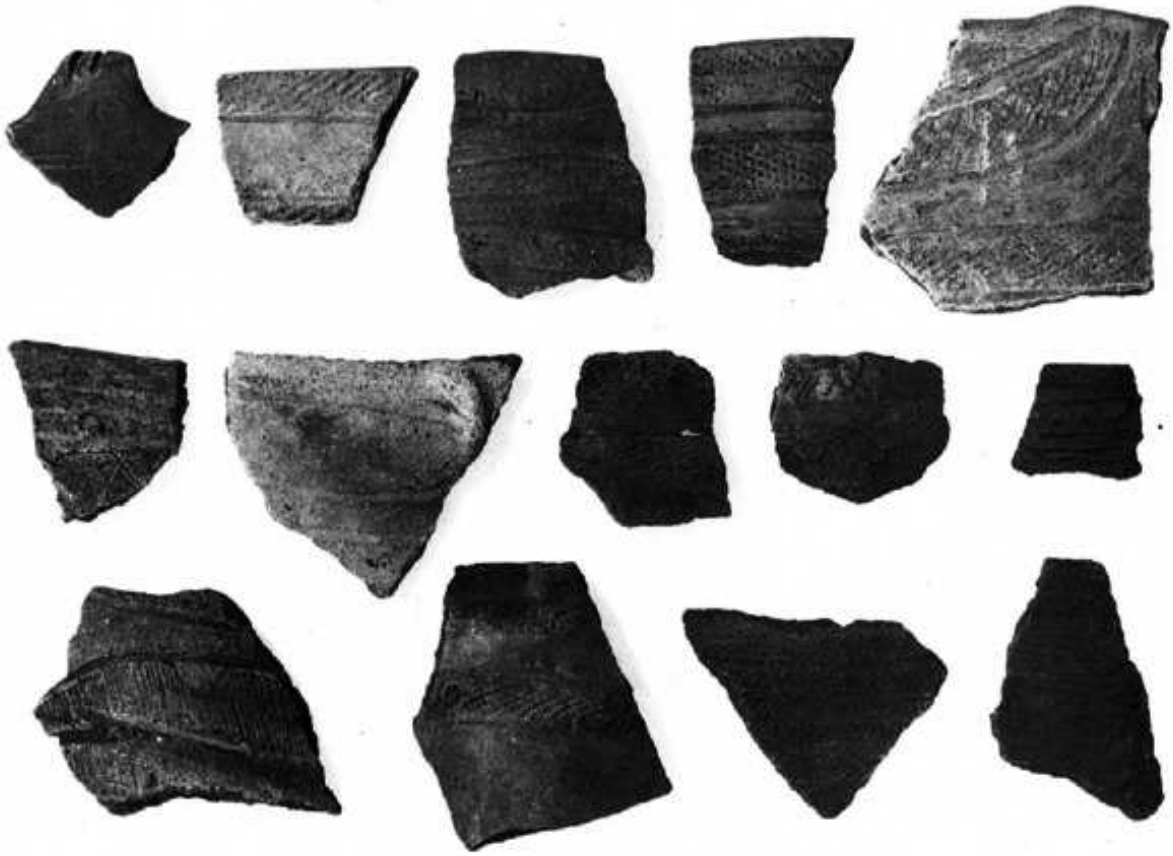


4号住居跡出土土器(2)（S＝½）



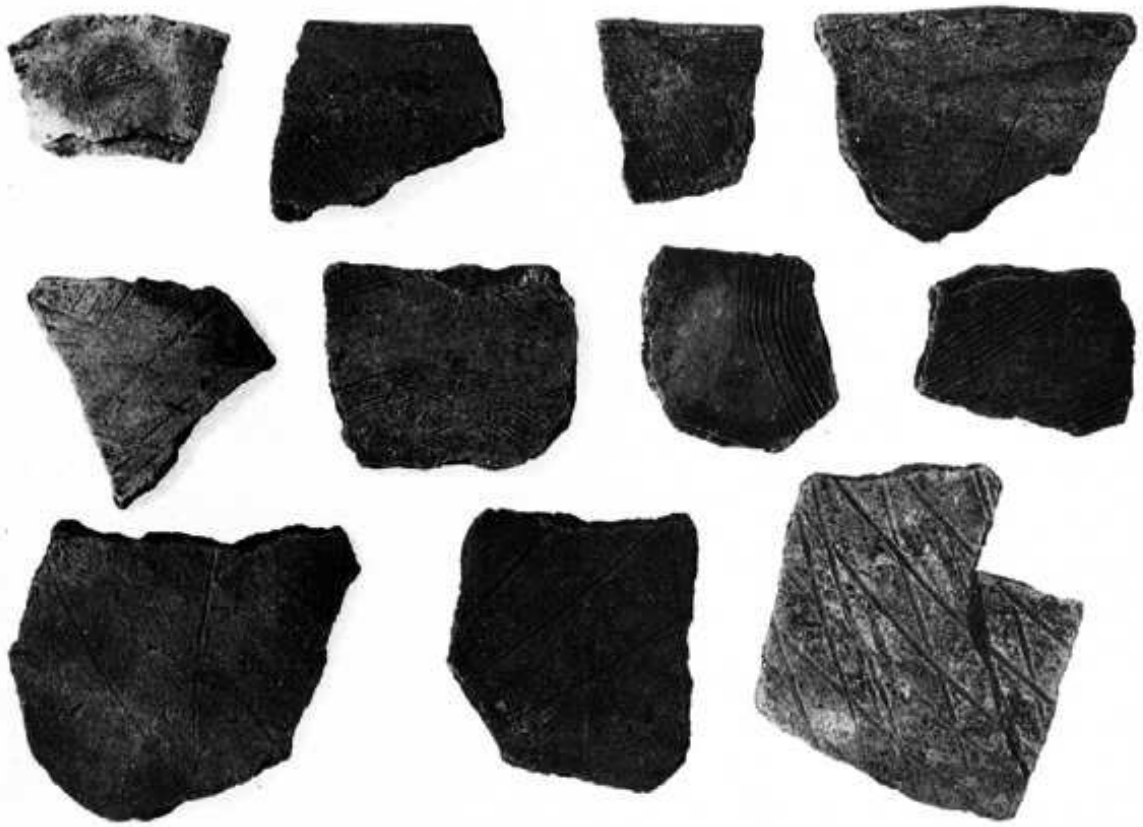
5号住居跡出土土器(1)（S＝½）

5号住居跡出土土器(2)（S＝½）

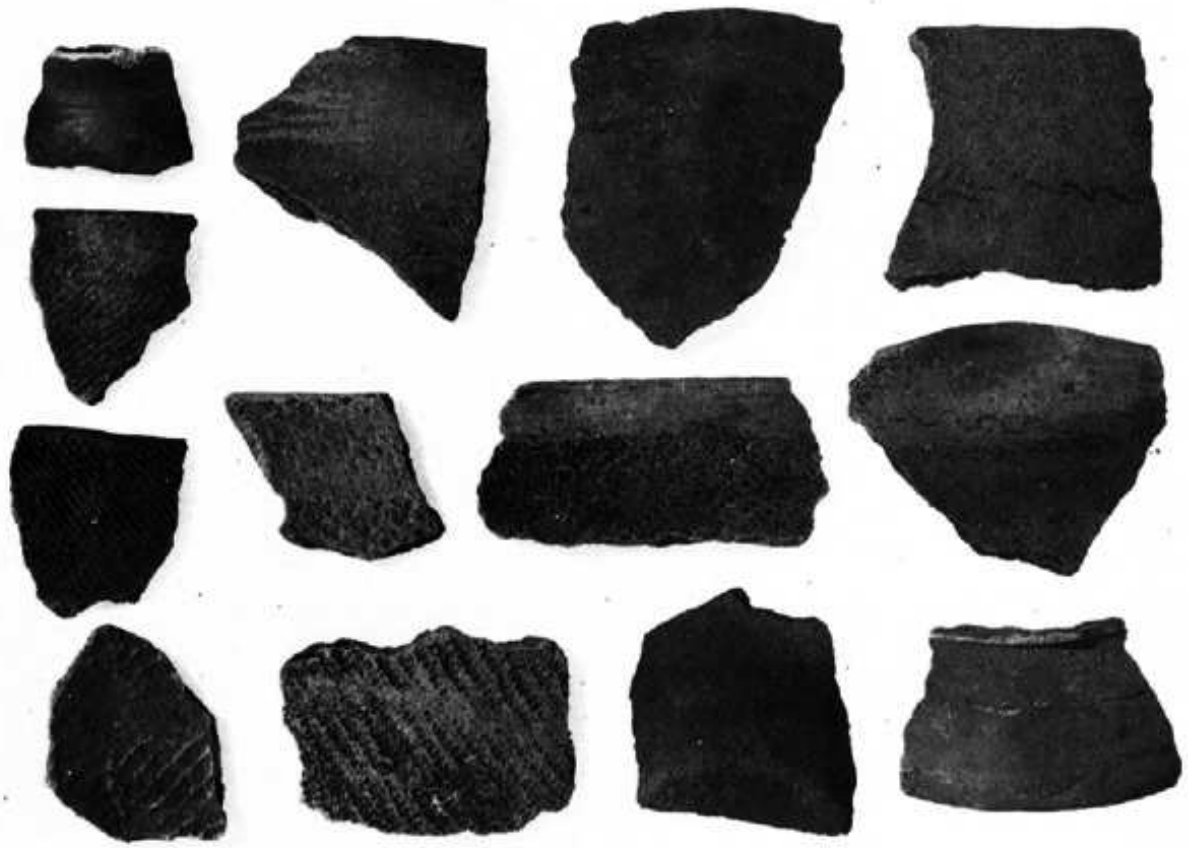


5号住居跡出土土器(3)（S＝½）

5号住居跡出土土器(4)（S＝½）

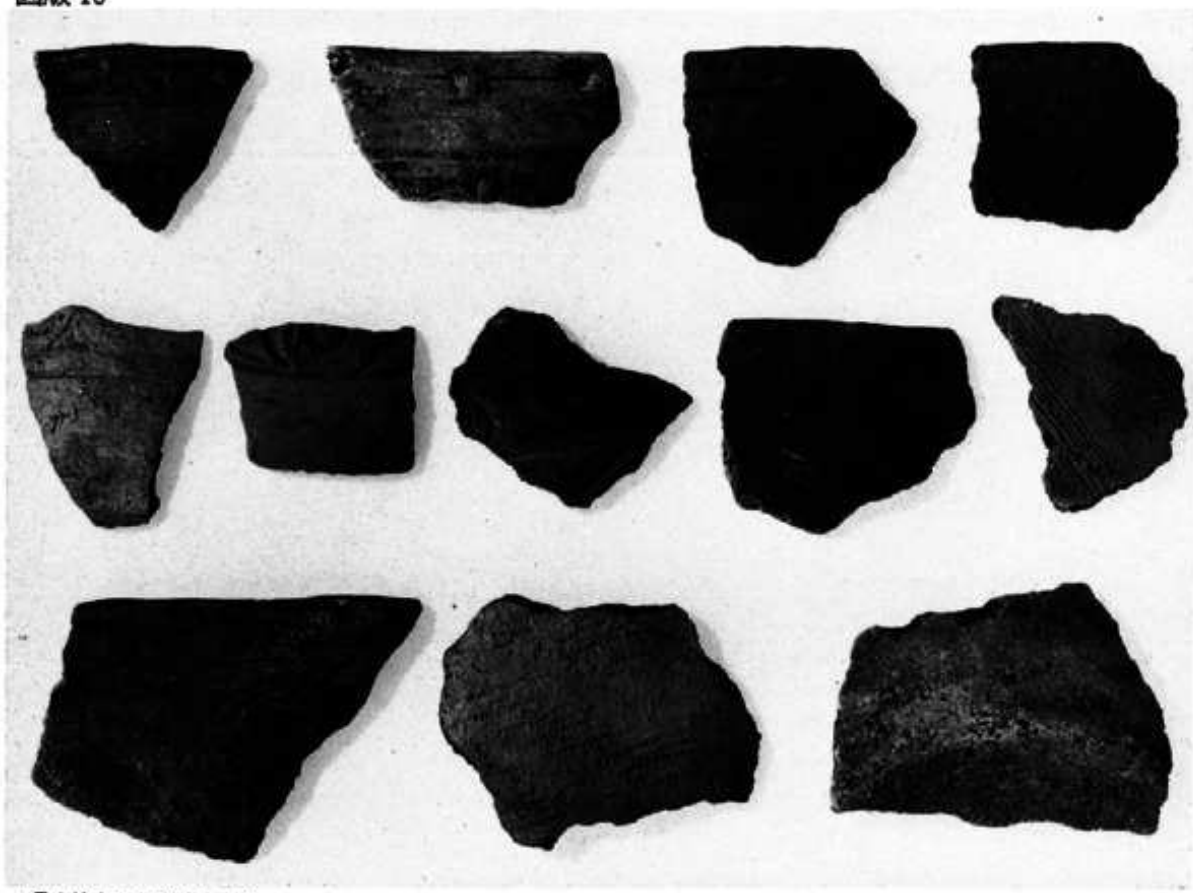


5号住居跡出土土器(5)（S＝½）

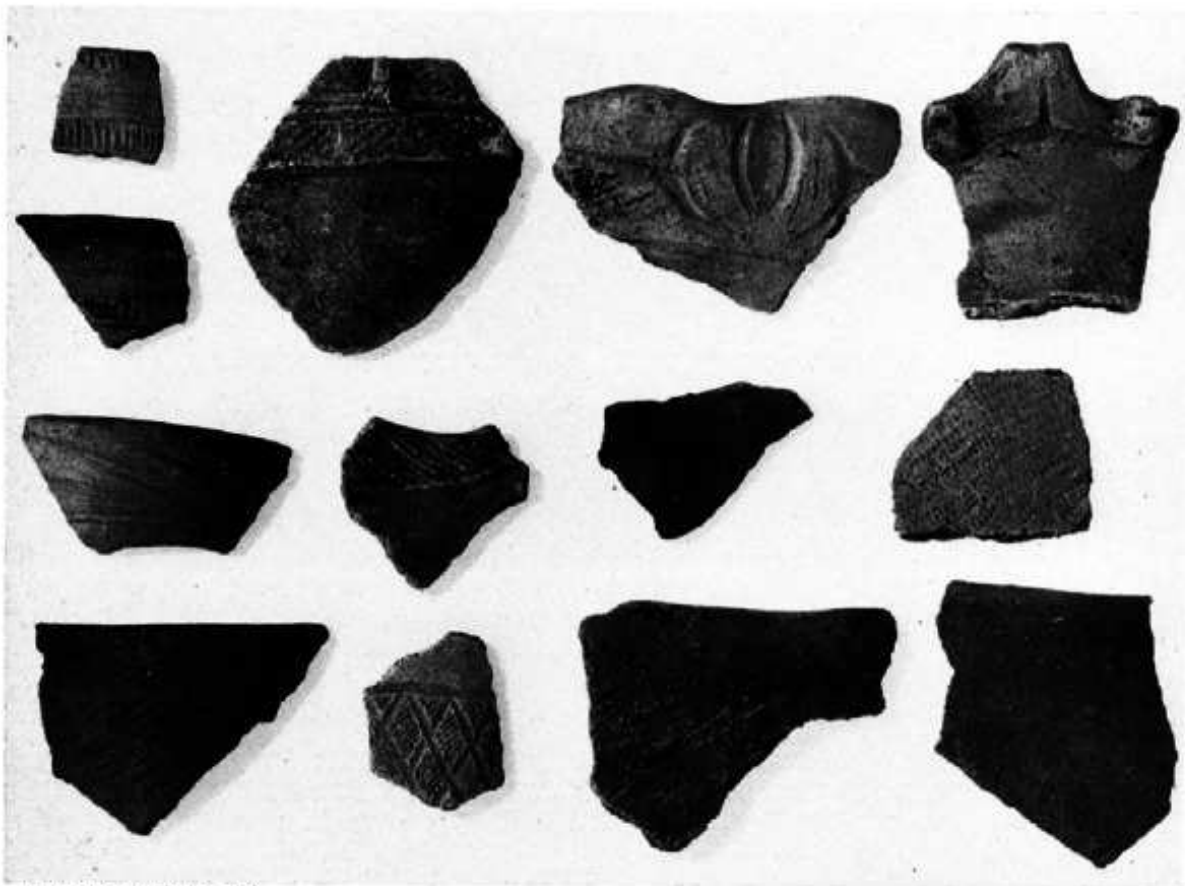


5号住居跡出土土器(6)（S＝½）

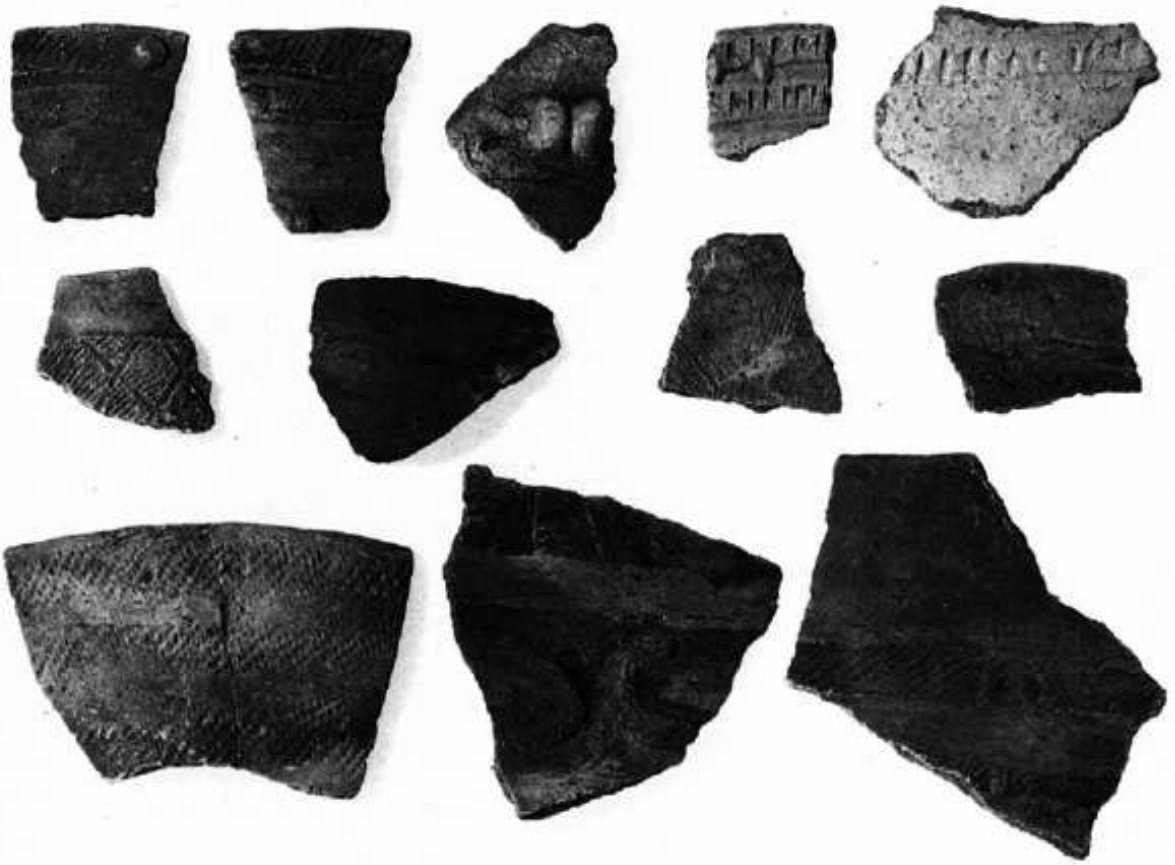
図版 16



6号土坑出土土器（S＝½）



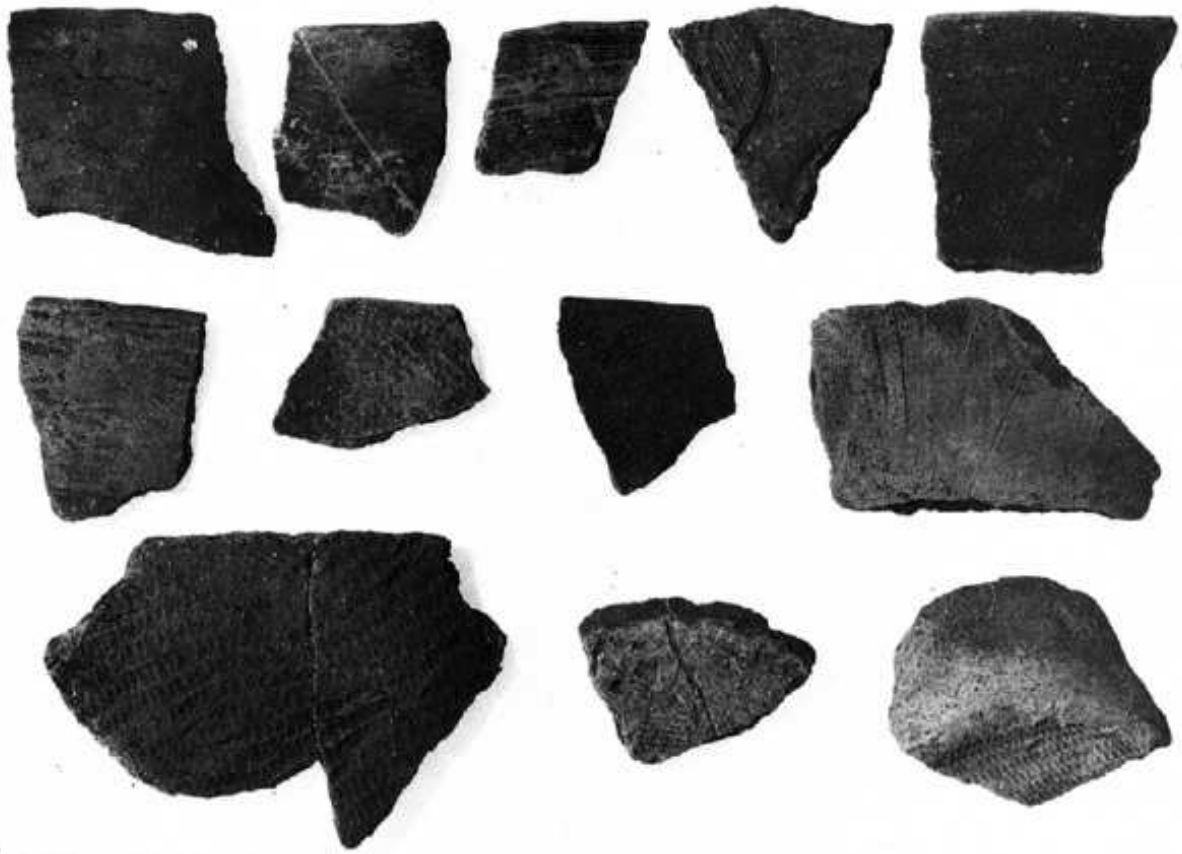
7号土坑出土土器（S＝½）



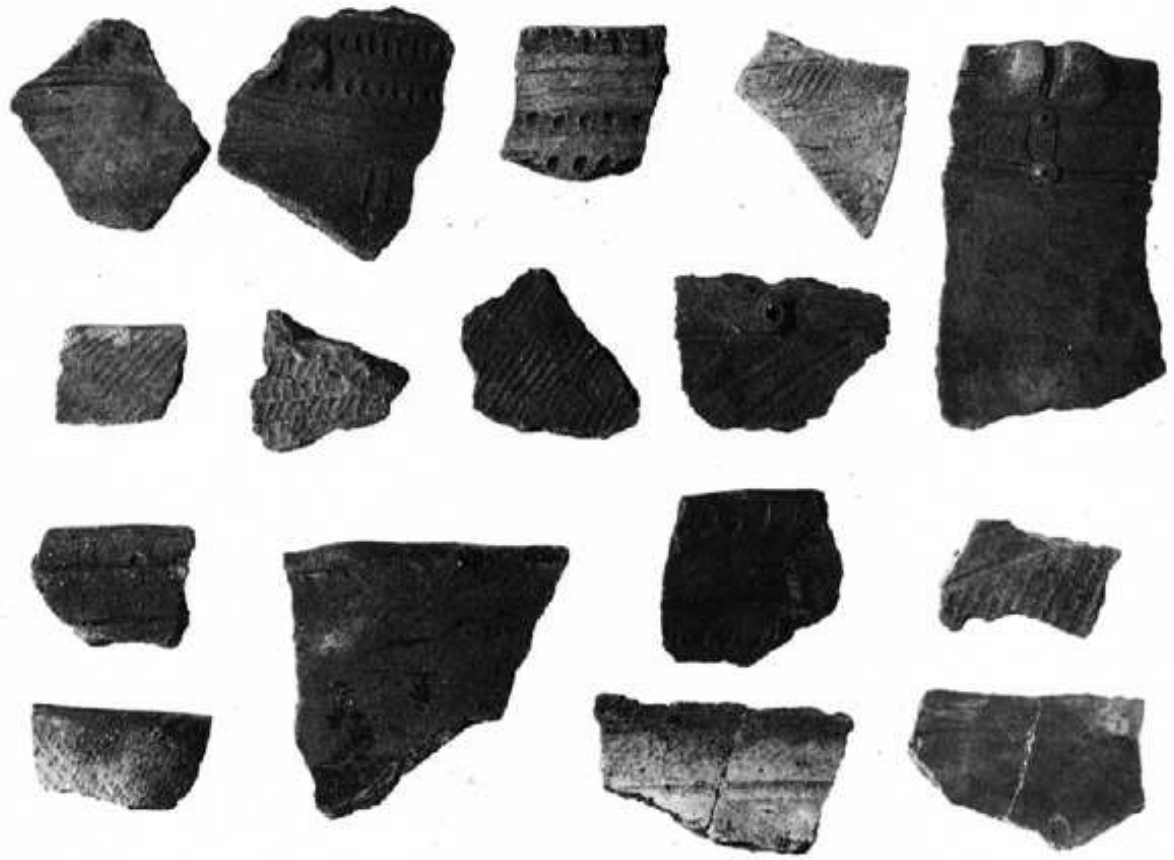
8号土坑出土土器（S＝½）

9号土坑出土土器(1)（S＝½）

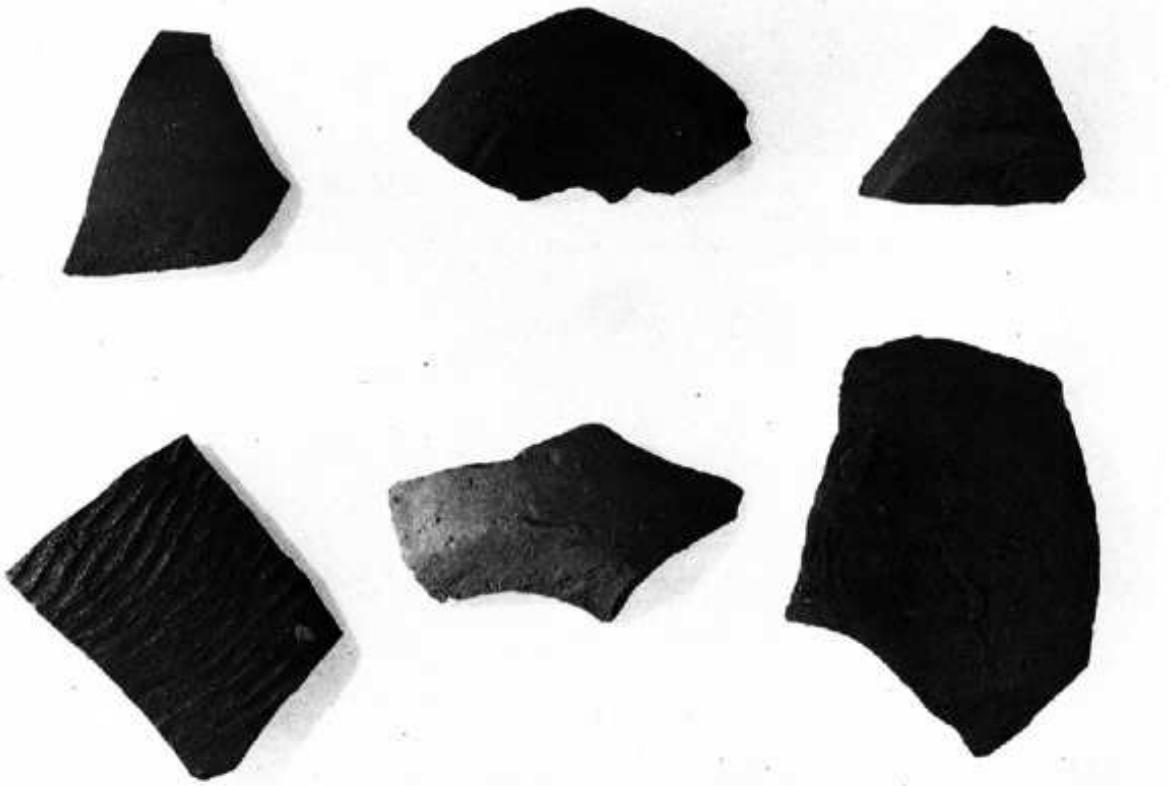
図版 18



9号土坑出土土器(2) (S=½)



10～15号土坑出土土器 (S=½)



1号住居跡出土土器（須恵器）（S＝½）

土製品（耳栓・土偶・円盤状土製品）（S＝1/1.5）

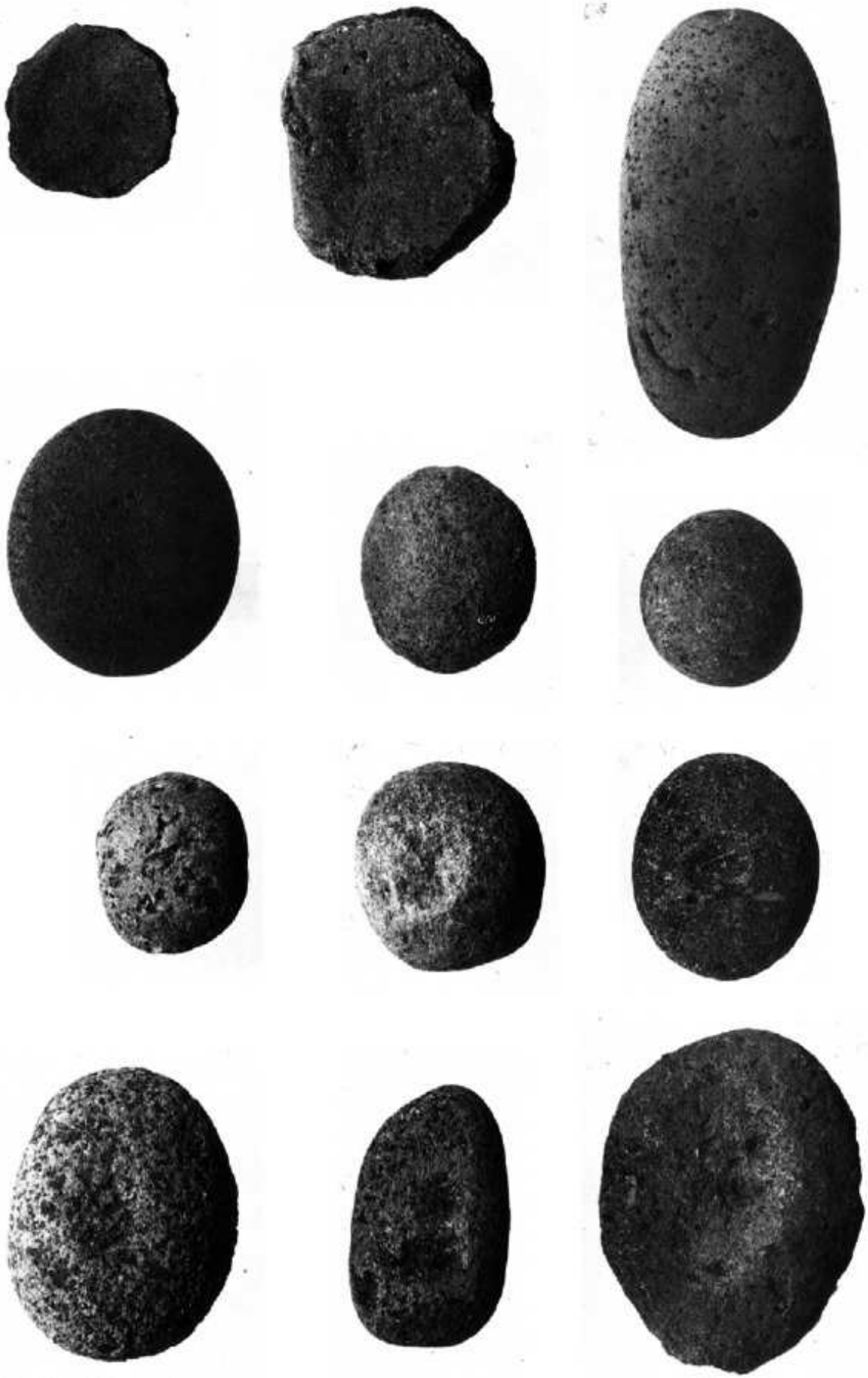
図版 20

完形土器（土師器・須恵器：S＝1/4）（縄文土器：S＝1/5）

打製石器（表）（S＝1/1.5）

石製品（石棒・磨製石斧）（S＝1/1.5）

図版 22



礫石器（S＝1/2.25）

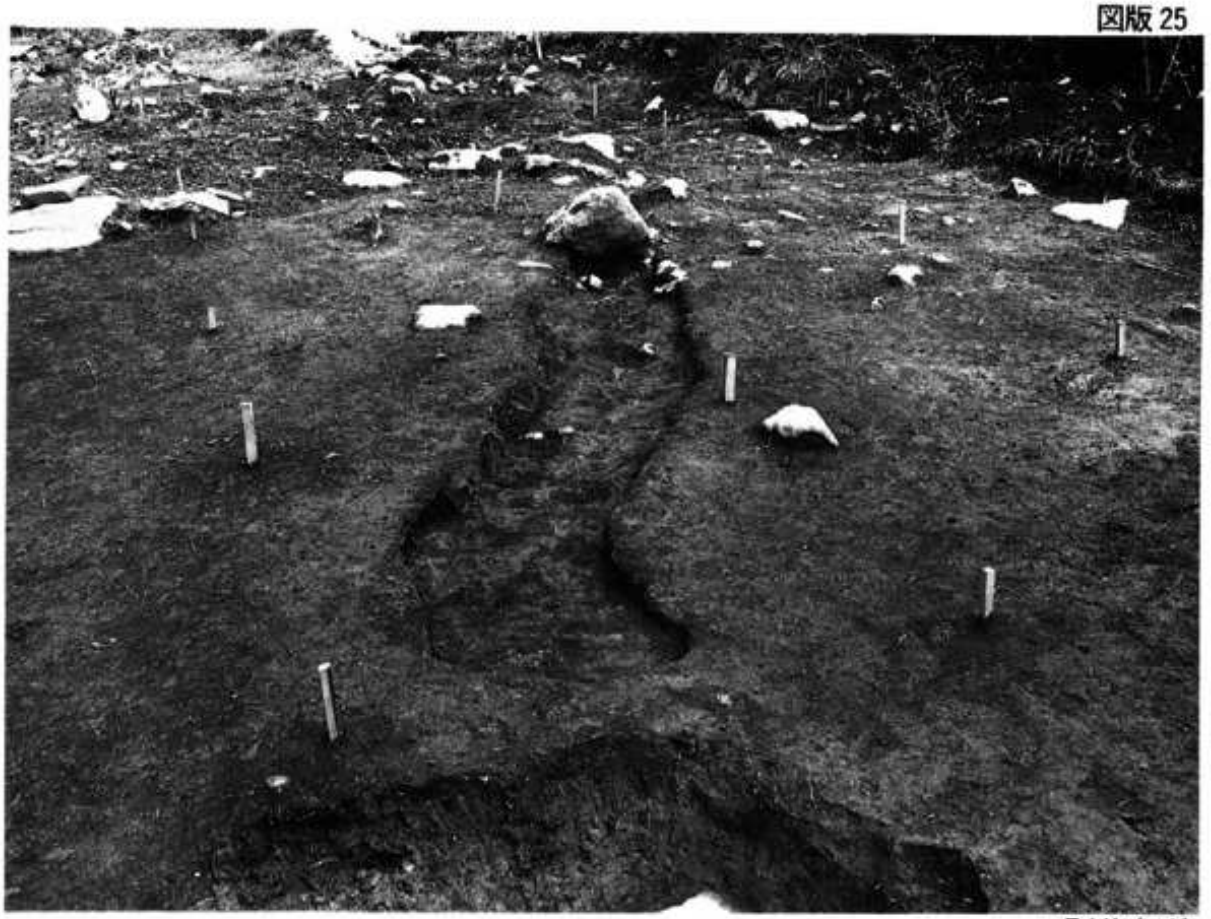
遺跡遠景（N↑）

遺跡近景（E↑）

図版 24

調査風景（W↑）

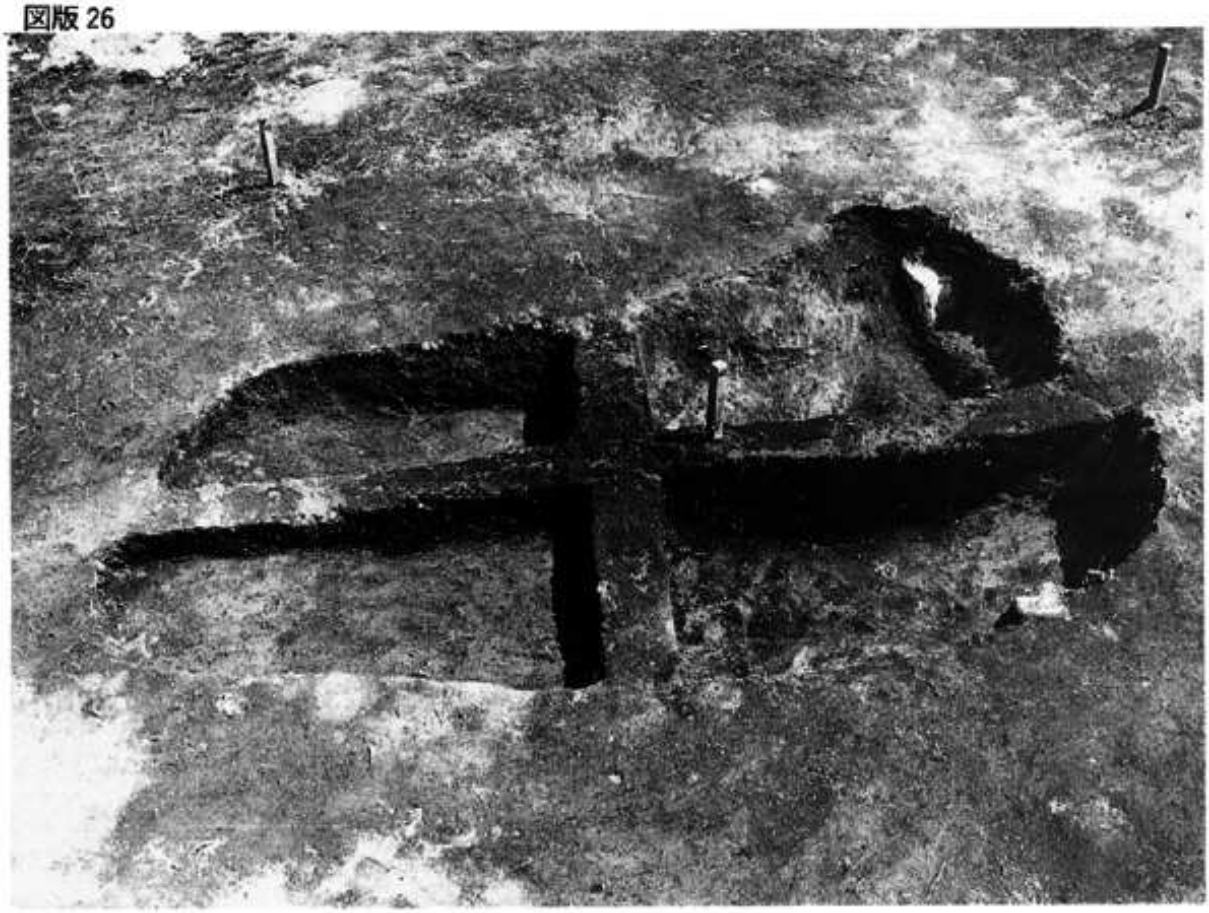
遺構完掘状況（W↑）



1号土坑（W↑）

2号土坑（SW↑）

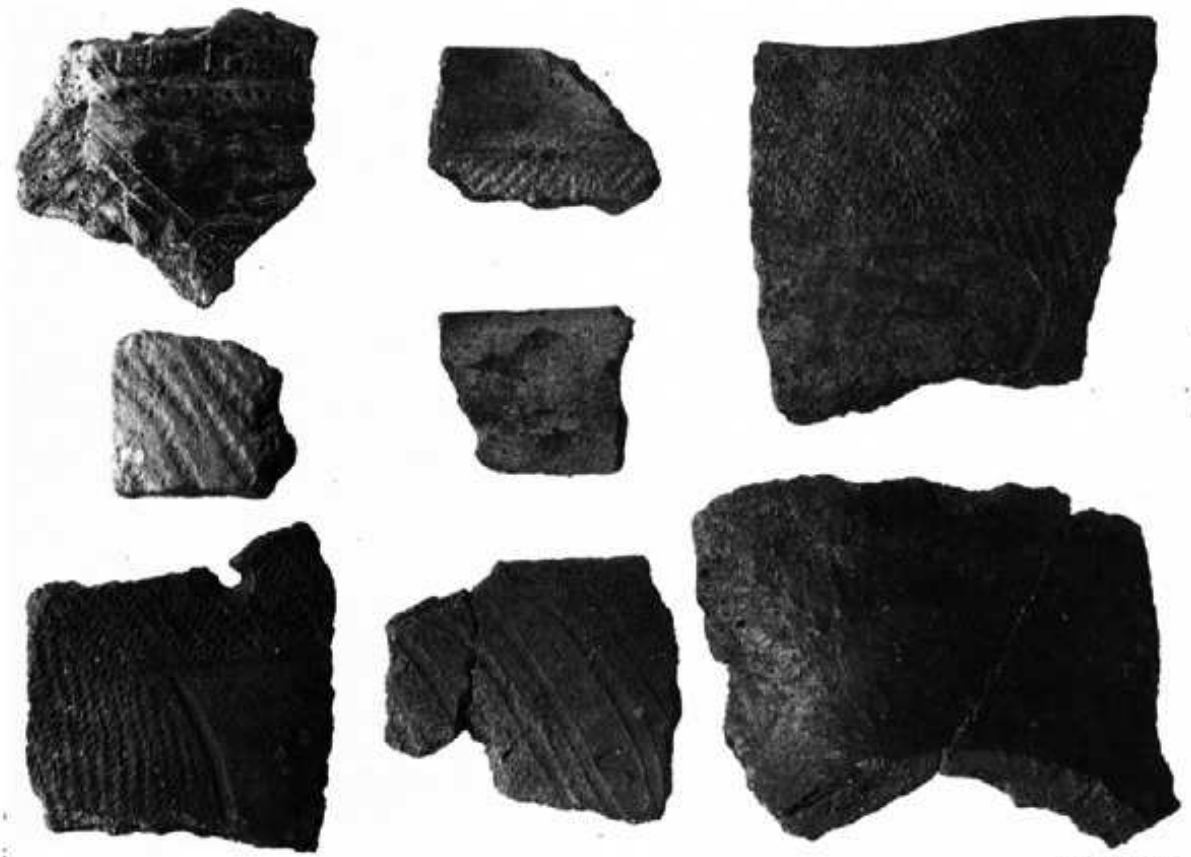
図版 26



4号土坑（S↑）

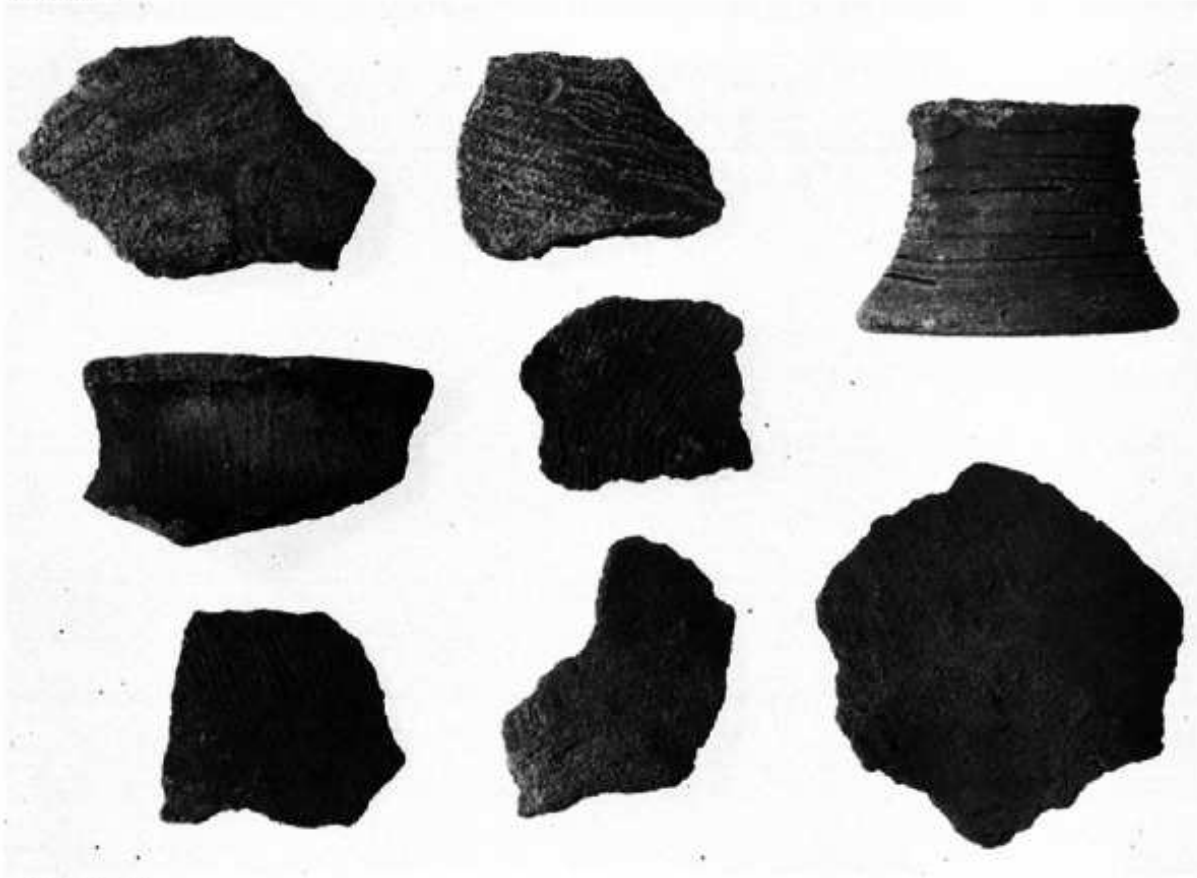
5号住居跡・8号土坑（S↑）

9号土坑（S 1）

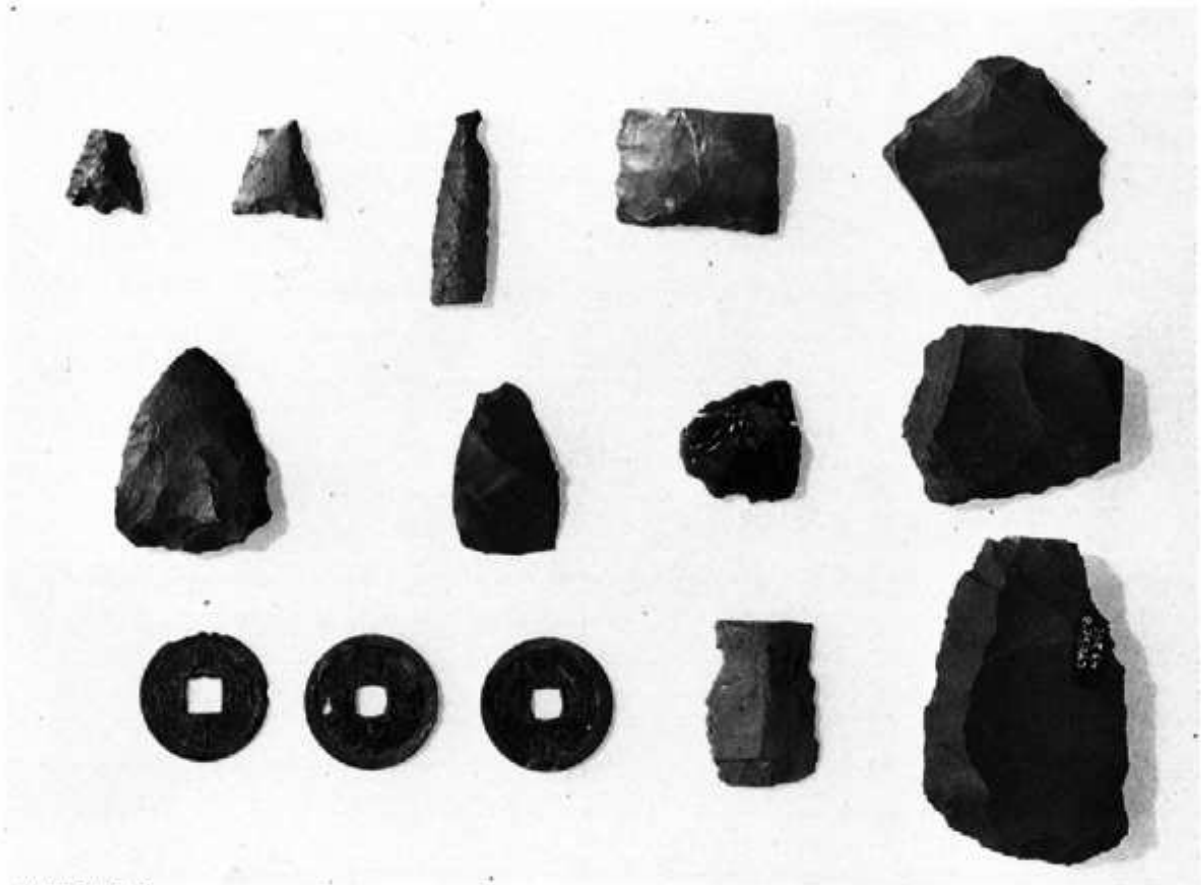


出土遺物（1）

図版 28



出土遺物（2）



出土遺物（3）

山形県埋蔵文化財調査報告書第133集

向山遺跡
関沢B遺跡
発掘調査報告書

昭和63年3月25日　印刷
昭和63年3月31日　発行

発行　山形県教育委員会
印刷　㈱大風印刷